

秋田県文化財調査報告書第452集

向 様 田 D 遺 跡 (第 2 次)

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI —



2010・3

秋田県教育委員会

2010・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

むかい　さま　だ
向 様 田 D 遺 跡 (第2次)

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI —

2010・3

秋 田 県 教 育 委 員 会



1 平成19年度の向様田D遺跡(調査前)遠景(南東から)



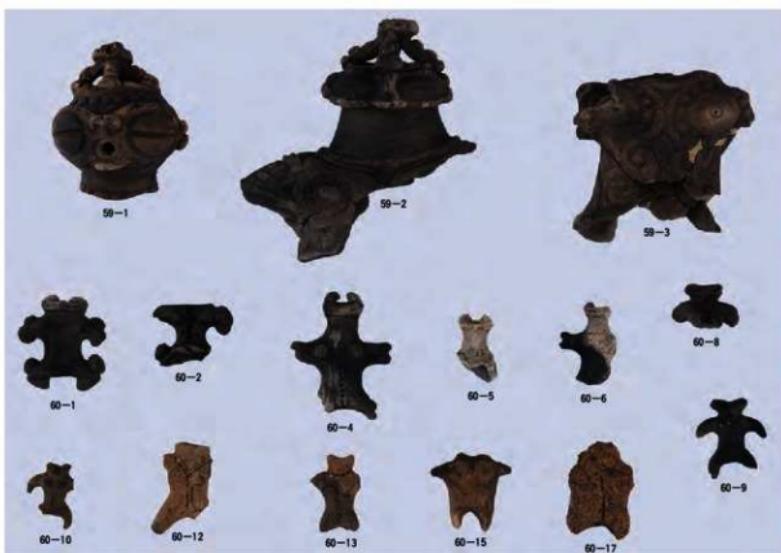
2 調査区全景とSM60盛土範囲確認状況(西から)



1 SQ127配石遺構とSM60盛土堆積状況(南東から)



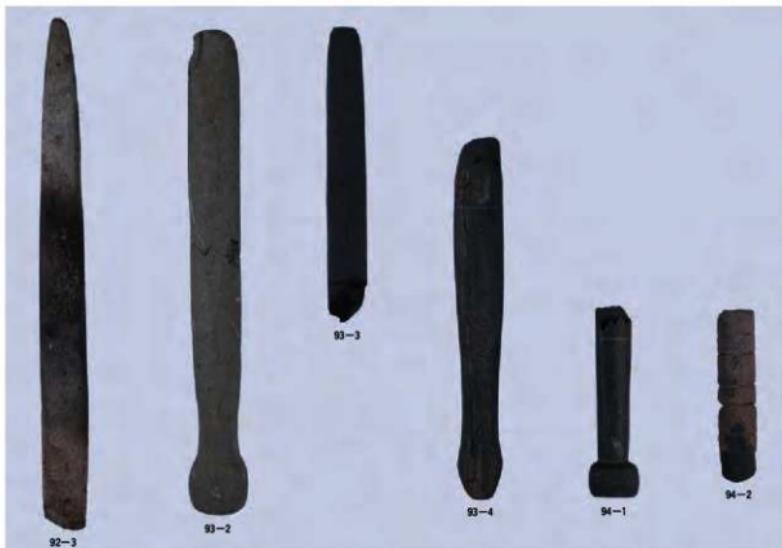
2 SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況(南から)



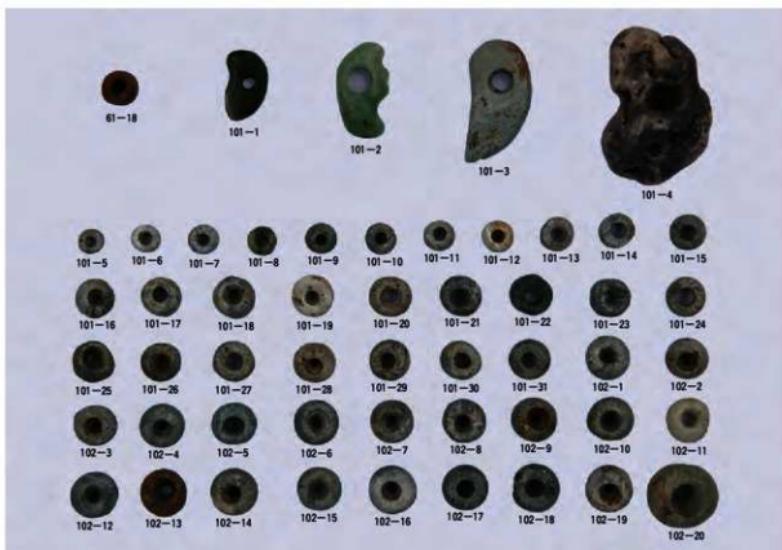
1 土偶(表)



2 土偶(裏)



1 石劍・石刀



2 玉類

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渇水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、そうした自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われております。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、森吉山ダム建設事業に先立って、平成19年度に北秋田市において実施した向様田D遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、盛土・配石遺構・土坑等が検出されました。盛土からは縄文時代晩期の大量の遺物も見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、北秋田市、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

秋田県教育委員会

教育長 根 岸 均

例　　言

- 1 本書は、森吉山ダム建設事業に伴い、平成19(2007)年度に発掘調査を実施した秋田県北秋田市(旧北秋田郡森吉町)森吉字向様田家ノ下モ14-1外に所在する向様田D遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は平成13(2001)年度に2,600m²の発掘調査を行っており、平成17(2005)年3月に、「向様田D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XIII-」秋田県文化財調査報告書第392集として報告している。今回の発掘調査対象地は遺跡北東側の工事用道路下にあった338m²である。本報告書では、平成13年度発掘調査を第1次調査、今回報告する平成19年度発掘調査を第2次調査とする。向様田D遺跡第2次調査成果については、既にその一部を『秋田県埋蔵文化財センター年報26(平成19年度)』および発掘調査報告会資料などによって公表しているが、本報告書を正式なものとする。また、SM60盛土層序については、第1次調査の所見を一部変更した。
- 2 本書第1図は、国土地理院発行の1/50,000地形図・「米内沢」・「大葛」を複製して作成した。第2図は、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所提供の1/1,000平面図をもとに作成した。
- 3 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を使用した。
- 4 発掘調査および整理作業における以下の作業を下記に委託した。
水準測量および方眼杭設置：有限会社ダイワ技術
掘削土移動・整地：池田建設株式会社
土器実測・トレース：NPO法人歴史・環境・まちづくり 株式会社アーキジオ
株式会社シン技術コンサル
土製品実測・トレース：株式会社ラング
石器・石製品実測・トレース：株式会社アルカ
遺物写真撮影：株式会社みどり光学社
- 5 以下の自然科学的分析は、下記に委託した。
石器石質鑑定：バリノ・サーヴェイ株式会社
黒曜石産地同定：株式会社パレオ・ラボ
動物遺存体同定：株式会社パレオ・ラボ
なお、辻 誠一郎東京大学大学院教授には、東京大学大学院新領域創成科学科による受託研究「遺跡出土の植物遺体から見た東北北部の生活文化史の研究－森吉山ダム関連遺跡発掘調査に伴う環境資料調査その2(平成19年度)」の一環として、向様田D遺跡SM60盛土の土壤分析をお願いした。しかしながら、良好な結果が得られなかつたため、ここでは分析結果報告は掲載しない。

6 本報告書の執筆は、第1章～第4章第2節8を榮瀬圭二が、第4章第2節9・第6章を榮一郎が行った。第5章は委託した自然科学的分析の結果報告を掲載した。掲載にあたっては、報告書全体の整合性をとるため、文意に影響を与えない範囲で、一部の用語・表現等を変更した。編集は榮が行った。

7 発掘調査および整理作業において、国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所・北秋田市教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また、平成17年度から平成20年度まで森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議を開催し、下記の検討会議委員の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。

岡田康博(平成20年度) 岡村道雄 高橋保雄(平成19年度まで) 辻 誠一郎 藤沼邦彦 山本輝久

凡　例

1 本報告書に掲載した平面図の方位は、日本測地系平面直角座標第X系座標北である。NP41グリッドにおける座標北と磁北との偏角は、西偏 $10^{\circ}20'$ である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。

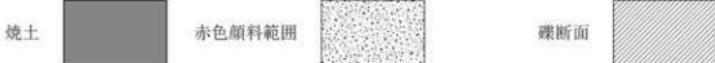
2 遺構については検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判断したものは欠番とした。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。

SK : 土坑	SM : 盛土	SQ : 配石遺構・立石遺構
SKP : 柱穴様ピット	SN : 焼土遺構	SX : 赤色顔料撒布跡

3 遺構実測図および遺物実測図には、それぞれスケールを付して縮尺を表示した。ただし、縄文土器の文様展開図のうち、縄文土器実測図(縮尺1/3)とは異なる縮尺としたものには、その縮尺のみを表記した。

4 挿図中に使用した網掛け等は以下の通りである。これ以外については、個々の頁に示した。

【遺構】



【遺物】



なお、土器・土製品・石製品の赤色顔料付着範囲については、網掛けを省略した場合がある。

5 卷頭図版および図版掲載遺物写真的縮尺は任意である。また、該当する遺物実測図を指示する場合は第1図1は1-1のように略記した。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iv
目次	v
挿図目次	vi
表目次	vii
図版目次	viii
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置と立地	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 発掘調査の概要	12
第1節 遺跡の概観	12
第2節 調査の方法	12
1 野外調査	12
2 室内整理	14
第3節 調査の経過	15
第4章 調査の記録	19
第1節 基本層序	19
第2節 検出遺構と出土遺物	20
1 概要	20
2 土坑	21
3 土器埋設遺構	22
4 配石遺構	22
5 立石遺構	23
6 焼土遺構	23
7 赤色顔料撒布跡	23
8 柱穴様ピット	24
9 盛土	25
第5章 自然科学的分析	179
第1節 向様田D遺跡出土石器等の石質鑑定報告	179
第2節 向様田D遺跡出土黒曜石製石器の産地同定	189

第3節 向様田D遺跡の動物遺体	194
第6章まとめ	197
報告書抄録	248

挿図目次

第1図 遺跡位置および周辺遺跡分布図	6
第2図 向様田D遺跡周辺図	13
第3図 方眼配置と畦および土層断面位置	39
第4図 道構配置図	40
第5図 SK104・129土坑	41
第6図 SR130土器裡設道構・SQ101立石道構・SN120焼土道構・SX122・123・124赤色顔料撒布跡	42
第7図 SQ127配石道構	43・44
第8図 SKP105・107・108・110・111・112・113・114柱穴様ピット	45
第9図 SKP115・116・117・118・119・131柱穴様ピット	46
第10図 SM60土層断面(1)	47・48
第11図 SM60土層断面(2)	49・50
第12図 SK104・SK129・SR130・SKP114出土遺物	51
第13図 SM60出土遺物(1)	52
第14図 SM60出土遺物(2)	53
第15図 SM60出土遺物(3)	54
第16図 SM60出土遺物(4)	55
第17図 SM60出土遺物(5)	56
第18図 SM60出土遺物(6)	57
第19図 SM60出土遺物(7)	58
第20図 SM60出土遺物(8)	59
第21図 SM60出土遺物(9)	60
第22図 SM60出土遺物(10)	61
第23図 SM60出土遺物(11)	62
第24図 SM60出土遺物(12)	63
第25図 SM60出土遺物(13)	64
第26図 SM60出土遺物(14)	65
第27図 SM60出土遺物(15)	66
第28図 SM60出土遺物(16)	67
第29図 SM60出土遺物(17)	68
第30図 SM60出土遺物(18)	69
第31図 SM60出土遺物(19)	70
第32図 SM60出土遺物(20)	71
第33図 SM60出土遺物(21)	72
第34図 SM60出土遺物(22)	73
第35図 SM60出土遺物(23)	74
第36図 SM60出土遺物(24)	75
第37図 SM60出土遺物(25)	76
第38図 SM60出土遺物(26)	77
第39図 SM60出土遺物(27)	78
第40図 SM60出土遺物(28)	79
第41図 SM60出土遺物(29)	80
第42図 SM60出土遺物(30)	81
第43図 SM60出土遺物(31)	82
第44図 SM60出土遺物(32)	83・84
第45図 SM60出土遺物(33)	85
第46図 SM60出土遺物(34)	86
第47図 SM60出土遺物(35)	87
第48図 SM60出土遺物(36)	88
第49図 SM60出土遺物(37)	89
第50図 SM60出土遺物(38)	90
第51図 SM60出土遺物(39)	91
第52図 SM60出土遺物(40)	92
第53図 SM60出土遺物(41)	93
第54図 SM60出土遺物(42)	94
第55図 SM60出土遺物(43)	95
第56図 SM60出土遺物(44)	96
第57図 SM60出土遺物(45)	97
第58図 SM60出土遺物(46)	98
第59図 SM60出土遺物(47)	99

第60図	SM60出土遺物(48)	100
第61図	SM60出土遺物(49)	101
第62図	SM60出土遺物(50)	102
第63図	SM60出土遺物(51)	103
第64図	SM60出土遺物(52)	104
第65図	SM60出土遺物(53)	105
第66図	SM60出土遺物(54)	106
第67図	SM60出土遺物(55)	107
第68図	SM60出土遺物(56)	108
第69図	SM60出土遺物(57)	109
第70図	SM60出土遺物(58)	110
第71図	SM60出土遺物(59)	111
第72図	SM60出土遺物(60)	112
第73図	SM60出土遺物(61)	113
第74図	SM60出土遺物(62)	114
第75図	SM60出土遺物(63)	115
第76図	SM60出土遺物(64)	116
第77図	SM60出土遺物(65)	117
第78図	SM60出土遺物(66)	118
第79図	SM60出土遺物(67)	119
第80図	SM60出土遺物(68)	120
第81図	SM60出土遺物(69)	121
第82図	SM60出土遺物(70)	122
第83図	SM60出土遺物(71)	123
第84図	SM60出土遺物(72)	124
第85図	SM60出土遺物(73)	125
第86図	SM60出土遺物(74)	126
第87図	SM60出土遺物(75)	127
第88図	SM60出土遺物(76)	128
第89図	SM60出土遺物(77)	129
第90図	SM60出土遺物(78)	130
第91図	SM60出土遺物(79)	131
第92図	SM60出土遺物(80)	132
第93図	SM60出土遺物(81)	133
第94図	SM60出土遺物(82)	134
第95図	SM60出土遺物(83)	135
第96図	SM60出土遺物(84)	136
第97図	SM60出土遺物(85)	137
第98図	SM60出土遺物(86)	138
第99図	SM60出土遺物(87)	139
第100図	SM60出土遺物(88)	140
第101図	SM60出土遺物(89)	141
第102図	SM60出土遺物(90)	142
第103図	SM60出土遺物(91)	143
第104図	黒曜石产地分布図(東日本)	191
第105図	向様田D遺跡出土黒曜石判別図(1)	192
第106図	向様田D遺跡出土黒曜石判別図(2)	192
第107図	黒曜石产地推定対象資料	193
第108図	向様田D遺跡出土骨角器・動物遺体	196

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	7
第2表	柱穴様ピット一覧	24
第3表	SM60盛土土層一覧	27
第4表	地区・層別土器出土量(1)	28
第5表	地区・層別土器出土量(2)	29
第6表	土製品・石器・石製品・骨角器内訳	31
第7表	器種別出土量(口縁部・台部)	33
第8表	掲載土器一覧(1)	144
第9表	掲載土器一覧(2)	145
第10表	掲載土器一覧(3)	146
第11表	掲載土器一覧(4)	147
第12表	掲載土器一覧(5)	148
第13表	掲載土器一覧(6)	149
第14表	掲載土器一覧(7)	150
第15表	掲載土器一覧(8)	151
第16表	掲載土器一覧(9)	152
第17表	掲載土器一覧(10)	153
第18表	掲載土器一覧(11)	154

第19表	掲載土器一覧(12)	155	第38表	掲載石器一覧(3)	174
第20表	掲載土器一覧(13)	156	第39表	掲載石器一覧(4)	175
第21表	掲載土器一覧(14)	157	第40表	掲載石器一覧(5)	176
第22表	掲載土器一覧(15)	158	第41表	掲載石製品一覧(1)	176
第23表	掲載土器一覧(16)	159	第42表	掲載石製品一覧(2)	177
第24表	掲載土器一覧(17)	160	第43表	掲載石製品一覧(3)	178
第25表	掲載土器一覧(18)	161	第44表	掲載骨角器一覧	178
第26表	掲載土器一覧(19)	162	第45表	石器類の石質鑑定結果表(1)	182
第27表	掲載土器一覧(20)	163	第46表	石器類の石質鑑定結果表(2)	183
第28表	掲載土器一覧(21)	164	第47表	石器類の石質鑑定結果表(3)	184
第29表	掲載土器一覧(22)	165	第48表	石器類の石質鑑定結果表(4)	185
第30表	掲載土器一覧(23)	166	第49表	石製品類の石質鑑定結果表(1)	186
第31表	掲載土器一覧(24)	167	第50表	石製品類の石質鑑定結果表(2)	187
第32表	掲載土器一覧(25)	168	第51表	石器類の器種別石材組成	188
第33表	掲載土器一覧(26)	169	第52表	石製品類の器種別石材組成	188
第34表	掲載土器一覧(27)	170	第53表	黒曜石産地(東日本)の判別群名称	191
第35表	掲載土器製品一覧	171	第54表	產地推定結果	194
第36表	掲載石器一覧(1)	172	第55表	向様田D遺跡出土動物遺体の同定結果	195
第37表	掲載石器一覧(2)	173			

図版目次

卷頭図版 1	1 平成19年度の向様田D遺跡(調査前)遠景 (南東から)	図版 2	1 SK104土坑確認状況(南から)
	2 調査区全景とSM60盛土範囲確認状況 (西から)		2 SK104土坑土層断面(南から)
卷頭図版 2	1 SQ127配石造構とSM60盛土堆積状況 (南東から)		3 SK104土坑土層断面(南から)
	2 SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況 (南から)		4 SK104土坑覆土上面浅鉢形土器出土状況 (南から)
卷頭図版 3	1 土偶(表)		5 SK104土坑完掘状況(南西から)
	2 土偶(裏)		6 SK104土坑完掘状況(南西から)
卷頭図版 4	1 石劍・石刀		7 SQ101立て造構確認状況(南から)
	2 玉類		8 SQ101立て造構土層断面(南から)
図版 1	1 平成13年度の向様田遺跡群全景(南西から)	図版 3	1 SQ127配石造構確認状況(南東から)
	2 平成13年度の向様田D遺跡全景(上が北)		2 SQ127配石造構断ち割り状況(南東から)
	3 平成19年度の向様田D遺跡(路盤掘削後)遠景 (南東から)		3 SK129土坑確認状況(北西から)
			4 SR130土器埋設造構土器埋設状況(西から)
			5 SR130土器埋設造構土器埋設状況(西から)
			6 SM60盛土第1次調査南北断面②(西から)

7	SM60盛土第1次調査NR38区東西断面② (南から)		8	SM60盛土C区(NP38a区)M57層浅鉢形土器確認状況
8	SM60盛土第1次調査NQ38区南北断面② (西から)	図版7	1	SM60盛土B区(NR38b区)M57層小玉群確認状況
図版4	1 SM60盛土確認状況(南西から) 2 SM60盛土NQ38c区南北断面②(西から) 3 SM60盛土NQ39区南北断面②(西から) 4 SM60盛土NS39区東西断面①(南西から) 5 SM60盛土NQ・NR39区東西断面① (南から) 6 SM60盛土NP・NQ39区東西断面① (南から) 7 SM60盛土NQ・NR39区東西畦①北壁土層断面 (北から) 8 SM60盛土NR38・39区南北断面① (南東から)		2	SM60盛土B区(NQ39b区)M57層岩版確認状況
			3	SM60盛土B区(NR39a区)M57層土偶確認状況
			4	SM60盛土B区(NR38b区)M57層透光器土偶確認状況
			5	SM60盛土B区(NR38b区)M57層浅鉢形土器・注口土器確認状況
			6	SM60盛土B区(NR38c区)M57層有孔石製品確認状況
			7	SM60盛土A区(NR38b・d区)M57層深鉢形土器・壺形土器確認状況
			8	SM60盛土NR39区東西畦①北壁土壤試料採取状況
図版5	1 SN120焼土遺構確認状況(北から) 2 SX122赤色顔料撒布跡確認状況(西から) 3 SX123赤色顔料撒布跡確認状況(南から) 4 SX124赤色顔料撒布跡確認状況(東から) 5 SX124赤色顔料撒布跡土層断面(北西から) 6 SM60盛土E区(NR39b区)M17層遺物確認状況 (東から) 7 SM60盛土A区(NS38区)M17層遺物確認状況 (南から) 8 SM60盛土B区(NQ39a・b区)M57層遺物確認状況(東から)	図版8	1	縄文土器
		図版9	1	縄文土器
		図版10	1	縄文土器
		図版11	1	縄文土器
		図版12	1	縄文土器
		図版13	1	縄文土器
		図版14	1	縄文土器
		図版15	1	縄文土器
		図版16	1	縄文土器
		図版17	1	縄文土器
		図版18	1	縄文土器
図版6	1 SM60盛土B区(NQ38d区)M17層土偶確認状況 2 SM60盛土B区(NQ39a区)M17層壺形土器・石瓢確認状況 3 SM60盛土C区(NQ38d・NR39a区)M17層焼骨確認状況 4 SM60盛土B区(NR38b区)M17層勾玉確認状況 5 SM60盛土E区(NR39d区)M17層壺形土器確認状況 6 SM60盛土B区(NQ39b区)M23層石刀確認状況 7 SM60盛土B区(NR38c区)M56層岩版確認状況	図版19	1	縄文土器
		図版20	1	縄文土器
		図版21	1	縄文土器
		図版22	1	縄文土器
		図版23	1	縄文土器
		図版24	1	縄文土器
		図版25	1	縄文土器
		図版26	1	縄文土器
		図版27	1	縄文土器
		図版28	1	縄文土器

図版29	1 梗文土器	図版38	1 梗形石器・二次加工ある剥片
図版30	1 梗文土器		2 二次加工ある剥片
	2 梗文土器	図版39	1 異形石器
図版31	1 梗文土器		2 石核
	2 梗文土器	図版40	1 凹石類
図版32	1 梗文土器		2 敷石・石皿
	2 梗文土器	図版41	1 打製石斧・磨製石斧
図版33	1 梗文土器		2 磨製石斧
	2 梗文土器	図版42	1 石劍・石棒
図版34	1 梗文土器	図版43	1 土版・岩偶・岩版(表)
	2 有孔円盤状土製品・円盤状土製品ほか		2 土版・岩偶・岩版(裏)
図版35	1 石錐・石槍	図版44	1 円盤状石製品
	2 石錐		2 有孔円盤状石製品・有孔石製品ほか
図版36	1 石匙	図版45	1 小玉未製品(表)
	2 石匙		2 小玉未製品(裏)
図版37	1 石範・スクレイバー		
	2 スクレイバー		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

米代川は、秋田・岩手の県境付近の奥羽山脈の中岳(標高1,024m)に源流をもち、秋田県北部を東から西へ流れ、31の支流を合わせながら能代市で日本海に注いでいる。平成19年度の向様田D遺跡第2次発掘調査期間中にも災害救助法の適用を受けるほどの被害を被ったが、米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた。^(註1)昭和47年7月5日～9日までの集中豪雨は米代川とその支流域に大洪水を引き起こし、特に米代川下流の旧二ツ井町や能代市の市街地などを浸水させ、甚大な被害を及ぼした。^(註2)翌年、この大洪水を機に「米代川系工事実施基本計画」が見直され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダム(のちに森吉山ダムと改称)が建設されることとなった。森吉山ダムは、昭和63(1988)年に「森吉山ダムの建設に関する基本計画」が公示され、洪水調節の他、既得取水の安定化・河川環境の保全、灌漑用水の供給、水道用水の供給、^(註3)水力発電などの多目的ダムとして建設されることとなった。

森吉山ダム建設に伴い、事業主体である建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)森吉山ダム工事事務所は、秋田県教育委員会に対し遺跡分布調査を依頼した。この依頼に基づき、秋田県教育委員会は、森吉山ダムによって水没する当該地域に関して遺跡分布調査を平成4(1992)年、平成5(1993)年の2か年にわたって実地し、その結果、新発見の桐内遺跡等の6遺跡が開発区域に係わることを確認した。^(註4)この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は引き続いて事業区域内の確認調査を実施していくことを申し合わせた。この協議を承けて秋田県教育委員会では、平成6(1994)年から平成10(1998)年までに遺跡分布調査および確認調査を実施し、60の遺跡の存在を確認^(註5)した。

森吉山ダム建設事業に係わる発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事工程と調整して発掘調査を実施する合意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。発掘調査最終年の平成19(2007)年には本報告の向様田D遺跡(第2次)、森吉家ノ前A遺跡(第3次)の発掘調査が実施された。秋田県教育委員会では、平成9(1997)年～平成19(2007)年までの11年間で、深渡遺跡・地蔵岱遺跡・姫ヶ岱C・D遺跡・桐内A～D遺跡・桐内沢遺跡・日廻岱A・B遺跡・向様田A～F遺跡・碎削遺跡・漆下遺跡・森吉家ノ前A・C遺跡・深渡A遺跡の計22遺跡の発掘調査を実施した。平成7(1995)年から発掘調査が実施された現北秋田市(旧森吉町)教育委員会担当分と合わせて、ダム事業区域内の全60遺跡のうち現状保存される9遺跡を除いた計51遺跡について発掘調査がすべて完了した(第1表)。

向様田D遺跡の発掘調査(第1次)は、平成13年度(2001年5月17日～10月19日)に実施した。調査の結果、遺跡北端に造成された工事用道路下に、遺跡北端部およそ500m²が係ることが判明した。森吉山ダム工事事務所との調整の結果、平成19年度に当該地点の発掘調査(第2次)を実施することとなった。

第2節 調査要項(※職名等は当時のものである)

遺 跡 名	向様田D遺跡(遺跡略号: 2MSD-D)
遺 跡 所 在 地	秋田県北秋田市森吉字向様田家ノ下モ14-1外
調 査 期 間	平成19(2007)年7月2日~10月22日
調 査 目 的	森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	338m ²
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	塙瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター北調査課 学芸主事) 山田祐子(秋田県埋蔵文化財センター北調査課 文化財主事) 武藤祐浩(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室 学芸主事兼班長)
総 务 担 当 者	袴田幸樹(秋田県埋蔵文化財センター北調査課 主査)
調 査 協 力 機 閣	国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所 北秋田市教育委員会
森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議委員	岡村道雄(奈良文化財研究所 企画調整部長) 高橋保雄(新潟県埋蔵文化財調査事業団 専門調査員) 辻 誠一郎(東京大学大学院 教授) 藤沼邦彦(弘前大学 教授) 山本暉久(昭和女子大学 教授)

註1 無明舎出版編 『秋田県昭和史』 無明舎出版 1989(平成元)年

註2 無明舎出版編 『秋田県近代総合年表』 無明舎出版 1988(昭和63)年

註3 川村公一 『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』 モリトビア選書2 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年

註4 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第251集 1994(平成6)年

註5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

向様田D遺跡(北緯 $40^{\circ}2'27''$ 、東経 $140^{\circ}28'30''$)は、秋田県北秋田市(旧森吉町)に所在し、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅の南東約5.5km、森吉山の北麓を西流する小又川中流部右岸段丘上の向様田地区に位置する。向様田地区には向様田D遺跡の他に、向様田A・B・C・E・F遺跡の5遺跡が隣接して所在している。向様田遺跡群の立地する向様田地区は、森吉山ダム完成時には湛水区域となる。

遺跡の所在する旧森吉町は秋田県の内陸北部に位置し、旧町西部を北流する阿仁川と鹿角市境から流れ出て阿仁川に合流する小又川の流域からなる。東は鹿角市・旧仙北郡田沢湖町(仙北市)、北は旧北秋田郡鷹巣町・合川町(以上北秋田市)・比内町(大館市)、西は北秋田郡上小阿仁村と接する。南の旧北秋田郡阿仁町(北秋田市)との境に、町名の由来となった標高1,454mのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山があり、その東側一帯は森吉山県立自然公園となっている。森吉山の北側には、谷底平野である小又川低地を挟んで、北北東に小繁森(標高1,010m)、北に高烏帽子(標高764m)、北西に源五郎岳(標高559m)などが東西に連なっており、森吉山頂上からの距離は、いずれも約10~11kmである。これらの山地は分水嶺をなし、行政区画上も旧鷹巣町や旧比内町との境界をなしている。

本遺跡近くを流れる小又川は、旧北秋田郡(北秋田市)・旧仙北郡(仙北市)・鹿角市の境界をなす三ツ又森(標高1,119m)・柴倉岳(標高1,178m)に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連瀬沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落や耕作地が分布する段丘面が認められ、向様田遺跡群が位置する中流部周辺では六段の段丘面が確認される。^(註1)山麓の段丘面線辺部は、一般に集村形態をとる集落の居住地として利用され、段丘面の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進むとともに場整備事業が行われた。向様田遺跡群は小又川右岸の源五郎岳山地が南に張り出した山裾につながる段丘面上にある。その段丘の最低位に向様田D遺跡と隣接する向様田A・B・F遺跡は立地する。当該段丘面は東西約480m、南北約200mにわたって広がり、標高は134~138m前後、小又川との比高は10~15m前後である。段丘南崖下には標高132~133m前後の極めて狭小な段丘面も存在し、向様田C遺跡が立地する。また、段丘面北側の標高150~159m前後のより高位の段丘面には向様田E遺跡が立地する。

向様田D遺跡が立地する最低位の段丘面上には鳥越軽石質火山灰層などのテフラ起源の堆積物は明確ではなく、完新世初頭前後に形成された段丘面の可能性が強い。向様田D遺跡が立地する最低位の段丘面は、小又川に面する南半側が微高地部となり、北半側は後背低地となっている。南半側微高地部は、大勢として西から東に向かって標高が増し、西から順に、向様田D遺跡、向様田A遺跡、向様田B遺跡、向様田F遺跡が位置している。向様田D遺跡は当該地域の最も低位部に立地し、その標高は134m前後である。東隣の向様田A遺跡の間には南北方向に開析された埋没谷が存在し、両遺跡の比高は1~2m前後である。^(註2)また、本遺跡と小又川との比高は15m前後である。

第2節 歴史的環境

森吉山ダム建設事業においては、ダム建設用地および貯水池用地を中心とした、小又川中流域のおよそ1,200,000m²が直接的に事業に係わる地域であった。当該地域は、平成3年刊行の『秋田県遺跡地図(県北版)』においては鷲ノ瀬遺跡など2か所、小又川流域全体でも10数か所程度の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)^(註3)が掲載されていたにすぎなかった。平成4年以降、秋田県教育委員会が実施した森吉山ダム建設事業に係る分布調査および確認調査により、現在、当該地域内には計60遺跡が確認されている。以下では、発掘調査が行われた森吉山ダム建設事業地内の遺跡をとりあげ、住居跡の分布状況を中心に本遺跡周辺の歴史的変遷を概観する。なお、文中()内の数字は、第1図および第1表と対応する。

旧石器時代の遺跡には、小又川中流域左岸の標高150~154mの緩斜面上に立地する二重鳥A遺跡(9)がある。調査では、2か所の石器集中出土地点が確認され、ナイフ形石器、搔器、石刃、剥片など、あわせて400点あまりの旧石器が出土した。主体をなす石器群は大きくは東山系石器群に位置づけられている。^(註5)また、二重鳥B遺跡(10)やネネム沢A遺跡(21)でも若干量であるが、旧石器時代の遺物が出土している。現時点では、小又川流域における旧石器時代資料は限定されており、当該時代の様相については不明瞭な部分が大きい。

縄文時代においては、現段階では早期になり遺跡が確認される。早期~前期初頭の遺跡として、日廻岱B遺跡(5)、森吉B遺跡(28)、桐内A遺跡(33)、姫ヶ岱C遺跡(37)、向様田B遺跡(47)、地蔵岱遺跡(55)などがある。地蔵岱遺跡で竪穴住居跡1軒、森吉B遺跡で土坑1基がそれぞれ確認されているほかは、遺物が断片的に出土しているのみである。向様田B遺跡、地蔵岱遺跡は小又川の最低位段丘面上に立地しており、遅くとも早期~前期初頭までは最低位段丘面は離水し、居住も含めた一定の活動の対象範囲となったものと考えられる。現在の調査結果からは、当該期には大規模な集落は未だ成立せず、小規模集団が断続的に小又川流域で活動したものと想定できよう。

前期中葉~後葉になると複数の遺跡で竪穴住居跡が確認される。前期中葉では深渡遺跡(52)、地蔵岱遺跡(55)で各6軒、二重鳥C遺跡(11)で3軒、後葉には日廻岱B遺跡(5)で2軒、森吉家ノ前A遺跡(24)で1軒の竪穴住居跡が確認されている。さらに、二重鳥B遺跡(10)では、中葉から後葉にかけてと推定されるいわゆるロングハウス状の大形住居跡が4軒検出されている。この頃から一定規模の集落が出現し、徐々に定住および集住化が進んでいったと考えられる。

中期になると遺跡数がより増加し、それに伴い竪穴住居跡の検出例も増加する。前葉では、桐内沢遺跡(3)で1軒、二重鳥C遺跡(11)で2軒、漆下遺跡(6)で4軒、二重鳥B遺跡(10)で5軒の竪穴住居跡が検出されている。前期中葉~後葉と同様に小規模な集落が点在していたと考えられる。中葉になると、桐内C遺跡(1)、二重鳥D遺跡(12)、水上ミ遺跡(17)、森吉家ノ前A遺跡(24)、桐内A遺跡(33)でそれぞれ1軒、二重鳥B遺跡(10)、二重鳥E遺跡(13)、二重鳥G遺跡(15)で各2軒、漆下遺跡(6)で3軒、二重鳥C遺跡(11)で14軒が検出されおり、前葉に比べ住居数が増加する傾向を認めることができる。後葉には、上ハ岱B遺跡(8)、二重鳥D遺跡(12)、二重鳥E遺跡(13)、橋場岱C遺跡(41)、橋場岱F遺跡(44)、向様田A遺跡(46)、向様田D遺跡(49)、深渡A遺跡(53)、碎洞遺跡(59)でそれぞれ1軒、桐内D遺跡(2)、二重鳥B遺跡(10)、水上ミ遺跡(17)、深渡遺跡(52)で各2軒、漆下遺跡(6)、二重鳥C遺跡(11)、姫ヶ岱D遺跡(38)で各3軒、上ハ岱A遺跡(7)で4軒、姫ヶ岱C遺跡(37)で5軒、

二重鳥A遺跡(9)で7軒、森吉家ノ前A遺跡(24)で10軒、二重鳥B遺跡(10)で13軒の堅穴住居跡が検出されており、中葉よりもさらに住居数が増加する。当該期の住居跡検出遺跡数は21遺跡を数えるが、一般に住居は段丘の縁辺に散発的に立地する傾向がある。これに対し、二重鳥B遺跡では全体で13軒の住居が台地縁辺部に環状に巡る環状集落の様相を呈し、注目される。

なお、中期後葉の住居跡は複式炉を伴う堅穴住居が特徴的であるが、このうち、深渡遺跡および隣接する深渡A遺跡では、堅穴壁際に礫が巡る住居跡が各1軒存在する。住居廃絶時に複式炉を組み替え、さらに壁際に礫を巡らして堅穴を埋め戻している。埋め戻し時には壁際の礫の上半は地表面に露出しており、環状もしくは弧状の配石遺構と評価することができる。住居に伴う炉と係わる屋内祭祀が住居外の配石遺構と係わる屋外祭祀へと変質する過渡期の様相を示している可能性があろう。なお、橋場岱B遺跡(40)では、詳細な時期は特定できないが、本時期前後に属する例が比較的多い溝状平面の陥し穴が4基検出されている。森吉山ダム建設事業地内では唯一の検出例であり、本地域内では陥し穴は盛行しなかった可能性が高い。本地域の動物相とその狩獵法を検討する上で注意すべきであろう。

後期初頭には、桐内C遺跡(1)、姫ヶ岱D遺跡(38)、深渡遺跡(52)でそれぞれ1軒、姫ヶ岱C遺跡(37)で2軒、漆下遺跡(6)で5軒が検出されており、これらの遺跡の堅穴住居跡分布状況は基本的に前時期の一般的な分布状況と共通するものと考えられる。これに対し、日廻岱B遺跡(5)では、長軸約60mの空閑地の周囲に50軒前後の住居が環状もしくは「い」の字形に立地する。中央の空閑地には土坑等の規則的かつ集中的な分布は認められないが、中央広場の周囲に住居が集中的・累積的に巡り、前時期の二重鳥B遺跡と同じく、環状集落の一形態と評価できる。日廻岱B遺跡で環状集落が形成された時期には、約600m上流の漆下遺跡で上述した数軒の堅穴住居が営まれるとともに、多数の土坑墓や配石遺構が造営され始める可能性がある。この時期には、集団の集住化と呼応するように、墓域や祭祀域を居住域とは別地点に設けるものと想定される。これ以降、墓域や祭祀域として関連する諸施設を特定の地点に集約することが遺跡構造の大きな特徴となる。

後期前葉～中葉になると、堅穴住居跡の検出例は激減する。前葉では二重鳥C遺跡(11)で1軒、桐内C遺跡(1)で3軒、中葉では漆下遺跡(6)で4軒、森吉家ノ前A遺跡(24)、向様田D遺跡(49)で各1軒検出されているのみである。後葉には再び堅穴住居跡の検出数が増え、二重鳥D遺跡(12)で12軒、二重鳥E遺跡(13)、二重鳥H遺跡(16)で各6軒、二重鳥A遺跡(9)、桐内A遺跡(33)で各5軒、橋場岱A遺跡(39)で2軒、二重鳥B遺跡(10)、姫ヶ岱D遺跡(38)、橋場岱C遺跡(41)で各1軒が検出されている。これに対し、漆下遺跡では、後期前葉から中葉前後の多数の配石遺構のほか、70棟以上の掘立柱建物跡が分布するとともに、大量の遺物が出土している。堅穴住居跡の分布状況からは、後期前葉から後葉には小規模な集落が点在し、初頭における日廻岱B遺跡のような大規模な環状集落は継続しない。その一方で、漆下遺跡では、堅穴住居数は限られるものの、大量の遺物が出土しており、多数の掘立柱建物跡が居住施設であった可能性も想定し得る。ただし、併存する堅穴住居との関係など検討すべき問題も多く、該期の集落の様相に実態は必ずしも明確ではない。このほか、二重鳥B遺跡では、後期後葉の土製耳飾りが200点近くも出土しており、当該期の装飾品の製作と流通を考える上で注目される。

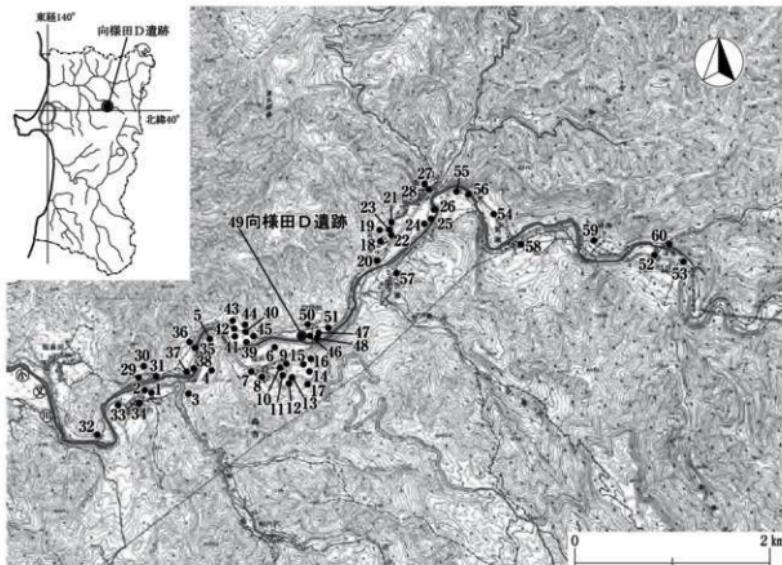
後期末から晩期になると、堅穴住居跡の検出例は減少する。後期末～晩期前葉では、日廻岱B遺跡

(5)、橋場岱F遺跡(44)、深渡遺跡(52)で各1軒、姫ケ岱D遺跡(38)、向様田F遺跡(51)で各2軒、二重鳥E遺跡(13)で3軒確認されている。晩期後葉では二重鳥A遺跡(9)で3軒、水上ミ遺跡(17)で2軒、上ハ岱B遺跡(8)、二重鳥E遺跡(13)で1軒検出されているのみである。一方、向様田A遺跡(46)や向様田D遺跡(49)などから成る向様田遺跡群では晩期前葉から中葉にかけての大規模な配石遺構や盛土あるいは捨て場が形成され、多様かつ活発な祭祀活動等が行われたものと推定される。この時期に掘立柱形式の平地住居が一般化した痕跡は認め難く、現状の竪穴住居跡の確認状況が当時の実態をほぼ反映するものと考えられる。これらのことから、当該時期においては、小又川流域では1軒もしくは2軒程度の竪穴住居居住集団が小又川流域内に通常はそれぞれ分散居住し、特定時期に向様田遺跡群に集まり、盛んに祭祀活動等を行ったものと想定される。

弥生時代では住居は未確認であり、集落の実態は不明である。二重鳥F遺跡(14)でフラスコ状土坑4基、土坑1基、桐内A遺跡(33)、日廻岱B遺跡(5)、橋場岱B遺跡(40)などで遺物が検出されている。これらの遺跡は縄文時代の遺跡と重複しており、その立地は縄文時代と顕著な違いを認めることはできない。水稻耕作の有無をはじめ、当該時代の生業活動等の詳細は不明瞭である。

古墳時代もしくはそれに併行する時代に属する遺跡は、小又川流域では確認できず、以前に存在した集落等は断絶したものと考えられる。小又川流域に再び集落が形成されるのは、古代以降のことである。

古代では、向様田E遺跡(50)で古代の竪穴住居跡3軒が検出されており、小規模な防御性集落が形



第1図 遺跡位置および周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧

成されていた可能性が報告されている。また、森吉家ノ前A遺跡(24)でも堅穴住居跡が1軒確認されている。天津場A遺跡(18)、ネネム沢A遺跡(21)、橋場岱B遺跡(40)、惣瀬遺跡(57)で古代の遺構・遺物が確認されている。古代後半には、地蔵岱遺跡(55)に大規模な集落が出現する。多数の堅穴住居や製鉄関連遺構が分布するほか、総延長200m以上に及ぶ環壕を巡らすなど、小又川流域における拠点的な中心集落であったとらえることができる。

中世では、地蔵岱遺跡(55)、森吉家ノ前A遺跡(24)、森吉家ノ前B遺跡(25)、森吉家ノ前C遺跡(26)で集落が営まれている。地蔵岱遺跡は、古代後半から中世まで基本的に継続して営まれたと考えられる。多数の建物跡や火葬墓、荒型を含む多量の木製品が出土した水場遺構などが分布するほか、中世後半には幅2mの大溝で集落を区画するなど、引き続き拠点的な中心集落であったと考えられる。一方、地蔵岱遺跡の対岸に位置する森吉家ノ前A遺跡でも多くの掘立柱建物跡が確認され、大規模な集落が営まれている。ここでも集落を区画すると考えられる堀状の大溝跡も検出されており、両遺跡の推定継続年代を勘案すると、地蔵岱遺跡から対岸の森吉家ノ前A遺跡へ当時の中心集落が移動した可能性も想定される。

近世の遺跡では、日廻岱B遺跡(5)で掘立柱建物跡7棟、地蔵岱遺跡(55)、日廻岱A遺跡(4)で掘立柱建物跡各2棟、森吉B遺跡(35)、地蔵岱A遺跡(56)で掘立柱建物跡各1棟がそれぞれ検出されている。菅江真澄による紀行文をはじめとした当時の史料との対比を通じて、近世の集落の実態を検討し得る資料となっている。^(註5)

註1 川村公一 「子孫に残す歴史の記録 森吉路　過去から未来へ」 モリトピア選書2 建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年

註2 本節全般にわたり註1文献を参考にした。

註3 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県北版)』 1991(平成3)年

註4 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年

註5 二重島A遺跡での旧石器出土層準は、主として米代川水系での段丘対比を根拠として十和田八戸火碎流(鳥越軽石質火山灰)起源の泥流堆積層と推定されている。一方、小又川対岸の下位から2段目の段丘面上に立地する向様田E遺跡(標高145~159m)でのテフラ分析では、やはり米代川水系の段丘対比と火山ガラス屈折率とを根拠として、向様田E遺跡が立地する段丘構成層が十和田八戸火碎流堆積物に由来するものと推定している。しかしながら、これらの推定と二重島A遺跡での旧石器出土状況は、十和田八戸火碎流の下位が神子柴長者久保系文化の層準とする所見とは整合的ではない。二重島A遺跡旧石器出土層とその下位層の重鉱物組成分析では、十和田八戸火碎流に相当量含まれるとされる角閃石はほとんどの試料で微量(3%未満)であり、試料によっては認められないものもある。また、向様田E遺跡採取試料の火山ガラス屈折率は、十和田八戸火碎流の火山ガラス屈折率とともに、十和田大不動火碎流のそれとも比較的近似する。これらの遺跡の基盤層は、十和田大不動火碎流などのより古い時期のテフラとも関連し、小又川流域では、地點によつては、十和田八戸火碎流よりも古期の火碎流起源の堆積物により離水するなど、段丘面を被覆する火碎流起源堆積物が異なる可能性なども想定すべきであろうか。今後、二重島A遺跡の旧石器出土層準の位置づけについては、当該石器群の型式評価、小又川流域の段丘区分とその形成過程などもあわせて再検討する必要があろう。

パリノ・サーヴェイ株式会社 「第3章 第2節 二重島A遺跡の層序と出土石器の年代」 北秋田市教育委員会 「森吉B遺跡 二重島A遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～」 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第2集 2006(平成18)年

パリノ・サーヴェイ株式会社 「第3章 第1節 テフラ分析」 秋田県教育委員会 「向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ-」 秋田県文化財調査報告書第347集 2003(平成15)年

註6 本節は下記の第1表文献39の「第2章 第2節 遺跡の歴史的環境」をもとに、平成19・20年度に刊行された発掘調査報告書等により一部加筆し作成した。

第1表文献

- 1 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第251集 1994(平成6)年
- 2 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年
- 3 森吉町教育委員会 「平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～」 1996(平成8)年
- 4 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年
- 5 森吉町教育委員会 「平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～」 1997(平成9)年
- 6 森吉町教育委員会 「上悪戸D遺跡発掘調査報告書 -北内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～」 1997(平成9)年
- 7 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年
- 8 森吉町教育委員会 「平成9年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸A遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～」 1998(平成10)年
- 9 秋田県教育委員会 「深瀬遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-」 秋田県文化財調査報告書第286集 1999(平成11)年
- 10 秋田県教育委員会 「姫ヶ岱C遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-」 秋田県文化財調査報告書第287集 1999(平成11)年
- 11 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年
- 12 森吉町教育委員会 「平成10年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸B・C遺跡 姫ヶ岱A・B・C遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～」 1999(平成11)年
- 13 秋田県教育委員会 「桐内C遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-」 秋田県文化財調査報告書第299集 2000(平成12)年
- 14 秋田県教育委員会 「姫ヶ岱D遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-」 秋田県文化財調査報告書第300集 2000(平成12)年
- 15 秋田県教育委員会 「桐内B遺跡・桐内D遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V-」 秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年
- 16 森吉町教育委員会 「平成10・11年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～上ハ岱A遺跡・上ハ岱B遺跡・水上ミ遺跡」 2001(平成13)年
- 17 秋田県教育委員会 「桐内A遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI-」 秋田県文化財調査報告書第334集 2002(平成14)年
- 18 秋田県教育委員会 「桐内沢遺跡・日麗岱A遺跡 -森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII-」 秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年
- 19 秋田県埋蔵文化財センター 「秋田県埋蔵文化財センター年報 20 平成13年度」 2002(平成14)年

- 20 森吉町教育委員会 『平成12年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 二重鳥D・E・F遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 2002(平成14)年
- 21 秋田県教育委員会 『向様田A遺跡・遺構篇 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-』 秋田県文化財調査報告書第346集 2003(平成15)年
- 22 秋田県教育委員会 『向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ-』 秋田県文化財調査報告書第347集 2003(平成15)年
- 23 秋田県教育委員会 『向様田F遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X-』 秋田県文化財調査報告書第348集 2003(平成15)年
- 24 秋田県教育委員会 『峰潤遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI-』 秋田県文化財調査報告書第349集 2003(平成15)年
- 25 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センター年報 21 平成14年度』 2003(平成15)年
- 26 森吉町教育委員会 『平成13年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～ 二重鳥C・G遺跡』 2003(平成15)年
- 27 秋田県教育委員会 『向様田A遺跡・遺物篇 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XII-』 秋田県文化財調査報告書第370集 2004(平成16)年
- 28 森吉町教育委員会 『二重鳥B・C・H遺跡 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 2004(平成16)年
- 29 秋田県教育委員会 『向様田D遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XIII-』 秋田県文化財調査報告書第392集 2005(平成17)年
- 30 秋田県教育委員会 『森吉家ノ前C遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV-』 秋田県文化財調査報告書第393集 2005(平成17)年
- 31 秋田県教育委員会 『日廻岱B遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XV-』 秋田県文化財調査報告書第394集 2005(平成17)年
- 32 秋田県教育委員会 『深渡A遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XVI-』 秋田県文化財調査報告書第407集 2006(平成18)年
- 33 秋田県教育委員会 『深渡A遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII-』 秋田県文化財調査報告書第408集 2006(平成18)年
- 34 秋田県教育委員会 『森吉家ノ前A遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII-』 秋田県文化財調査報告書第409集 2006(平成18)年
- 35 北秋田市教育委員会 『森吉B遺跡 二重鳥A遺跡 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第2集 2006(平成18)年
- 36 北秋田市教育委員会 『地蔵岱A遺跡 橋場岱D・E・F遺跡 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第3集 2006(平成18)年
- 37 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センター年報 25 平成18年度』 2007(平成19)年
- 38 北秋田市教育委員会 『橋場岱A・C・G遺跡 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第5集 2007(平成19)年
- 39 秋田県教育委員会 『地蔵岱遺跡 一森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XIX-』 秋田県文化財調査報告書第434集 2008(平成20)年
- 40 秋田県埋蔵文化財センター 『秋田県埋蔵文化財センター年報 26 平成19年度』 2008(平成20)年
- 41 北秋田市教育委員会 『橋場岱B遺跡 ～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第7集 2008(平成20)年

- 42 秋田県教育委員会 「向様田A遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XX一」 秋田県文化財調査報告書第445集 2009(平成21)年
- 43 北秋田市教育委員会 「二重鳥B遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～」 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第11集 2009(平成21)年

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

向様田D遺跡は、森吉山の北麓を西に流れる米代川の支流小又川右岸の標高134m前後の最低位の段丘上に立地する。小又川との比高は約15mあり、段丘崖となっている。標高134～138mの同一段丘上には東から向様田F遺跡、向様田B遺跡、向様田A遺跡があり、東側から西に向かって緩やかに傾斜している。向様田D遺跡はその西端に位置する。この段丘はかつては水田として利用されていた。また、南東側の崖下には、標高132～133m前後の極めて狭小な段丘面があり、向様田C遺跡が立地する。北側の標高145～159mの高位の段丘上には向様田E遺跡がある。

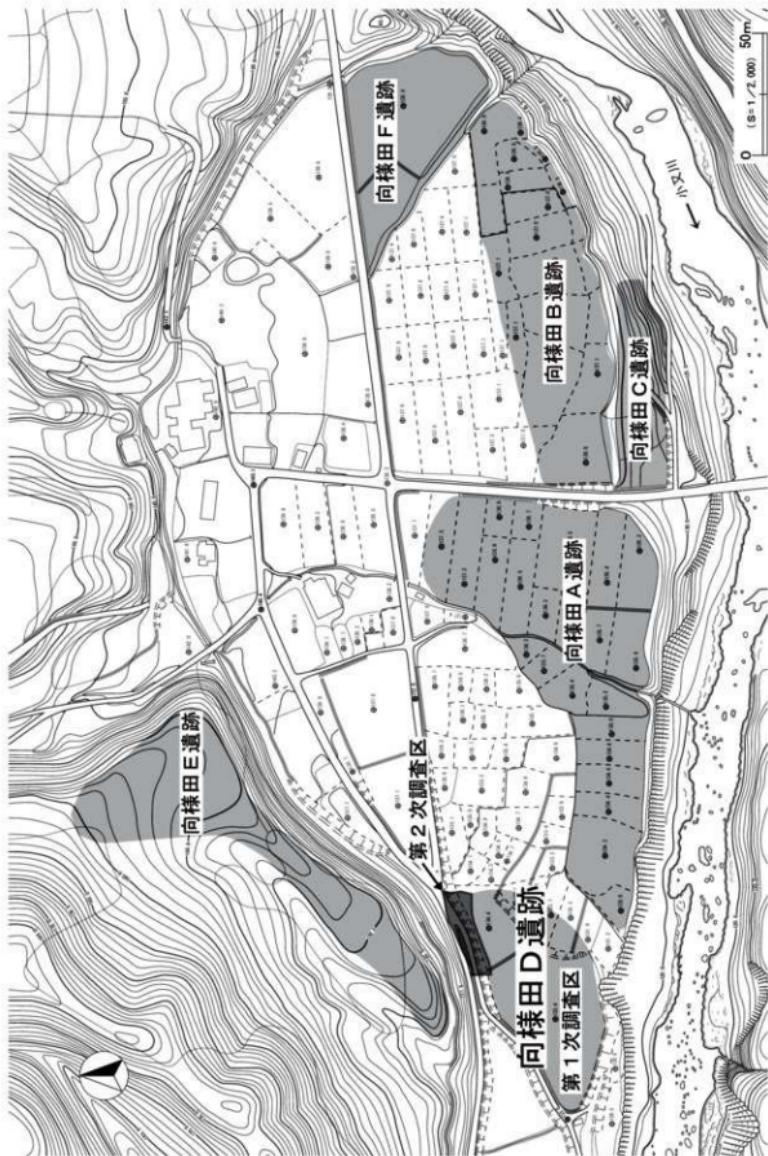
向様田地区は平成8年度に秋田県教育委員会が対象面積63,934m²の確認調査を実施し、上記の6遺跡が確認された。そのうち、2,800m²が向様田D遺跡の範囲とされた。本遺跡は、平成13年度に2,600m²^(註1)の調査を実施した。調査の結果、縄文時代中期および後期の堅穴住居跡各1軒、晩期中頃の捨て場1か所、晩期前半の盛土1か所などが見つかった。特に盛土からは約20万点の土器破片や2万点余りの石器など、大量の遺物が出土した。この調査によって、北側の工事用道路下には、遺跡北端部およそ500m²^(註2)が係るることが判明した。当該地点については、第1章第1節で記述したように森吉山ダム工事事務所との調整により、今年度の発掘調査となった。

第2節 調査の方法

1 野外調査

調査はグリッド法で行った。向様田遺跡群全域は平成12年度に共通のグリッド(基準原点MA50は日本測地系平面直角座標第X系のX=4,316.000、Y=-30,145.000)が設定され、平成13年度の向様田D遺跡のグリッドもそれに基づいて設定されている。本調査では、国土交通省が打設した4級基準点No45とNo46から、この基準原点(MA50)を通る日本測地系平面直角座標第X系X軸(南北線)およびY軸(東西線)に沿った4m×4m方眼を調査区内に組み、その交点に方眼杭を打設した。基準原点MA50から東西方向には、Y軸上西に4m進む毎にMB・MC・MD・・・と昇順に、東に4m進む毎にLT・LS・LR・・・と降順に各々A～Tまでのアルファベット2文字の組み合わせを付した。南北方向には、X軸を北に4m進む毎に51・52・53・・・、南に4m進む毎に49・48・47・・・と増減するアラビア数字を付してある。各区の呼称は、南東隅の杭を通るX軸とY軸の組み合わせで、MA50・MB51・MC52・・・のように呼ぶこととした。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的な位置の把握に努めた。さらに4m四方の各区は2m四方の小区に4分割することとし、南東隅小区にa、南西隅小区にb、北東隅小区にc、北西隅小区にdの枝番を付けた。

遺構は、平成13年度調査と番号が重複しないように検出順に101からの通し番号を付して遺構種別を表す記号と組み合わせて呼称した。平成13年度調査で検出され、今年度調査区にも残存するSM60(盛



第2図 向様田D遺跡周辺図

土)は前回と同一番号とした。また、最終的に遺構でないと判断したものについては欠番とした。遺構の掘削は、原則として半裁または十字に畦を残し、2分割法、4分割法による精査を行った。

作図は、平面図および土層断面図は、原則として20分の1の縮尺で作成した。遺物の取り上げについては、基本的に遺構外遺物には出土区・層位・出土年月日を、遺構内遺物には出土遺構名・遺構内層位・出土年月日をラベルに記入し、それぞれポリ袋に入れて取り上げた。なおSM60(盛土)では、完形土器など特徴的な遺物について、トータル・ステーションで出土位置の計測を行った。

発掘調査時の写真撮影は、遺構の検出状況・断ち割り状況・完掘状況の順で撮影し、適宜、遺物の出土状況、遺構細部の拡大撮影などを加えた。また、広範囲の撮影、俯瞰状況での撮影にはローリング・タワーを使用した。写真撮影は、基本的に35mm判を使用し、フィルムはモノクロとカラーリバーサルを併用し、デジタルカメラでの撮影も行った。

2 室内整理

整理作業は平成19年度は埋蔵文化財センター北調査課で、平成20年度、平成21年度は埋蔵文化財センター中央調査班で実施した。但し、遺物の洗浄・注記の一部は平成19年度に埋蔵文化財センター南調査課および中央調査課男鹿整理収蔵室で実施した。各年度の担当者は以下の通りである。

平成19年度

整理担当：築瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター北調査課 学芸主事)

武藤祐浩(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課男鹿整理収蔵室 学芸主事兼班長)

総務担当：袴田幸樹(秋田県埋蔵文化財センター北調査課 主査)

平成20年度

整理担当：榮一郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹)

築瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)

総務担当：時田慎一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主任専門員)

平成21年度

整理担当：榮一郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹)

築瀬圭二(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)

総務担当：時田慎一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主任専門員)

各遺構は、現場で作成した図を第1原図とし、これを基に平面図と断面図の組み合わせた図を第2原図とした。第2原図をスキャニングし、アドビシステムズ社「Photoshop」・アドビシステムズ社「Illustrator」を使用し、トレース・レイアウトまでの作業を行った。

遺物は、洗浄・注記後、報告書に記載する遺物の選別を行い、その後基本的に1／1で実測図を作成し、報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変えトレースした。図にはスケールを入れて示している。また、土器片などは拓影図の作成を合わせて行い、これらの作業後写真撮影を行った。

また、実測・トレース(平成20年度)および写真撮影(平成21年度)の一部は、例言に記した機関に委託した。

第3節 調査の経過

調査区の本調査に先立ち、6月4日よりバックホー、キャリアダンプによる工事用道路路盤等掘削除去、その後掘削面をシートで養生したが、21日、崩落が発生し、6月22～29日まで崩落土の除去、法面と法面周辺の補強等を実施する。発掘調査は、当初、平成19年7月2日～9月26日までの予定であったが、大雨とその被害による調査中止や当初予想を上回る遺物が出土したことから、平成19年10月22日まで延長した。各週ごとの調査経過については、以下のとおりである。

【第1週】7月2日～7月6日

調査員2名、作業員15名の体制で発掘調査を開始する。平成13年度に調査したSM60盛土の東西畦の精査と全体の現況を写真撮影。看板設置などの環境整備。調査区北側に排水溝を兼ねた東西トレレンチを掘削。SM60の範囲確認を目的として、調査区上面の掘削を開始。2日、小林課長・森吉山ダム工事事務所徳木専門職による法面養生状況の確認。電話配線工事。トータルステーションの搬入。2・3日、ダイワ技術による方眼杭設置。5日、雨のため、午後作業を中止、作業員を帰す。

【第2週】7月9日～7月13日

調査区と仮排土置き場間に橋を架けるなど、発掘調査にかかる環境整備を行う。調査区北側に排水溝を兼ねた東西トレレンチの掘削を継続。SM60の範囲確認のため、調査区上面の掘削を継続。当初盛土の中心と予想される区画から移植ベラ等で2m四方小区ごとに掘り下げていたが、平成13年調査の東西畦のSM60土層断面を参考にし、東西の畦側(調査区南端)からSM60上面までスコップ等で掘り下げる修正し、作業の効率化に努めた。北側法面の3か所からの湧水は依然あるが、新たな崩落やひび割れは見られない。法面付近の作業は、調査員が法面の状況に注意をしながら進めた。9日、茎班長、現地調査指導。10日、ダイワ技術、水準測量、方眼杭打設の成果品納入。12日、小林課長、現地調査指導。12日、熊谷所長から電話で調査現場の安全管理に関する指示を受ける。

【第3週】7月17日～7月20日

バックホーとキャリアダンプにより仮の排土置き場から排土を移動整地。調査区北側に掘削した東西トレレンチの写真撮影と土層図作成。調査区上面の水田造成土の掘削を継続。NR400で、石劍が出土。非常に脆く、折損しているが、完形に復元でき、長さは約64cm。北側法面の状況について、新たな崩落やひび割れは見られなかった。17日、重機による排土移動整地。19日、小林課長引率により、鷹巣南小学校から6年生21名来訪。発掘体験を行う。児童は事前に見せた遺物に熱心に見入り、発掘体験にも非常に熱中して取り組む。同伴の保護者にも好評。

【第4週】7月23日～7月27日

調査区上面の水田造成土の掘削を継続。調査区北側に掘削した東西トレレンチの写真撮影と土層図作成。調査区の土層を再確認するため、以下の4か所にトレレンチを設定し、掘削、写真撮影と土層図作成。南北方向は西側と東側の法面下、SM60の範囲外と思われる中央部。東西方向は平成13年調査の東西畦の東側延長部。調査区が段丘崖下にあるため、南端の平成13年調査東西畦の土層と北端付近の土層は予想以上に違いがあり、見極めを急ぎながら掘削作業を進める。23日、茎班長現地調査指導。25日、小林課長現地調査指導。26日、追加分のコンテナハウス・トイレの搬入、設置。

【第5週】7月30日～8月3日

S M60の確認写真を撮影、上面の地形を実測した後、平成13年調査の南北畦の延長ラインなど複数の畦を設け、先行して土層を確認するため畦付近から優先的に掘り下げる。特徴的な遺物については、写真撮影と出土地点を記録して取りあげる。SM60から、縄文時代晩期の石劍や土偶などが多量に出土。30日の朝、北側法面が部分的に崩落しているのを

発見、被害は小さく、調査に支障はなかった。被害状況を北調査課の菜班長に連絡し、引き続き調査員が注意をしながら調査を進めた。SM60の掘り下げを開始、土層が複雑で遺物の層位的な取り上げが難航。31日、小林課長現地調査指導。重機による堆土移動。8月3日、熊谷所長、櫻田副所長、小林課長、現地調査視察。

【第6週】8月6日～8月10日

SM60の掘り下げを継続。平成13年度調査を参考に複数設定した畦付近を先行して掘り下げ、SM60の土層確認を急ぐ。8日午後と9日は激しい雨のため、遺物の洗浄を行う。夏期休暇を含む9日間の長期の現場休止に備え、調査区やヤード内の養生を行う。SM60から引き続き縄文時代晩期の勾玉、土偶、岩版などの遺物が多量に出土。6日の朝、北側法面下のトレンチの壁が部分的に崩落しているのを見出し、被害状況を北調査課に連絡し、法面付近の調査を見合わせてしばらく様子を見た。午後から崩落したトレンチの壁面にシートを貼り、今後の降雨に対する処置を行う。SM60の土層が複雑で遺物の層位的な取り上げが難航。先行トレンチの土層を確認し、効率的に遺物を取り上げていくこととする。トータルステーションでの遺物の取り上げは、儀式道具的な石剣、石皿、岩版、土偶などや完形に近く復元できる土器に順次。7日、大野文化財保護室長、菊池主任学芸主事、小林北調査課長、現地調査視察。8日から山田病休。10日、小林課長、現地調査指導。

【第7週】8月20日～8月22日

断続的に続く雨のため、調査区での作業箇所が限られ、作業員2名は主に遺物の洗浄。SM60の掘り下げを継続。土層畦付近を先行して掘り下げ、特に南北トレンチでのSM60の土層確認を急ぐ。一部で全体的な掘り下げも実施。SM60から緑色の約7～20mmの小玉約50個（うち8個には製作過程の穿孔の跡がある）が半径15cm以内に集中して出土。土坑のプランは確認できないが、周囲にはミニチュア土器などもある。完形に近い遺物の量が多く、写真やトータルステーションでの記録に時間がかかる。デジカメ写真のみでの記録を増やすこととする。20・22日、小林課長、現地調査指導。23日、職員技術研修会、24日、北調査課職員会のため両日現場休み。

【第8週】8月27日～8月31日

SM60の掘り下げを継続。土層確認用の南北・東西畦を残して全面を掘り下げ。トレンチの断面観察からSM60の広がりは約160m²。南北・東西畦の断面記録を継続。SM60のF・G区の掘り下げを終え、疊群の平面分布図を作成。9月1日の現地説明会に備え、見学コースの環境整備実施。SM60から多量の土器・石器類とともに焼土塊と赤色顔料の撒布跡を隣接地で確認。SM60下で直径約1.4mの土坑、土層確認用の畦で数基の柱穴様ピットを確認。SM60下の精査は水の染み出しがあり、遺構の有無を慎重に確認。検討会議で指摘を受けて、平面や断面の観察等から、盛土形成（捨て方）の時間的変遷が少しでも明らかになるように調査を心がける。27日、小林課長、現地調査指導。30日、発掘調査検討会議の岡村委員長、藤沼委員、辻委員、菜班長、現地指導。31日、熊谷所長、櫻田副所長、小林課長、現地調査視察。31日、菜班長現地調査指導。築瀬、午前、北秋田市中央公民館での森吉山ダム建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査検討会議出席。27～30日、武藤男鹿整理収容室班長、調査参加。

【第9週】9月1日～9月6日

SM60の掘り下げを継続。G区と接する東西・南北畦の一部を含めて全面を掘り下げ。先行トレンチの掘り下げの終了箇所から順次、南北・東西畦の断面記録を継続。SM60下のF・G区の遺構精査を行い、G区は疊群平面分布図を作成。F区のSM60下で10基の柱穴様ピットが検出され、数基からは土器等の遺物も出土。南北確認トレンチのNR38b区のSM60直下から焼土遺構を検出。1日、北秋田市内合同発掘調査見学会実施、見学者60名。4日、小林課長、現地調査指導に来訪。3～6日、武藤男鹿整理収容室班長、調査参加。7日、台風接近のため現場作業中止。

【第10週】9月10日～9月14日

SM60の掘り下げを継続。E区とG区に接する南北・東西畦の掘り下げは終了、疊群平面分布図を作成。先行トレンチの掘り下げの終了箇所と調査終了区に面した南北・東西畦の断面記録を継続。SM60下のE区の遺構精査を継続。NR39b

区の盛土最下位層中からベンガラと思われる赤色顔料の撒布跡を検出。これまでの2か所を含めてそれぞれ遺構(SX)とした。北側法面下の東西トレンチ壁で小規模な崩落(幅3m、高さ1m)があった。崩落位置に近いE区の調査は中止したが、新たな崩落はないので、調査は法面の状況に注意をしながら進めた。11日、弘前大学藤沼教授と学生8名来跡。11・12日、榮班長、現地調査指導。11日・12日午前、築瀬、報告書校正のため北調を諱勤務。10~13日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。14日、東京大学大学院辻教授と大学院生2名、現地で土壤サンプル採取。

【第11週】9月26日~9月28日

SM60の掘り下げを継続。B区とA・B・C・D・E・F区境界の南北、東西畦以外の掘り下げ、SM60下の精査終了。調査終了区に面した南北、東西畦の断面記録を継続。完形や復元可能な土器、有孔石製品、岩版などが多数出土。28日、激しい雨が未明から降り続いたが、北側法面の新たな崩落はない。午後、調査区内での作業を行ったが、法面下の作業を見合せた。SM60掘削土の水洗篩いを適宜行う。26日、武藤男鹿整理収蔵室班長、調査参加。26・27日、甘肃省研修員2名現地見学。27・28日、小林調査課長、現地調査指導。29日、榮班長、現地調査指導。(18~21・25日は大雨による法面の崩落等の被害を受け、その復旧のために現場休止、また調査予定日が10月22日まで延長になる)

【第12週】10月1日~10月5日

SM60の掘り下げを継続。B区の掘り下げ、疊群実測終了。A・D区とC・E区境界東西畦掘り下げ、SM60下の疊群実測、精査終了。B・E区境界東西畦掘り下げ開始。辻教授が土壤サンプルを採取した周辺1m²で掘削土の水洗篩いを層位ごとに行う。B区のSM60下から疊を稍円状(東西直径約1.4m、北側一部東西畦下にあり未確認)に組んだ配石遺構(SQ127)を検出。A・D区境界東西畦のSM60下から稍円状(直径約50cm)に5cm前後の小疊を、その中心部に疊(約20cm)を配置したと考えられるSQ129を検出。8月に追加採用になった作業員が3日で退職し、発掘調査当初の15名(うち1名事務)となる。1・2日、櫻田副所長、現地調査指導。3日、小林調査課長、現地調査指導。4日、榮班長、現地調査指導。5日、静岡県榛原高校教諭福世氏現地見学。

【第13週】10月9日~10月12日

SM60の掘り下げを継続。B・E区境界東西畦掘り下げ、疊群実測終了。掘削土の水洗篩い継続。A・B区境界南北畦NSI区側掘り下げ開始。SM60下、SQ127精査。SM60下、SQ129精査終了。SM60下、SR130検出、精査終了。B・E区境界東西畦下にあり、一部未確認だったSQ127の配石(長径約1.9m、短径約1.4m)が明らかになる。約6mの東西畦(M57層)からは完形に近い香炉形土器や岩版、石剣等が多く出土。特にNR38a区周辺からは小玉が11個(畦以外の周辺の調査では勾玉1個、小玉10個)出土。SR130は純文時代晚期大洞B2式期。先述に引き続き、SQ127とその周辺の施設等の精査。9~12日、利部南調査課長、現地調査指導。12日、鷹巣地方史研究会27名現地見学。

【第14週】10月15日~10月19日

SM60のA・B区、D・E区境界南北畦掘り下げ、SM60下精査終了。B・E区境界東西畦等の掘削土の水洗篩い終了。SM60下、SQ127精査終了。SQ127の周辺から柱穴様ピットを複数検出したが、関連は不明確である。溝状に落ち込んでいるNR38b・d区周辺のSM60最下層に完形の土器が集中して置かれていた。15~17日、利部南調査課長、現地調査指導。17日、熊谷所長、佐田、櫻田副所長、佐藤稔務課長、利部、小林調査課長、時田副主幹、榮、谷口、武藤班長現地観察。18日、小林北調査課長、現地調査指導。19日、榮調査班長、現地調査指導。

【第15週】10月22日

調査区と道路との境界に単管と虎ロープで養生。遺物、発掘機材等を森吉家ノ前A遺跡に移送のため、トラック積み込み。22日午後3時、文化財保護室菊池主任学芸主事立ち会いのもの、森吉山ダム工事事務所笠木専門職と現場引き渡しについて現地協議。小林北調査課長、築瀬参加。発掘調査終了。

第3章 発掘調査の概要

註1 秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年

註2 秋田県教育委員会 「向様田D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XIII－」 秋田県文化財調査報告書第392集 2005(平成17)年

第4章 調査の記録

第1節 基本層序

向様田D遺跡は、小又川右岸の標高134～138m前後の最低位段丘面西端部に位置する。今年度の調査区は、向様田D遺跡の北東端部分に当たり、縄文時代晚期前半の盛土(SM60)北端が延びている。調査前の現況は、森吉山ダム建設事業に係り、新たに造成された工事用道路であった。この道路は、当該段丘面背後の崖面に沿った狭い生活道路を幅約5mに拡幅したものである。拡幅に際しては、向様田D遺跡北東端が広がる生活道路南隣の休耕田上に廃棄岩等で厚く盛土している。本遺跡北側の標高150m前後の上位面には向様田E遺跡が立地する。^(註1)

調査に当たっては背後の崖面の崩落を防ぐために、道路路盤等の掘削を崖際から1m離して行った。掘削の結果、休耕田の表土・水田耕作土は廃棄岩等の荷重により圧縮・硬化が見られたが、工事に際して上面には軟弱地盤用の造成シートが敷かれており、廃棄岩等の食い込みによる攪乱は免れていた。休耕田の標高は134.4m前後で、SM60盛土上面は水田造成によって削平を受けていた。

第1次調査では、SM60盛土周辺の基本層序は推定堆積時期と堆積環境とをもとに、大きくI～V層に大別した。I層は現表土および近現代の水田関係の層群とし、II層はI層よりも下位で、縄文時代遺跡の基盤土よりも上位の層群を一括し、さらにIIa層からIId層まで細分した。III層は遺跡北側から南西側の小又川旧河道(後背低地)を埋積するグライ化したシルト層、IV層は東隣の向様田A遺跡との間に存在する支流性埋没谷の埋積層、V層は旧小又川形成の微高地を構成する砂～シルト層とした。

今回の第2次調査では、縄文時代晚期前半のSM60盛土形成直前の、北側崖面から崩落した相対的に大規模な崖錐堆積層が存在することが新たに判明した。また、SM60盛土形成中および形成後にも小規模な崖錐堆積層が存在することも確認した。以下では、混乱を避けるために、第1次調査のI～V層の大別は踏襲し、盛土形成後の崖錐堆積層をIIa^(註2)層、盛土形成前の崖錐堆積層をIIe層とする。なお、盛土形成中の崖錐堆積層は部分的な確認にとどまることから、ここでは基本層序としては扱わない。また、III層は地点によりシルトから砂へ変化することなど層間に変異があることから、新たにIIIa層からIIId層まで細分する。さらに、V層も主にグライ化の程度の差により、Va層とVb層とに分ける。

以下、今回の調査区周辺の基本層序について略述する。土層図および土層注記についてはSM60盛土の土層断面図(第10・11図)およびSM60盛土土層一覧(第3表)を参照していただきたい。

I層は現表土・水田耕作土(Ia層)、水田造成土(Ib層)である。一定量の遺物を含んでおり、水田造成等に係わり、SM60盛土の一部を削平したものと推定される。IIa層は亜角礫が多く混じる崖錐堆積層である。縄文時代晚期前半のSM60盛土の上位で部分的に確認したのみで、同じく崖錐堆積層と推定されるIIa層との関係は判然としない。また、本層は遺物が乏しく、その詳細な堆積時期は不明である。IIe層も亜角礫および円礫が多く混じる大規模な崖錐堆積土である。調査区北側に南に傾斜して不整に堆積し、南半側までは広がらない。本層は色調および礫の混入度などによって、さらにIIe層～IIe層に細分した。IIe層は腐植沈着により黒色を呈する縄文時代晚期前半の旧表土層(土壤層

位A層)である。縄文時代晚期遺構の確認面であり、遺物も散見される。IIe層とIle層は黒褐色土や礫の混入割合の差によって細分した。本層群は縄文時代晚期初頭前後に堆積した可能性が強い⁽²³⁾。Iib層はやや黒泥状の黒褐色～黒色シルトで、調査区南半側の微高地(Ⅴ層上面)を中心に分布する。第1次調査で、本層上面がSM60盛土形成時の地表面であること確認し、また、本層下面で縄文時代中期の遺構を確認していることから、本層は縄文時代後期頃の形成と推定される。このほかに、今回の調査区の東西の周辺部で、相対的にIib層よりも上位に当たる黒ボク土系の旧表土層と見られる層が分布する(SM60盛土の項のM10・11・15層)が、部分的な確認であることから、ここでは基本層序には含めない。Ⅴ層およびⅢ層は、大きくは遺跡が立地する段丘面形成時の旧小又川起源の南側の微高地と北側の後背低地に相当するものと捉えられる。Ⅲ層はグライ化したシルト～砂層、Ⅴ層は酸化傾向のシルト～砂である。Ⅲ層は地点によりシルトから砂に変化し、一部に有機物が縞状に沈着した部分もあり、Ⅲa～Ⅲd層に細分した。Ⅴ層は西側から中央部は酸化傾向の褐色砂であるが、東側の埋没谷寄りは漸移的にグライ化し、シルト質に変化する。ここでは前者をVb層、後者をVa層とに分ける。Ⅳa層は遺跡東側の埋没谷を埋積するグライ化したシルトの最上位部である。一定量の縄文時代晚期遺物が出土するが、当該期には埋没谷は既に埋積されており、本層上面が縄文時代晚期の地表面であったと判断される。本層はかなり軟質であり、遺物は基本的に地表面に堆積後に沈下したものと考えられる。

今回の調査区においては、SM60盛土形成直前の縄文時代晚期前半の旧地形は、北側が北から南に傾斜する不整な起伏ある緩斜面、南側がほぼ平坦面となり、両者の間に僅かに浅い窪地状の低地が残る。北側の緩斜面ではIle層上面、南側の平坦面ではIib層上面、両者の間の低地では僅かに露出するⅢa層上面が当該期の地表面となっている。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 概要

調査の結果、向様田D遺跡(平成19年度第2次調査)で検出した遺構は土坑2基、土器埋設遺構1基、配石遺構1基、立石遺構1基、焼土遺構1基、赤色顔料撒布跡3か所、柱穴様ピット14基、盛土1か所の計24遺構である。盛土は、第1次調査でSM60盛土として調査したものとの、北端側の残存部である。盛土以外の遺構は盛土直下もしくは盛土形成時の旧表土層中で検出した。今回の調査地点では、遺物と共に大量の土砂を積み上げて盛土を形成する直前に、大洞B2式～大洞C1式土器を中心とした大量の遺物が旧表土層に堆積する。土砂の積み上げによる盛土の形成は、大洞C1式期から大洞C2式期まで継続したものと推定される。土器埋設遺構は縄文時代晚期大洞B2式期に属し、縄文時代晚期遺構の初現である。土坑のうちの1基は大洞BC式期の土坑墓と推定される。配石遺構、立石遺構、焼土遺構は、盛土形成時の旧表土層上面で検出し、大洞BC式期から大洞C1式期前後を下限とする可能性が高い。柱穴様ピットは、検出面から、盛土の形成前かその形成初期段階に構築されたものと考えられる。

2 土坑

SK104(第5・12図)

《位置・確認》NO39a区に位置する。IIb層で確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径1.40m、短径1.24mの略円形で、確認面からの深さは0.52mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部で外傾する。

《覆土》土坑の覆土は2層(①・②層)に分層した。その上位の1層は後述する盛土上位層に相当し、2層は盛土形成途中に発生した崖錐堆積土である。3層は盛土形成前の旧表土層(盛土直下層)である。土坑覆土②層は多量の遺物と円碟が混入する黒色土で、IIb層(4層)およびVa層(5層)掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。②層上面からは赤彩された楕円形平面の皿状の浅鉢形土器が伏せられた状態で出土した。①層は小亞角碟が多い黒褐色土で②層と同様のIIb層およびVa層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。①層は②層に比べ遺物が少ないとから、②層上面に浅鉢形土器を据えた後に、さらに土を埋め戻したものと推定する。掘り込みの外周に沿って大小の円碟4個がそれぞれ単独で据えられていた。

《出土遺物》覆土②層上面に据えられた浅鉢形土器は大洞BC式に属する(第12図6)。土器は底部の文様を損傷しない形で割れた状態で出土したことから、供献した完形の土器が埋没後の土圧により割れたものと考えられる。このほか覆土中からは土器片が83点、剥片が700点出土した。土器は、無文または縄文のみの土器が多く、深鉢形土器の底部が3個体出土している。剥片は651点が②層でまとまって出土した(第5図)。

覆土内出土土器で型式が判明するものには大洞B2式(第12図2・3)、大洞BC式(同5)などがある。これらの土器は完形に復元できるものではなく、埋め戻し時に周間に分布していたものが混入したものと判断する。

《時期・性格》本土坑は形態および覆土の特徴や覆土上面に供献されたと想定される浅鉢形土器の出土から、大洞BC式期の土坑墓であったと推定する。第1次調査ではNP37・38区で大洞BC式期の土坑墓1基(SK25)が確認されている。近接して分布し、規模・形態が類似し、本遺構と一連の遺構と考えられる。

SK129(第5・12図)

《位置・確認》NS39a区に位置する。SM60盛土下の、後述する盛土直下層(M57層)を掘り下げ中に碟群の一部を、IIe層で碟群と掘り込み平面を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《形態・規模》平面形は径20×12cmの碟の周りに径4~12cmの30個ほどの碟が円形に集中する。碟群の下部に長径(北西~南東)0.78m、短径(北東~南西)0.59mの楕円形の掘り込みをもつ。確認面からの深さは0.13mである。

《覆土》炭化物粒を少量含む单層で、IIe・IIe層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》覆土上面から碟群と混在して縄文土器破片が数点出土した(第12図7)。

《時期・性格》出土土器から縄文時代晩期大洞B2式期を上限時期とする。性格は不明である。

3 土器埋設遺構

SR130(第6・12図)

《位置・確認》NR39b区に位置する。IIe層下位で埋設された土器の上部を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《埋設状況》埋設土器はほぼ完形の深鉢形土器で、正位に埋設されていた。埋設のための掘り込みの平面形は直径0.26mの円形で、底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。土器底部は北側の周壁に接して据えられる。掘り込み埋め戻し土(裏込め土)は IIe・Ile層掘削土由来の埋め戻し土で、亜角礫を含む黒色土である。

《土器内覆土》IIe・Ile層由来の埋め戻し土で、多量の亜角礫を含む黒色土である。覆土上面からは直径7cmの緑色の亜角礫が出土し、意図的に埋めた可能性もあるかもしれない。

《出土遺物》埋設土器は口径12cm、高さ15cmの完形の深鉢形土器で大洞B2式に属する。

《時期・性格》埋設土器から、縄文時代晩期大洞B2式期に属する。性格は不明である。

4 配石遺構

SQ127(第7図)

《位置・確認》NQ38d・39b、NR38c・39a区に位置する。後述のSM60盛土下の盛土直下層(M57層)を掘り下げ中に礫群の一部を、IIIa層で梢円形の環状に組まれた礫群を確認した。

《重複》SM60盛土下に位置し、盛土形成以前の構築である。東西断面(A-B断面)では、SQ127配石遺構を中心にSM60盛土直下層(M57層)の遺物包含層が落ち込み、いわゆるレンズ状堆積を呈する。

《形態・規模》平面形は長径(北-南)約1.80m、短径(東-西)約1.30mの梢円形である。径約15~40cmの安山岩の円礫と凝灰岩亜角礫を横位にしてほぼ交互に配置する。礫群上面の高さは比較的揃っている。環状に組まれた礫群の外側の東西方向にも同一平面上で主に亜角礫の広がりを確認できるが、特に意図的に置いた規則性を認めることはできない。礫群は明瞭な掘り込みを持たず、IIIa層上面の地表面に据えられたものと考えられる。

《覆土》環状の礫群の下部に掘り込みは認められなかった。

《出土遺物》配石遺構直上およびその周囲には、遺物を大量に包含する盛土直下層(M57層)が堆積する。当該層堆積時には、配石遺構とその周囲は土器を中心とした大量の遺物ではなく全面が覆われていたものと判断されるが、調査では、本配石遺構に確実に伴う遺物を認定できなかった。M57層からの出土土器は大洞B2式期から大洞C2式期に属し、そのうち大洞BC式土器および大洞C1式土器が過半を占める。

《時期・性格》本配石遺構直上の盛土直下層(M57層)出土土器は大洞BC式~大洞C1式土器を主体とし、本遺構の下限時期は大洞BC式期と判断する。環状の礫群には被熱痕は認められず、その内外面には、焼土や多量の炭化物も確認されていない。また、周囲に有意な柱穴なども検出されていない。SQ127配石遺構の南西およそ2mでSN120焼土遺構が IIe層上面で検出されていることと、遺物の出土状況、向様田遺跡群の他の配石遺構との共通性から祭祀関連の施設と推定する。

5 立石遺構

SQ101(第6図)

《位置・確認》NQ39a区に位置する。IIe層中位で柱状の亜角礫が直立に据えられていた。さらに平面的に掘り下げ、礫の先端から0.12m下、IIe層下位で掘り込みを確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《形態・規模》掘り込みは長径(北西-南東)0.33m、短径(北東-南西)0.27mの梢円形で、確認面からの深さは0.21mである。柱状礫はほぼ中央に据えられ、長さは23cmである。

《覆土》炭化物粒を少量含み、IIe層・IIe層掘削土由来の埋め戻し土と考えられる。覆土には隅丸の平板な円礫が柱状礫を支えるように垂直に置かれる。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》SR130土器埋設遺構と同様に、盛土直下のIIe層下位からIIe層を掘り込み、構築されていることから、大洞BC式期を下限とする可能性が高い。性格は不明である。

6 焼土遺構

SN120(第6図)

《位置・確認》NR38b・d区に位置する。SM60盛土直下のIIe層上位で斑状に混入した多量の焼土粒・塊と炭化物粒・材の分布を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》焼土粒・塊と炭化物粒・材の拡がりは長径(北西-南東)0.72m、短径(北東-南西)0.60mの梢円形である。焼土面は長径(北-南)0.60m、短径(東-西)0.50mの不整な梢円形である。

《断面形》焼土粒・塊と炭化物粒・材の断面は確認面から2cmのほぼ均一の厚さである。焼土面は第Ⅲa層内、最大厚3cmで赤変する。

《層序》2層に分層した。1層は焼土粒・塊と炭化物粒・材が斑状に多量に混入した黒色土で、2層は焼土面で、上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》盛土直下のIIe層上位に位置することから、大洞BC式期を下限とする可能性が高い。掘り込みが認められず、周辺から柱穴等の付属施設を確認できなかったので、性格は不明である。

7 赤色顔料撒布跡

SX122(第6図)

《位置・確認》NQ39a区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層(M57層)中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》直径0.25mの円形である。

《断面形》赤色顔料の断面は確認面から1.5cmのほぼ均一の厚さである。

《層序》赤色顔料粒・塊に黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

SX123(第6図)

《位置・確認》NR38d区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層(M57層)中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径(北東—南西)0.73m、短径(北西—南東)0.66mの不整円形である。

《断面形》赤色顔料の断面は確認面から1.5cmのはば均一の厚さである。

《層序》赤色顔料粒・塊に黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

SX124(第6図)

《位置・確認》NR39b区に位置する。SM60盛土下の後述する盛土直下層(M57層)中に多量の赤色顔料粒・塊の分布を確認した。

《重複》SM60盛土下にある。

《規模・平面形》長径(北東—南西)0.22m、短径(北西—南東)0.16mの不整円形である。

《断面形》赤色顔料の断面は確認面から6cmの小山状である。

《層序》赤色顔料粒・塊に亜角礫、黒色土と炭化物粒を含む単層である。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》盛土直下層(M57層)中に位置することから、大洞C1式期を下限とする可能性が高い。周囲から土坑等の掘り込みを確認できなかった。性格は不明である。

8 柱穴様ピット

柱穴様ピットは14基のすべてをSM60盛土下で検出した。確認面はIle層上面か、V層上面である。遺物を伴うものが7基あるが、帰属時期を明確に特定できるものはない。確認面からは、いずれも大洞C1式期を下限時期とする可能性が高い。これらのピット群には有意な配列が認められず、性格は不明である。各柱穴様ピットの形状・覆土等について第8・9図、個々の記述については、第2表を

第2表 柱穴様ピット一覧

遺構番号	地 区	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	確認面	備 考
SKP105	NP38e・39a	円形(椭定)	28 (23)	35	133.06	Ile層確認	第1次調査後、今年度調査区辺一部陥落 碓文土器片1点出土	
SKP107	NQ38e	円形(椭定)	26 (11)	32	133.22	Ile層確認	西側は試掘坑により削平	
SKP109	NQ39b	円形(椭定)	30 (15)	42	133.40	Ile層確認	北側は試掘坑により削平	
SKP110	NP40a	円形	28	26	12	Va層確認		
SKP111	NP40a	楕円形	48	38	15	133.30	Ile層確認	調査区西端4点、調査1点出土
SKP112	NP40b	楕円形	26	20	22	133.30	Ile層確認	SKP112に切る
SKP113	NP40b	楕円形	22	18	21	133.30	Ile層確認	SKP112に切られる。調査土器片1点出土
SKP114	NP40b	円形	34	30	18	133.42	Ile層確認	調査土器片6点、石器1点出土
SKP115	NP39c	楕円形	28	20	14	133.26	Va層確認	調査土器片7点出土
SKP116	NP39c	円形	20	20	14	133.30	Va層確認	調査土器片4点出土
SKP117	NP38d・40b	円形	40	36	16	133.40	Ile層確認	調査2点出土
SKP118	NP39c	円形	26	26	16	133.26	Va層確認	調査5点出土
SKP119	NP39d	楕円形	36	26	24	133.36	Ile層確認	調査土器片3点、調査1点出土
SKP131	NQ39a	円形	24	22	16	133.48	Ile層確認	

参照していただきたい。

9 盛土

SM60(第4・10・11・13~103図)

《位置・確認》第1次調査において、東端がNO37・38区周辺、南端がNP・NQ36区周辺、西端がNS36~38区周辺に及ぶ大量の土砂と遺物とを積み上げた盛土を確認し、今回の第2次調査において、その北端部分がNO39区からNS39区周辺まで広がることを確認した。

《重複》今回の調査で確認した盛土以外の遺構は、いずれも土砂と遺物を積み上げる狭義の「盛土」(以下の記述では、特に断りがない場合、単に「盛土」という表現は土砂の積み上げ部分である狭義のそれを意味するものとする。)形成以前の所産である。狭義の「盛土」と直接重複する遺構にはSK104土坑、SK129土坑、SR130土器埋設遺構、SQ127環状配石遺構、SQ101立石遺構、SN120焼土遺構、SX122・123・124赤色顔料撒布跡、SKP105・107・108・131柱穴様ピットがある。上述のように、いずれも盛土形成よりも旧い。

《形態・規模》第1次調査時には、主として遺物集中範囲をもとに、盛土は基底面積250m²以上、体積200m³前後と推定したが、今回の第2次調査結果から、狭義の盛土範囲はより限定されるものと判断される。現状からは、盛土は基底面積が190m²前後、最大高0.8m、体積は100m³前後と推定される。今回の調査対象である盛土北端部では、盛土直下の旧表土層上に縄文時代晚期前葉の遺物が大量に堆積する。さらに盛土北端周辺の旧表土層からは盛土中および盛土直下の旧表土層出土遺物と同時期の縄文時代晚期前葉から中葉にかけての遺物がまとまって出土する。第1次調査結果も勘案すると、向様田D遺跡北東端部には、縄文時代晚期前葉から中葉にかけての遺物集中地点が形成されており、その遺物集中地点形成の後半段階に遺物堆積と平行して主にその中央部に土砂の積み上げによる盛土が形成されたものと捉えられる。今回の調査区は遺物集中地点および盛土の北端に当たるものと判断される。以下では盛土と盛土直下および盛土周辺の旧表土層遺物集中範囲を含めて、広義の盛土としてまとめて扱うこととし、その場合は「SM60盛土」と呼ぶ。

SM60盛土全体としての遺物集中範囲は、土器出土重量が今回調査では5kg以上の小区と、第1次調査では20kg以上の4m四方区画とを便宜的に当該範囲とすると、東端はNNライン周辺、西端はNTライン周辺、北端が40ライン周辺、南端が36ライン周辺となる(第4図)。今回の調査区では、土器出土量はNR38c区の破片点数9,845点、重量138,287gを最高として、NR38区~NR39区周辺がその中心となり、周辺部はしだいに減少する。特にNTライン以西および40ライン以北の土器出土量は僅かである。第1次調査区では遺物集中範囲は盛土範囲より全体に一回り広がっているが、今回の調査区では、盛土北端が39ラインと40ラインの中間付近、東端がNOラインとNPラインの中間付近で、遺物集中範囲がより北東側に広がっている。

《層序》今回の調査では、SM60盛土には第1次調査時の南北畦の北への延長とNSラインおよびNPライン沿いとに計3本の南北畦(西側のNSライン沿いの畦から東に向かって順に南北畦①、南北畦②、南北畦③と呼ぶ)を、それらに直交するように、39ラインから1m北側に1本の東西畦(東西畦①と呼ぶ)をそれぞれ設定した(第3図)。畦幅はいずれも1mで、畦沿いの部分を先行して掘り下げて層序を確認しながら、畦の間を7区画に分けて掘り下げを行った。各区画は東西畦①南側は西か

らA・B・C区、北側は同じく西からD・E・F・G区とした。盛土の土層断面図は南北畦①東壁(南北断面①)、同畦②西壁(南北断面②)、同畦③東壁(南北断面③)、東西畦①南壁(東西断面①)で作成した(第10・11図、第3表)。なお、南北断面②は第1次調査区部分も一部修正した上で合成して掲載し、合わせて第1次調査の東西断面も一部修正して掲載する(東西断面②)。^(註4) A区～G区の遺物は原則として東西断面②の層位を参考にして取り上げた。畦内の遺物については、各畦の層序に基づき取り上げを行った。各畦の層序は第1次調査部分もあわせて最終的にM1層からM71層までの連続した層番号に統一し(第3表)、遺物取り上げ層位もこの連続した層番号に対応させた。ただし、各層位ごとに遺物を取り上げることは完全にはできていない。

以下では各層の特徴などから、盛土およびその周辺の下位層を、「盛土上位層」(M16・17層)、「盛土中下位層」(M19～55層)、「盛土直下層」(M56・57層)、「旧表土①」(M10・11・15層)、「旧表土②」(M59・62・63・65層)の層群に大きくまとめ、各層群出土土器を細別し、その重量および最大長1cm以上の破片点数を計量・計数し、盛土形成時期検討の参考とする(第4・5表)。なお、細別等の詳細については、出土遺物の項で述べる。

第1節で触れたように、SM60盛土周辺の旧地形は、元来、南側が最低位段丘面形成時の旧小又川形成のシルト～砂基盤のほぼ東西軸の微高地(M70・71層)、北側がグライ化したシルト～砂が堆積したその後背低地(M66～69層)に相当する。この後背低地は、その上面に安山岩大形円礫・凝灰岩亜角礫などを多量に含むシルト～粘土からなる北側崖面からの崖錐堆積物(M59～61層)が不整に広がり、SM60盛土形成時には南に向かって傾斜し、裾部が樹枝状に入り組む緩斜面となっていた。また、SM60盛土形成直前には南側の微高地部では上面に主として黒色シルトから成る層厚10～20cm前後の旧表土層(M62・63層)が分布する。第1次調査において、この旧表土層(M63層)の下面で縄文時代中期後葉の土坑(SK43N)を検出したこと、当該層上面が縄文時代晚期遺構の掘り込み面であることなどから、当該層の形成は縄文時代後期頭と推定される。一方、北側緩斜面の崖錐堆積層(M59～61層)は、既述のように縄文時代晚期初頭頃に堆積した可能性が強い。当該層は礫を多量に含む部分と砂～シルトを主体とする部分とに分層される箇所も認められるが、崖錐堆積の具体的な経過は判然としなかった。当該層上位は腐植に富み黒味が強い旧表土層を形成する(M59層)。崖錐堆積層が及ばない部分は、後背低地部を埋積するグライ化したシルト層(M66層)が旧表土層となる。SQ127環状配石遺構は、崖錐堆積層と微高地との間の、このシルト層が露出する浅い窪地状の地点に構築されている。この当該地点のM66層とM59・62・63層、さらに東側の埋没谷理積土最上位の65層とをSM60盛土形成前の旧表土層群として「旧表土②層」とまとめると、M66層からの出土土器はないが、他の層からは、全体で大洞B2式土器から大洞C2式土器までが出土している。本層群は、大洞C2式期まで地表には露出していないものと考えられる。

SQ127環状配石遺構構築の前後に、NP38d・NP39b・NQ38c・d・NQ39a・b・NR38c・NR39a区周辺の緩斜面を中心に、大洞B2～大洞C1式土器を主体とする大量の遺物が当該地点全体を面的に覆うように堆積し、層厚10cm前後の遺物包含層(M57層)を形成する。当該層には遺物のほか、炭化物も目立つが、遺物間を充填する基質は比較的均質な黒色シルトで、全体として上位の北北東側から下位の南南西側に傾斜する堆積状態を呈する。基質自体は、基本的には人為堆積ではなく、風成塵あるいは雨水による周辺の流出表土が自然堆積したものと推定する。本層の堆積は、遺物の集中範囲よりも北東

第3表 SM60盛土層一覧

性質	基準 番号	層 番号	層相 等	土　色	土　性	硬度	粘性	理量 —赤色 褐色 土色	炭化 物質量	土器量(点/g)	土層断面位置	第1次 調査 場番号	考
表土より 盛土上	J-a	M1	モリーブ褐色(2,5YR4/2)	粘土	強	中	多		1,028/11,487	東西②	43		
	J-b	M1	褐褐色(10YR4/2)	粘土	強	少			725/5,918	東北②・東西②	4		
	J-c	M1	褐褐色(10YR2/3)	粘土	強	少		0,237/3,921	東北②・東西②	1-45			
	J-d	M4	褐褐色(10YR2/3)	粘土～シルト	強	少	多			東北②	3		
	J-e	M5	褐褐色(10YR3/3)	粘土～シルト	強	少	多			東北②	2		
	J-f	M6	褐褐色(10YR2/3)	シルト～粘土	少	少	多			東北②	4		
	J-g	M7	褐褐色(10YR3/4)	シルト～粘土	強	少	多			東北②	5		
	J-h	M8	褐褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	少	中	多			東北②	6		
	J-i	M9	褐褐色(10YR2/2)	粘土～シルト	強	少	少			東西②	46		
	J-j	M10	黒色	褐褐色(10YR3/3)	シルト～粘土	強	中	少	0/0	東西②	47	日表土③	
山林土?	J-k	M11	黒褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	強	強	少		0/0	東西②	48		
	J-l	M12	黄褐色(10YR5/6)	シルト～砂	強	弱	多		18/1,067	東西②			
	J-m	M13	褐褐色(10YR3/6)	シルト	強	弱	少		32/1,197	東西②			
田園地(新)	J-n	M14	褐褐色(10YR3/2)	粘土～シルト	強	強	中		0/0	東西②	49		
	J-o	M15	褐褐色(10YR2/1)	シルト	強	中	多		859/8,798	東西①②	50	日表土③	
SM60盛土	M16	薄	黑色(10YR3/1)	シルト～粘土	強	弱	少		409/3,938	東西②	51	盛土上部層	
	M17	厚	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	少	中	中	31,285/307,231	東北②・東西②	7-52	盛土下部層	
樹根(中)	M18	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	強	多	多	中	2,359/25,636	東西③②	53-54	第1次調査報告書 付録改修	
	M19	薄	黑色(10YR2/1)	シルト	強	弱	中	少	361/4,337	東西①		盛土下部層	
SM60盛土	M20	薄	黑色(10YR2/3)	シルト	強	弱	少	中	423/5,005	東西③		盛土下部層	
	M21	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	強	弱	少	中	309/4,413	東西①		盛土下部層	
	M22	薄	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	中	強	少		2,427/25,247	東西①②	56	盛土下部層	
	M23	薄	黑色(10YR2/1)	シルト	強	弱	少	中	937/8,430	東西①		盛土下部層	
	M24	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	多	中	—	東北②	13	盛土下部層	
	M25	小	黑色(10YR2/2)	シルト	強	弱	少	中	—	東北②	14	盛土下部層	
	M26	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	少	中	—	東北②	15	盛土下部層	
	M27	薄	黑色(10YR2/4)	シルト	強	弱	多	少	—	東北②	16	盛土下部層	
	M28	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	中	中	—	—	—	東北②	9	盛土下部層	
	M29	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	中	中	—	—	—	東北②	16	盛土下部層	
SM60盛土	M30	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	少	少	—	東北②	17	盛土下部層	
	M31	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	少	少	—	東北②	18	盛土下部層	
	M32	小	黑色(10YR2/3)	シルト	強	弱	多	—	—	東北②	22	盛土下部層	
	M33	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	少	—	—	東北②	10	盛土下部層	
	M34	小	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	弱	中	多	—	東北②	11	盛土下部層	
	M35	小	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	弱	中	多	—	東北②	12	盛土下部層	
	M36	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	中	多	—	東北②	19	盛土下部層	
	M37	小	黑色(10YR2/3)	シルト	中	中	多	—	—	東北②	20	盛土下部層	
	M38	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	中	中	—	東北②	21	盛土下部層	
	M39	薄	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	強	弱	少	—	—	東北②	23	盛土下部層	
盛土直下層	M40	小	黑色(10YR2/3)	シルト	強	弱	多	—	—	東北②	24	盛土下部層	
	M41	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	強	弱	多	—	—	東北②	25	盛土下部層	
	M42	小	暗褐色(10YR3/3)	シルト～粘土	中	強	少	—	—	東北②	27	盛土下部層	
	M43	薄	暗褐色(10YR3/2)	シルト～粘土	中	強	少	—	—	東北②	28	盛土下部層	
	M44	薄	暗褐色(10YR3/3)	シルト	強	弱	中	—	—	東北②	29	盛土下部層	
	M45	薄	暗褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	中	—	—	—	東北②	30	盛土下部層	
	M46	薄	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	中	中	多	—	—	東北②	31	盛土下部層	
	M47	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	中	多	—	—	東北②	32	盛土下部層	
	M48	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	強	少	—	—	東北②	33	盛土下部層	
	M49	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	強	中	多	—	東北②	34	盛土下部層	
SK25土堆⑨	M50	薄	黑色(10YR2/3)	シルト～粘土	中	強	中	多	—	東北②	35	盛土下部層	
	M51	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	強	少	—	—	東北②	36	盛土下部層	
	M52	小	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	強	少	—	—	東北②	37	盛土下部層	
	M53	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	中	中	多	—	—	東北②	38	盛土下部層	
	M54	薄	黑色(10YR2/2)	シルト	中	弱	少	—	30/668	東北②	39	第1次調査報告書 付録改修	
盛土直下層	M55	薄	黑色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	強	中	多	457/9,942	東西②	55	第1次調査報告書 付録改修	
	M56	黒色	(10YR2/3)	シルト	強	強	少	—	—	東北②	56-57Wは遺 跡とした台形埴 輪層		
SK25土堆⑩	M57	黒色	(10YR2/3)	シルト～粘土	強	強	少	—	8,020/106,596	東北②・東西②	26-37	第1次調査報告書 付録改修	
	M58	褐褐色	(10YR3/3)	シルト	弱	強	多	—	54,322/754,300	東北②・東西②	34-36	第1次調査報告書 付録改修	
基盤層	II-a	M59	黑褐色 黑色(10YR2/2)	粘土～シルト	強	強	少	少	9,024/103,282	東北①・東西②	39	SK25土堆上部 塗装	
	II-b	M60	褐色 オリーブ色(5YV4/3)	粘土～シルト	強	強	中	多	0/0	東北①・東西②		土壤層に植 物根の発達	
	II-c	M61	褐色 オリーブ色(5YV3/1)	粘土～シルト	強	弱	少	—	0/0	東北①		ME6-M7との接 触層	
	II-d	M62	やや 黒褐色(10YR2/2)	シルト～粘土	強	弱	中	—	2/2	東北②	59	第1土上土	
	II-e	M63	やや 黒褐色(10YR2/3)	シルト	中	強	—	—	1,679/20,040	東北①・東西②	40-60	MT1附近上層 第1土上土	
	II-f	M64	黑色(10YR2/2)	シルト	中	弱	—	—	—	東北②	41	複合谷上層 第1土上土	
	II-g	M65	綠褐色(5G2/1)	シルト	弱	強	—	—	483/5,309	東西①②	61	複合谷上層 第1土上土	
	III-a	M66	黑色(10YR1,7/1)	シルト	強	強	—	—	0/0	東北①・東西②		1号井(MD-57W)と 2号井(MD-60W) との境界は やや濃色。MT1 附近は濃色。	
	III-b	M67	オリーブ褐色(2,5Y4/3)	シルト	中	弱	—	—	0/0	東北②			
	III-c	M68	黑褐色(10YR2/2)	砂・シルト	強	中	弱	—	0/0	東北②			
樹根層	IV-a	M69	オリーブ褐色(2,5Y4/3)	砂	中	弱	—	—	0/0	東北②	62	樹根層内に ガラス化	
	IV-b	M71	酸化 黑色(10YR4/4)	砂・シルト	中	弱	—	—	0/0	東北①・東西②	42-62	MB60Wとは 酸化層	

(点/ g)

第4表 地区・層別土器出土量(1)

地 区	層	大鍋B1式	大鍋B2式	大鍋BC式	大鍋CL式	大鍋CJ-C2式	J-M(C2)式	J-B(C2)式
NN39	層下	1/15	7.4/7.6	25/265	38/54	5/95	12/62	7/76
	田代上(1)	1/92	3/16	18/18	31/52	7/33	3/11	1/52
	全	2/77	10/1,845	44/400	69/1,986	12/148	15/72	5/129
NN40	田代上(2)	0/0	0/0	2/26	0/0	0/0	0/0	1/37/1,147
	全	0/0	0/0	1/14	0/0	1/3	0/0	3/13
NN41	田代上(2)	0/0	0/0	3/40	0/0	1/3	0/0	3/13
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	9/126	0/0	15/356
NO38	層下	0/0	0/0	0/0	0/0	9/126	0/0	15/234
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	16/119
NO41	上位	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	16/119
	全	0/0	0/0	17/189	25/182	171/2,147	38/414	29/198
NO39	田代上(1)	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	3/19/40,414
	田代上(2)	0/0	1/9	13/157	20/138	4/95	1/93	6/18
	全	0/0	18/198	38/306	204/2,383	60/602	31/263	19/2,061
NO40	田代上(2)	0/0	6/416	24/363	43/365	18/405	11/74	4/56
	全	0/0	1/78	1/17	19/189	0/0	1/33	1/38/2,783
NO41	上位	0/0	7/423	25/826	62/782	24/439	12/107	5/753
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	23/293
NP38	中下位	0/0	0/0	0/0	0/0	1/3	15/268	7/274
	全	0/0	2/40	2/17	25/664	12/739	6/34	4/293
NP39	層下	0/0	3/502	3/639	13/721	17/235	0/0	2/191
	全	0/0	5/541	7/686	46/1,503	49/1,852	16/370	8/481
NP41	上位	1/31	3/76	13/303	10/371	52/1,078	10/729	5/471
	全	1/99	17/468	73/1,888	192/2,806	47/713	17/879	13/1,394
NP39	田代上(2)	0/0	23/1,677	2/46	1/3	2/36	0/0	0/0
	全	12/130	23/2,232	105/2,414	216/3,519	127/2,198	37/1,775	22/1,924
NP40	田代上(2)	0/0	0/0	3/28	13/112	2/10	5/40	8/122/98,253
	全	0/0	4/62	8/48	0/0	0/0	0/0	23/2,826
NP41	上位	0/0	0/0	4/580	2/10	9/87	1/9	0/0
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	4/96/4,967
NO38	田代上(2)	0/0	2/10	6/316	38/511	103/1,939	86/1,476	3/362
	全	0/0	0/0	0/0	3/169	12/242	28/374	346/3,789
NO40	田代上(2)	1/152	48/2,202	4/28/7,722	183/2,951	72/1,886	4/7,827	17/2,813
	全	0/0	0/0	2/6	0/0	0/0	0/0	17/2,813
NN41	田代上(2)	1/152	50/2,212	4/59/2,944	272/3,897	199/3,487	162/2,695	21/3,726
	全	1/33	7/387	122/1,491	26/228	123/2,058	79/2,012	7/1,123
NO39	中下位	0/0	0/0	7/78	26/303	91/1,773	35/838	0/0
	田代上(2)	0/0	46/1,647	375/7,474	330/5,353	93/2,223	140/1,829	19/1,831
	全	1/33	2/42	17/115	18/122	29/366	24/172	4/122
NO38	田代上(2)	0/0	55/2,076	521/9,068	402/6,016	339/6,604	228/4,851	32/3,091
	全	0/0	0/0	22/1,041	2/684	6/53	1/130	3/43
NO40	田代上(2)	0/0	0/0	22/1,041	2/684	6/53	1/130	3/43
NN41	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	701/3,748
	全	1/12	1/78	3/16	61/979	230/4,576	288/4,776	0/0
NP38	中下位	0/0	0/0	5/71	72/354	17/2,113	1/12	5/64/51,103
	田代上(2)	0/0	26/2,688	549/12,376	1,213/17,921	148/5,607	17/2,672	28/2,228
	全	0/0	2/17	39/1,210	89/2,615	22/1,195	16/123	15/348/224,733
NN40	田代上(2)	0/0	28/2,703	595/13,694	1,369/21,659	484/11,362	479/12,841	30/2,513
	全	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	23/714/294,557

第5表 地区・層別土器出土量(2)

地 区	層	大洞B1式			大洞BC式			大洞C1式			大洞C1-C2式			大洞C2式			JB群2期			純2期前半					
		上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位	上位	中位	下位			
NR39	中F	0.0	0.0	1.9	33.1	57.57	17.172	134.9	916	77.1	580	1.53	2.95	21.228	2.87	21.228	1.53	1.53	1.53	1.53	1.53	1.53			
NR39	下F	0.0	0.0	82.1	568	447.8	39.97	526.8	45.0	120.3	38.88	26.995	20.95	76.1	8.97	9.85	9.95	14.478	9.85	9.95	14.478	9.85	9.95		
NR39	JB表上(2)	0.0	0.0	21.4	664	156.3	69.67	44.5	59.1	202.4	63.3	69.1	9.46	14.1	22.69	3.900	39.254	3.900	39.254	3.900	39.254	3.900	39.254		
NR39	全	0.0	0.0	104.5	640	643.12	17.78	607.9	707	588.13	69.09	27.6	51.4	44.3	631	17.584	17.584	17.584	17.584	17.584	17.584	17.584	17.584		
NR40	JB表上(2)	0.0	0.0	40.1	348	33.3	30.3	2.568	184	8.176	1.76	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20		
NR40	合	0.0	0.0	40.1	348	34.7	30.8	2.568	184	8.176	1.76	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20	1.20		
NR40	上F	0.0	0.0	1.2	76	2.56	1.17	24.2	91	82.1	563	24.2	222	1.474	1.883	1.1916	1.474	1.883	1.1916	1.474	1.883	1.1916	1.474	1.883	
NS37	中F	0.0	0.0	1.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17		
NS38	JB表上(2)	0.0	0.0	1.2	176	3.72	3.72	28.3	39	96.1	23	27.6	228	27.6	228	1.474	1.481	1.12	1.474	1.481	1.12	1.474	1.481	1.12	
NS38	下F	0.0	0.0	1.10	732	204.4	652	625.1	512	276.2	299	30.639	3.59	13.88	1.88	16.600	862	651	13.88	16.600	862	651	13.88	16.600	
NS38	全	0.0	0.0	1.23	224	474	119.5	523	143.2	299	30.639	3.59	13.88	1.88	13.88	120	694	13.88	120	694	13.88	120	694	13.88	
NS39	上位	0.0	0.0	2.33	2.33	89.1	206	323.6	577	712.14	884	47.355	2.62	30.2	2.62	30.2	2.62	30.2	2.62	30.2	2.62	30.2	2.62	30.2	
NS39	JB表下	0.0	0.0	6.69	6.69	6.187	4.18	42.4	403	1.217	2.299	30.1	2.09	1.217	2.299	1.217	2.299	1.217	2.299	1.217	2.299	1.217	2.299		
NS39	JB表上(2)	0.0	0.0	28.0	9.53	28.274	8.53	4.17	17	15.1	179	3.127	1.27	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
NS39	合	0.0	0.0	34.3	34.3	18.258	9.4786	94.7	86	15.2	878	48.1	575	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
NS40	中F	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
NT37	JB表上(2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
NT38	JB表上(2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
NT39	JB表上(2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
O437	合	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
O438	JB表下	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.25	2.11	4.68	2.111	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
O438	全	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.25	2.11	4.68	2.111	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
O439	JB表上(2)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	41.5	563	1.74	1.563	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
O439	合	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	428.6	942	1.486	28.524	857	18.182	21.706	30.709	248.799	30.709	248.799	4.919	46.486	4.919	46.486	
全地(4)	中F	0.0	0.0	2.49	4.45	256.11	445	2.005	41.339	2.872	44.462	700.7	127	549.14	21.6	130.11	634	55.801	20.837	55.801	20.837	55.801	20.837	55.801	20.837
全地(4)	JB表上(1)	1.62	3.129	18.118	31.522	31.522	7.53	3.11	1.52	1.52	374.5	784	1.36	2.913	27.2	500	1.52	814.7	814.7	814.7	814.7	814.7	814.7	814.7	814.7
全地(4)	JB表上(2)	0.0	96.7	458	306.6	705	205.4	94.5	3.755	69.128	3.969	69.963	1.841	39.321	230.18	697	111.8	697	111.8	697	111.8	697	111.8	697	
全地(4)	合	16.391	40.8	225.066	2.778	53.953	3.755	69.128	3.969	69.963	1.841	39.321	230.18	697	111.8	697	111.8	697	111.8	697	111.8	697	111.8	697	

側のNO40a・b区周辺などまで部分的に広がっている。本層の直上には、類似した基質で、遺物を多量に包含する黒色シルトが堆積する(M56層)。層厚は10cm前後で、堆積範囲はSQ127環状配石遺構周辺の浅い窪地状地点周辺に限定される。M57層との層界は漸移し、同様に自然堆積層と推定する。両層は基本的に同一環境下の一連の堆積層であり、盛土周辺の黒ボク土系の旧表土(旧表土②)に漸移的に連続するものと判断される。両層をあわせて「盛土直下層」としてまとめると、大洞C1式および大洞BC式土器が多く出し、これに大洞C2式土器、大洞B2式土器およびごく少量の大洞B1式土器が伴う。本層群の直上には人為的な盛土積み上げ層である「盛土中下位層」(M19~23・54・55層)および「盛土上位層」(M16・17層)が堆積する。両層群とも一定量の大洞C2式土器を含むことから、盛土積み上げが今回の調査地点周辺に及ぶのは、大洞C2式期前後であり、大洞C2式期まで盛土直下層上面への遺物堆積が部分的に継続していたものと判断される。なお、東西断面①西端側M57層に土器破片がまとまって分布する部分があり、調査では確認できなかったが、小形の掘り込み内に埋められた遺物であった可能性がある。

M56層よりも上位は、既述のように基本的に人為的な盛土積み上げ層と判断される。そのうち、盛土中下位層は、畦の土層断面観察からは、ほとんどは層厚10~20cm前後の薄層(第3表「特徴等」欄の「薄」)およびより小規模な断面凸レンズ状の小塊(同表「特徴等」欄の「小」)の累積である。前回の調査結果も総合すると、盛土中下位層の土砂積み上げはNQ37区周辺から始まり、主に北北西側と南南東側に向かって傾斜するように堆積し、最終的に北北西長軸の長楕円形平面状に広がるものと推定される(第4図)。今回の調査区にはNQ38d・NQ39b・NR38c・NR39a区周辺に盛土中下位層北端が部分的に及んでいる。薄層としたものは、ばらつきはあるものの、多くは面積4~10m²前後、体積0.4~2 m³前後の堆積単位かと推定される。基盤の褐色土粒等を比較的多量に含む層も存在するが、いずれも基質は黒色~黒褐色を呈する。これらの層には、炭化物が顕著であるが、焼土粒は目立たない。

第1次調査ではNQ37区周辺の盛土中心から南側にかけての範囲は、主体をなす出土土器から主として大洞C1式期に形成されたものと推定した。これに対し、今回調査した盛土中下位層では、大洞C1式土器に加えて、大洞C2式土器もまとまって出土する。土砂の積み上げと遺物の堆積は必ずしも同時に行われたとは限らないこと、盛土内に進入して土砂を積み上げる際などに表面の遺物は踏み込み等の攪乱を受ける可能性があることなどから、盛土層堆積時期をその出土土器から判断するには注意が必要であるが、盛土北端側では、当該層群の堆積は大洞C2式期まで下る可能性が強いと推測される。ただし、累積するM19~23層とは離れて堆積するM54層およびM55層は大洞C2式土器は相対的に少なく、前者より堆積時期が遅る可能性があろう。

上位の「盛土上位層」(M16・17層)は主に盛土中下位層の東側と西側に広く堆積する。その東西範囲はNOラインとNPラインの中間周辺からNTラインのやや東寄り周辺まで、北端はいずれも39ラインと40ラインの中間周辺である(第4図)。本層群のうちのM17層は東西の周辺部では層厚が30cm以上と厚くなっている(第3表「特徴等」欄の「厚」)。本層群出土土器は、大洞C2式土器を主体に大洞C1式土器、大洞BC式土器等が混在していることから、大洞C2式期の堆積と推定される。本層群は、盛土中下位層群とは堆積成因が異なり、盛土上位を削平・整地し、周囲に埋め立てた可能性も想定される。なお、M17層の直上に堆積することから、盛土上位層としてまとめたM16層は、東西断面②では

厚さ10cm余りの薄層状を呈する。層相はM17層と比較的類似し、また、その上位は水田造成時に削平されており、M17層と一連の堆積の可能性が高いものと推定する。

このほか、盛土中には、部分的に崖錐堆積層と推定できる箇所(M18層)があるものの、SM60盛土全体を覆うような大規模な崖錐堆積層は認められない。当該地点周辺は大洞C2式期までは比較的安定していたものと想定され、大洞B2式期から大洞C2式期まで継続して遺物が堆積している。また、盛土直下層および旧表土②よりも相対的に上位の黒ボク土系旧表土と推定されるM10・11・15層を旧表土①としてまとめて、大洞B1式土器から大洞C2式土器まで混在するが、出土量は僅かである。

SM60盛土全体では、大洞B2式期から遺物堆積が活発化し、大洞C2式期まで盛行することが認められる。遅くとも大洞A式期には、SM60盛土形成は終了する。

《出土遺物》以下では、上述の「広義の盛土」(SM60盛土)出土遺物のほかに、水田造成土(Ib層)出土遺物および新旧の崖錐堆積物(Ila層、Ile層、M18層)出土遺物も合わせて報告する。今回の調査では水田造成土出土例等も含めて、縄文土器破片は全体で約125,000点、総重量約1,470kgが出土した。縄文土器については、完形もしくは完形に近いものおよび類例の少ない破片を中心に約380点を選択して掲載した(第13~58図)。縄文土器の器種組成、特徴等については、後述する。

土製品・石器・石製品および骨角器の内訳は第6表のとおりである(第59~103図)。

第6表 土製品・石器・石製品・骨角器内訳

	種 別	第2次 調査		第1次 調査		合計
		出土数	出土数	出土数	出土数	
土製品	土偶	28(25)	46	74		
	土版	3(2)	0	3		
	円盤状土製品	14(12)	17	31		
	有孔円盤状土製品	3(3)	0	3		
	土製耳飾	1(1)	0	1		
	土玉	1(1)	0	1		
石 器	その他の土製品	1(1)	8	9		
	石錐	387(50)	346	733		
	石槍	34(11)	8	42		
	石錐	212(39)	181	393		
	石匙	151(33)	232	383		
	石鏟	19(6)	5	24		
	スクレイパー	229(33)	197	426		
	楔形石器	3(2)	61	64		
	二次加工ある剥片	278(30)	1,097	1,375		
	異形石器	19(19)	18	37		
石製品	石核	87(9)	69	156		
	凹石類	36(10)	120	156		
	敲石	10(4)	2	12		
	石墨	8(4)	5	13		
	台石	0(0)	3	3		
	打製石斧	11(3)	0	11		
	磨製石斧	23(20)	25	48		
	礫器	0(0)	7	7		
	石網	43(7)	32	75		
	石刀	2(2)	0	2		
骨角器	石棒	1(1)	0	1		
	岩偶	1(1)	0	1		
	岩版	18(13)	19	37		
	縄刻櫛	1(1)	0	1		
	円盤状石製品	21(10)	24	45		
	有孔円盤状石製品	1(1)	0	1		
	有孔石製品	11(11)	17	28		
	弓矢	4(3)	0	4		
	小玉	55(55)	4	59		
	小玉未製品	12(12)	0	12		
骨角器	その他の石製品	3(3)	4	7		
	棒状骨角器	2(2)	0	2		

()内の数字は掲載点数

土製品では、土偶が小破片も含めると28点出土し、最も多い。土偶には、大洞BC式~大洞C1式期の遮光器土偶の大形破片3点がある(第59図1~3)。その他の土偶は中実の小形例がほとんどである。そのうち、X字形土偶(第60図1・2)は大洞C1式期以降に属するとみられるが、多くは詳細な時期は判然としない。また、今回の調査では、新たに土版、土製耳飾、土玉などが出土したが、いずれも僅少である。土製品全体においても、土器、石器の出土量に比べ、その出土量は極めて僅かである。

石器では、定型的な石器中、石錐が最も多出し、これに、石錐、石匙と続く。第1次調査の石器組成と比較すると、新たに打製石斧が出土している一方、二次加工ある剥片、楔形石器、凹石類の出土量が減少している点が注意される。二次加工ある剥片と楔形石器については、第1次調査とは認定基準が結果的に変化している可能性が考えられる。凹石類の出土量の違いについては、当該石器が主として食料加工工具であったとするならば、後述する盛土の性格の変容と関連するかもしれない。

第1次調査と第2次調査とを合わせた全体の石器組

成を見ると、石鏃、石錐、石匙、スクレイバーなど剥片石器が多出するのに対し、礫石器は相対的に少ない。特に石皿や台石などの大形礫石器が僅少で、かつ、これらの多くは破損品である。このほか、剥片が第2次調査で約14,400点、重量で約109kg出土している。第1次調査分を合わせると、剥片は約34,100点で、剥片と石核との数量比はおよそ220：1となる。

なお、赤色顔料の原料となる赤色礫(赤玉)が3,533点、重量で約59kg出土している。石皿および凹石類には赤色顔料が付着した例があり(第87図3・4、第89図2・3)、赤色礫を粉碎し、赤色顔料を生産する際に使用されたものであろう。

石製品では、小破片を含めると石剣が最多である。石剣は破片資料がほとんどであるが、そのうち、第92図1・2、第93図2は接合し、ほぼ完形となった。後二者は分割されて廃棄された可能性が強いものとみられるが、第92図1は各破片が隣接して出土しており、本来完形のまま廃棄された可能性が高い。また、石刀1点(第93図4)もほぼ完形で出土した。第1次調査でもほぼ完形に接合した石剣が2点出土しており、本遺跡では石剣類が完形となる例が目立つ。なお、第93図2の石剣および第94図1の石刀基部破片は非在地素材である緑色片岩製で、当該素材は関東地域の三波川帯に産出する緑色片岩と酷似するとされる(第5章第1節)。

このほか、NR38b区盛土直下層で主に変質流紋岩を素材とする小玉未製品約12点および同質の径10~15mm前後の小円礫30点余りとがまとまって出土している(第103図1~12)。なお、勾玉を含めた玉類のうち、ヒスイ・碧玉素材のものは片面穿孔が優勢で、変質流紋岩系素材のものはほとんどが両面穿孔となっている。

石器・石製品の素材の推定産地等については、第5章第1節および第2節を参照されたい。

骨角器は2点出土した。いずれも被熱した棒状骨角器の破片である(第103図13・14)。このほか、微細な焼骨を若干採取している。そのうち2点はイノシシ、1点はシカと同定され、その他の資料も多くはシカまたはイノシシの可能性が高いとされている(第5章第3節)。これらの焼骨は食糧残渣であったと考えられよう。

以下では、出土縄文土器について、その器種組成や特徴などをまとめることとする。

SM60盛土出土縄文土器は、ごく少量の縄文時代前期~後期土器破片を除き、そのほとんどが縄文時代晩期前葉から中葉に属する。ここでは、縄文時代晩期土器をJB群として特に群別する。JB群は大洞B1式から大洞C2式の大洞諸型式に属すると判断されるものが大半を占めるが、これら以外に、大洞諸型式とは異なり、単位文様を点対称に規則的に繰り返す傾向に乏しく、個別の文様および文様構成のみだけが著しく、ミガキ調整をほとんど施さない、一見して「粗雑」な印象を受ける特徴的な一群が存在する(第51~58図)。ここでは、前者の大洞諸型式に属するものをJB群1類(以下、場合によっては単に「1類」と呼ぶ)、後者の一群をJB群2類(同じく「2類」と呼ぶ)として分ける。

1類は、大洞B1式、大洞B2式、大洞BC式、大洞C1式、大洞C2式の各型式に細別する。ただし、大洞C1式と大洞C2式については、特に口縁部に横位沈線のみを巡らす深鉢形もしくは鉢形土器等の細別判定が困難なものは、大洞C1~大洞C2式としてまとめた。

なお、粗製の深鉢形土器は、詳細な型式比定が困難であり、大半をJB群(縄文晩期前半)として括した。現時点での見通しとしては、概ね晩期前葉はLR縄文を横位~斜位回転施文する例が優勢であり、晩期中葉になると、RL縄文が縱走する例が顕著となり、僅かに横位回転の非結束羽状縄文を施すもの

が伴うようである。津軽地方の深鉢形土器に特徴的な縦位の条痕調整を施す例はほとんど認められない。^(註6)また、いわゆる九年橋型深鉢形土器や秋田県南部に分布する結節回転文を施す例も認められない。

2類は、岩手県久慈市所在の大芦I遺跡の発掘調査報告書において、北海道道南の土器との影響関係が想定される、繩文時代晩期前葉～中葉段階の「異系統土器」とされた土器群や北海道松前町所在の東山遺跡出土土器をもとに閑根達人が「東山1b式」と型式設定した土器群に類似資料が存在する。^(註7)なお、本類は、第1次調査報告書のSM60盛土の報告で「不整例」としたものに相当する。^(註8)

上述したようにJB群を類別および大洞諸型式に細別後、器種については、深鉢形土器(器高／口径比1以上)、鉢形土器(器高／口径比0.5以上1未満)、浅鉢形土器(器高／口径比0.5未満)、壺形土器(口頸部最小径／体部最大径比0.75未満)、注口土器、香炉形土器および台部に分け、さらに口縁部、体部、底部等の部位ごとに分けた。なお、出土土器には極めて小形のいわゆるミニチュア土器も存在する(第50図2～18)。しかし、破片資料では判別が困難なものも多いため、ここでは分離せず、上記の各器種に分類した。各分類資料は、総重量および単純最大長1cm以上の破片の点数をそれぞれ計量・計数した。計数に当たっては、同一個体と判断した破片はまとめて1点とした。分類においては、小破片資料の器種判定の確実性は低く、特に体部破片では、鉢形土器や繩文地文の壺形土器破片の多くを深鉢形土器と判定した可能性が高い。ここで、口縁部を含む破片資料および台部破片について、各細別ごとの器種別出土量を集計する(第7表)。深鉢形土器は既述のように細別不明な例が過半を占め

第7表 器種別出土量(口縁部・台部)

(点/g)

	深鉢形土器	鉢形土器	浅鉢形土器	壺形土器	注口土器	香炉形土器	台部
大洞B1式	16/391	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0
大洞B2式	99/10,008	197/8,211	21/1,273	7/33	4/67	0/0	0/0
大洞BC式	43/1,689	502/8,110	305/7,424	124/4,051	310/12,917	4/862	14/490
大洞C1式	18/489	1,308/15,194	759/21,137	233/6,048	28/1,837	0/0	35/1,033
大洞C1～C2式	592/16,786	1,505/18,941	179/1,644	187/7,982	0/0	0/0	1/4
大洞C2式	12/303	388/7,133	837/22,717	71/1,507	14/768	0/0	2/15
JB群2類	161/16,213	24/1,638	1/13	4/153	0/0	0/0	0/0
繩文晩期前葉	5,079/122,141	686/15,055	154/1,802	1,010/28,207	7/31	4/323	675/21,857

るが、各細別を通じ、器種組成の主体を占め、また、鉢形土器も一定量伴うものと予想される。定量的に提示することはできないが、深鉢形土器および鉢形土器の過半には、コゲや煤などの煮沸痕跡が顕著であり、調理用具として使用されたものと判断される。他の器種では、大洞BC式に注口土器が目立ち、大洞C1式、大洞C2式では激減すること、逆に大洞BC式より大洞C1式から大洞C2式で浅鉢形土器が点数比・重量比とも倍以上に増加することが注意される。香炉形土器は僅少である。また、2類では、深鉢形土器が過半を占め、少量の鉢形土器、僅かな浅鉢形土器、壺形土器が伴い、注口土器は認められない。

なお、壺形土器(第37図1・7、第39図8)、注口土器(第47図1)、台付浅鉢形土器？(第50図1)などには、焼成後に加熱による穿孔を施した例が存在する。また、精製の壺形土器には被熱により表面がはじけた例も認められる(第39図1～4)。

次に、2類について、その主体を占める深鉢形土器および鉢形土器の属性を検討する。

深鉢形土器・鉢形土器の器形については、とともに、口縁部が外反するもの(A器形)、口縁部が直立もしくは体部から緩やかに内湾するもの(B器形)、口縁部が内屈するもの(C器形)とに大別する。A器形については、口縁部の外反の程度や体部と口縁部との境界の屈曲の程度などにかなりの変異があ

り、C器形例は僅少である。また、大きさには大小があり、深鉢形土器では口径10cm前後的小形例(第54図9)から口径30cmを越す例(同8)まである。

本類の縄文以外の文様施文は一部を除き、口縁部もしくは口縁部から体部との境界部分までに限定される。体部および一部資料の口縁部には縄文が施文されるが、LR縄文が優勢である。以下、口縁部文様をもとに分類する。ただし、本類の文様は1類と異なり、個々の土器によって変異が大きい。また、第1次調査出土資料を含めた総合的、体系的な検討ができないため、下記の分類は暫定的なものである。

分類では口縁部文様に一定の系統関係を仮定し、I系(連弧文系)、II系(入組三叉文系)、III系(刺突文系)の3系統を設定する。ただし、他系統の文様要素や構成等を取り入れたと想定される例も認められ、実態としては各系統を截然とは分け難い。さらに、各系統に対比し難い例も存在し、今後の検討が必要である。

I系(連弧文系)

弧状の沈線を連ねた「連弧文」、あるいは「連弧文」と組み合わされる文様と関係すると推定する文様を施すものをまとめる。連弧文の形状、文様の構成等からa種～c種に細分する。

a種(第51図1～16、第58図1～3)：口縁部に弧線を連ねて連弧文を描き、口縁部体部境界に横位沈線もしくは刺突列を充填した横位平行沈線を巡らす。A・B両器形が主体を占めるが、例外的にC器形も存在する(第51図16)。また、A器形には、体部上位が丸みを帯びて内湾し、口縁部が直立気味に立ち上がる台付鉢形土器がある(第58図2)。連弧文の各弧線は連続して一筆書き状に描くのではなく、弧線ごとに描き分ける。弧線は上側が開くもの(「上向き連弧文」と呼ぶ)と逆になるもの(「下向き連弧文」と呼ぶ)とがある。前者では弧線が二重となる例が多く、さらに多重となるものもある(第51図11、第58図1)。後者は一重である。また、口縁部体部境界の横位平行沈線間に充填する刺突列は短沈線に近い横長の横位刺突が一般的であるが、綫長で横に刺突による粘土盛り上がりが残る例もある(第51図1)。本種の文様構成では、部分的に刺突をさらに加える例(第51図2・3・14～16、第58図2)、口縁部に縄文地文がある例(第51図4)などのほか、口唇部に角状の瘤を付けた小突起が付き、小突起から口縁部に連弧文と円形透かし穴および円形刺突を加え、体部に下向きと上向きの連弧文を入り組むように施した鉢形土器(第58図3)もある。口縁端部の形状には、波状口縁(第51図1)、頂部が分かれる小山形突起が連なるもの(同2)、小山形突起間に刻み目列を施すもの(第58図2)、平縁で口唇部に刻み目列を施すもの(第51図14)、平縁のもの(同15、第58図1)などがある。

b種(第52図1～8)：口縁部上半に上向き連弧文を施し、下半にも文様を施すもの。多くは口縁部体部境界には横位沈線あるいは刺突列を充填した横位平行沈線を巡らす。A器形深鉢形土器がほとんどである。口縁部下半の文様には、横長の楕円形区画内に縄文を充填したもの(第52図1)、横方向の横長の曲線状の沈線を施したもの(同2)、末端が渦巻く下向きの弧線と上向きの弧線を入り組ませたもの(同3)、下向き二重連弧文と口縁部体部境界の横位沈線に連結する刺状の山形沈線を施したもの(同4・5)、弧線が連結した波形の沈線を連ねたもの(同8)などがある。口縁端部の形状は、低波状口縁(第52図1)、小山形突起が付くもの(同4・5)、頂部が分かれる小山形突起が付くもの(同7)などがある。

c種(第53図1～11、第58図4・5)：口縁部に渦巻き状～C字状の曲線文を施すもの。深鉢形土器に

はA・B両器形があり、鉢形土器はB器形である。A器形深鉢形土器では外反する口縁部と体部との境界が屈曲して稜をなす特徴的な形態のものがある(第53図1・2)。連弧文は施されないが、第53図1では、b種の第52図3の口縁部下半の弧線を取り組ませた文様と類似した弧線の両端が渦巻く文様を施したり、第53図2では、b種の第52図4・5などと類似する口縁部体部境界の横位沈線に連結する山形沈線を施すなど、基本的にb種の口縁部下半の弧線等を組み合わせた文様と関係すると想定される。ただし、b種の文様と比較するとより変容が著しい。口縁端部の形態には、小山形突起が付くものが多い(第53図1・2・4など)。

I系の特徴の一つである連弧文は、東北北部の大洞B1式の山形波状口縁深鉢形土器の口縁端部に施される弧状沈線の系譜を引くものと想定される。第52図1は大洞B1式の影響を残す例であろう。このように、連弧文を前時期の大洞B1式からの系譜を引くものと想定するならば、c種には連弧文が消失することと文様の変容が著しいことから、I系の中では相対的に後出的な特徴を認めることができようか。

II系(入組三叉文系)

入組三叉文もしくはその変異と想定される文様を施すものをまとめる。a種~e種に細分する。

a種(第53図12~14、第54図1)：入組三叉文を施すもの。JB群1類とは異なり、いずれもミガキ調整を施さない。ほとんどがA器形の深鉢形土器である。一般に横位沈線もしくは刺突を充填した横位平行沈線で口縁部の上下端を区画する。^(註10) 東北北部の大洞B2式に一般的な、点対称に三叉部同士が入り組む形の入組三叉文と異なり、三叉部とは反対側の末端が湾曲する三叉文が、それぞれ三叉部と末端とが入り組む形で連続するものがある(第53図12)。また、縄文地に入組三叉文と刺突列を充填した二重の弧状沈線とを施すもの(第54図1)もある。口縁端部は頂部が分かれた小山形突起が付く例が多い。

b種(第54図2~9、第58図6)：末端が入り組むように連続する横位逆S字もしくはS字状沈線(以下、「入組S字文」と呼ぶ)を施すもの。この入組S字文は、第53図12等の三叉部と末端とが入り組んで連続する特徴がある入組三叉文の三叉部分の分岐を省略したものと同一形であり、当該入組三叉文が簡略化したものと想定される。深鉢形土器はA器形、鉢形土器はB器形である。本種には、横位沈線などで口縁部の上下端を区画する例(第54図2)のほか、口縁部下端のみを区画する例もある。後者には入組S字文に刺突列を加える例があり(第54図8・9)、より変容したものと評価できるかもしれない。口縁端部の形態では、平坦な口唇部に刻み目列を加える例が多い。また、第54図9は台付の小形の深鉢形土器である。

c種(第55図1~3)：横位S字状沈線～渦巻き状沈線を取り組ませた文様を施すもの。b種の入組S字文から変化したものと考えられる。A器形の深鉢形土器が認められる。口縁部上下端は横位沈線で区画する例が多い。第55図1は横位沈線で区画した口縁部上端に縄文を施す。口縁端部は平縁が多い。一部に刻み目を加える例がある(第55図1)。

d種(第55図4~13)：波状の沈線文(以下「波状文」と呼ぶ)を施すもの。波状文は連弧文とは異なり、原則として一筆書き状に連続して描かれる。A器形深鉢形土器のほか、僅かにB器形深鉢形土器も存在する(第55図6・11)。口縁部下端のみを横位沈線で区画する例がある(第55図9)が、口縁部上下端を横位沈線で区画する例が優勢である。このほか縄文地口縁部の上下端を横位刺突列で区画する例(第55図11)もある。口縁端部は、小突起が連続するもの(第55図4・9)もあるが、平縁のものが多く、

一部に口唇部に刻み目を施すものがある(同5など)。本類で優勢な口縁部下端とともに上端も区画する例は、I系の連弧文系資料では比較的少なく、II系の入組三叉文系資料に顕著である。このことから、本類の波状文は、連弧文からの変化した可能性も想定し得るもの、ここでは入組S字文から変化したものとして、本類をII系に含めておく。ここでの入組S字文から波状文への変化を認めるるとすると、本種は相対的に後出の可能性があろう。

e種(第55図14・15、第56図1・2)：一部が入り組む横方向から斜め方向の曲線状の沈線に部分的刻み目もしくは刺突を加えるもの。本類は一部に入組状の沈線が認められることから、II系に含めたが、例数が乏しく、かつ、口縁部が縄文地となるものがある(第56図1・2)など変異が大きい。A器形深鉢形土器のほか、B器形深鉢形土器もある(第56図1)。口縁端部は、小山形口縁もしくは小山形突起が連続するものが多い(第55図15、第56図1・2)。本種は、第55図14のように入組状の沈線に一部刻み目列を加えて単位となる文様を構成する点は羊齒状文と共通すると考え、相対的に後出のものと想定することもできようか。

III系(刺突文系)

横位の刺突列もしくは刻み目列および横位平行沈線を主要な文様とするものをまとめる(第56図3～13、第57図1～5、第58図7～12)。深鉢形土器、鉢形土器ともA・B両器形がある。

刺突の形状は、三角形状のもの(第56図10)、方形の押し引き状のもの(同12)、横位の短沈線状のもの(同4、第57図2)、縦位の刻み目列状のもの(第58図9)など多様であり、また、文様の構成にも、口縁部上下端を横位沈線で区画するもの(第56図3)、口縁部下端を横位沈線で区画し、口縁部に複数の刺突列を充填するもの(同4)、横位沈線間に刺突列を充填するもの(同10)など変異が著しい。また、鉢形土器には、横位沈線間に刻み目列を充填したもの(第58図9)のほか、口縁部に横位平行沈線を施した例があり(同10～12)、多様である。ここでは、文様等の系統的な変遷を明瞭に認定し難いことから、細別は行わず、一括しておく。口縁端部は2連から3連の小山形突起が付く例がある(第56図3)が、平縁で、口唇部に刻み目列を施すものが多い。

I系・II系も含め、口縁端部の突起の形状の違いや口唇部の刻み目の有無などはある程度時期差を反映していると想定されるが、現時点では具体的な根拠を欠く。

このほか、類例が乏しいために、ここでは系統認定しなかった例には、口縁部上下端に横位沈線のみ施し、沈線間は無文の深鉢形土器(第57図6)、口縁部から体部全面に不整な曲線文様を施す深鉢形土器(同7・8)、口縁部が無文のC器形深鉢形土器(同9)などがある。

以上の深鉢形・鉢形土器のほかに、僅かに浅鉢形土器および壺形土器を確認している。第58図13は赤色塗彩された椀形の浅鉢形土器破片である。口縁部には横位沈線と刻み目列を施し、体部には渦巻き状？の磨り消し繩文を施す。ここでは2類の浅鉢形土器としたが、小破片であり、必ずしも確実ではない。壺形土器は、いずれも破片資料で全体の器形が判明する例はない。口縁部破片では、短い口縁部が外反する小形の器形が認められる。文様には連弧文と刺突列・入組三叉文(第58図14)、渦巻き状の曲線文(同15)、刺突列を充填した横位平行沈線(同16)など多様であるが、深鉢形・鉢形土器の文様種別に大きくは対比可能であろう。

2類は、例えばI系a・b種の連弧文やII系b種の入組S字文など、上述した東山1b式と類似する要素が認められる。関根は、東山1b式は大洞B2式期(晚期1b期)に併行する土器型式として設定しており、

これらの土器群も、入組三叉文を施すII系a種も含め、大きくは大洞B2式に併行する可能性が高いものと推定される。I系c種、II系c・d・e種などについては、上述した文様要素の系統的な変遷等を認めるならば、大洞BC式期前後まで下る可能性も予想されるが、現状では確実な根拠を欠く。また、III系は大きくはI系・II系と併存するものであろう。

大洞B2式とJB群2類の出土量を見ると、深鉢形土器については、点数および重量とも比較的近似している(第7表)。おそらく大洞B2式期には2類はある程度まとまった量が出土し、大洞BC式期以降、2類例は減少し、大洞系(精製)土器が主体を占めるものと推定される。

既述のように、2類と東山1b式とには、文様要素やその構成に共通要素も認められる。その一方で、2類には、東山1b式に特徴的な繩文地文の口縁部に刺突列を施す深鉢形土器は認められず、東山1b式にはI系c種に対比可能な例は顕著ではない。さらに、2類の器種組成では、ほとんどが深鉢形土器・鉢形土器で占められ、関根達人が東北地方にはみられないか、極めて稀と指摘する東山1b式に存在する体部が屈折し口頭部が短く直立する浅鉢形土器や上面觀が舟形などの異形を呈する浅鉢形土器が認められないなど相違点も少なくない。現時点では、津軽地方など本遺跡の周辺地域の状況が不明瞭であるが、北海道南西部～東北北部の中で地域差があるものと考えられる。

《時期・性格》第1次・第2次調査結果を総合すると、盛土およびその直下の堆積層は、大きくは以下のように変遷する。まず、繩文時代晚期当初の地表面直上には、大洞B2式期から大洞C2式期にかけて大量の遺物が堆積する。特に相対的に浅い窪地に位置するSQ127環状配石遺構周辺では大洞BC式期から大洞C1式期にかけて遺物が集中的に堆積し、遺物包含層を形成する(盛土直下層)。遺物包含層としての分布は、SQ127環状配石遺構周辺の浅い窪地状地点とその北側の緩斜面が中心である。本層中には、大量の遺物のほかに赤色顔料撒布跡のように儀礼的行為の痕跡と想定されるものも存在する。遺物包含層は、SQ127環状配石遺構周辺全面を覆うように形成されており、SQ127環状配石遺構をはじめとした周辺の諸施設と関わる儀礼的廃棄行為の所産と想定することが可能であろう。その後、もしくは遺物包含層形成の後半段階と平行して、NQ37区周辺から周囲に向かって、主として厚さ10～20cm前後の薄層状となる0.4～2m²程度の土砂のまとまりが人為的に繰り返し積み上げられて累積する。積み上げは盛土中央部から南側では大洞C1式期に盛行し、北端側では大洞C2式期まで継続したものと推定される(盛土中下位層)。積み上げのための土砂は北側の崖錐堆積層(Ie層)から採取したと想定することが現時点では妥当であろう。本層群中には、明確な遺構は確認できず、また、赤色顔料撒布跡のような儀礼的行為の痕跡も認められない。出土遺物の主体をなすのは、深鉢形土器および鉢形土器で、これに一定量の浅鉢形土器が伴うと推定される。調理具および飲食具を主体とした遺物が廃棄されるとともに、土砂が繰り返し積み上げられたと想定され、その性格は前時期とは変容している可能性が強い。調理・飲食などと関わる大量消費行為の痕跡と評価することもできよう。その後、大洞C2式期のうちに、盛土頂部を削平し周囲の低位部分を埋め立て、あるいは、北側の崖錐堆積層などから土砂を採取し、盛土周囲の低位部を埋め立てたと判断される(盛土上位層)。このような埋め立て行為は、盛土上面とその周囲を平坦に造成する、さらには、その造成面に何らかの施設を構築する意図があったとする想定もあり得るかもしれない。盛土上面で遺構は未確認であるが、盛土上位は水田造成により削平されていることから、現状ではその当否については断定できない。

このように、SM60盛土は、大洞BC式期から大洞C1式期にかけて、周辺に造成された儀礼的施設な

どを覆うように大量の遺物が堆積し、その後の大洞C1式期から大洞C2式期にかけて、遺物廃棄とともに土砂積み上げが繰り返し行われ、最終段階の大洞C2式期に盛土周辺が埋め立てられるという、大きくは3段階の変遷をたどるものとみられる。上述のように、当初の段階の遺物堆積は儀礼的施設に関する儀礼的廃棄行為の所産の可能性が強く、その後の大量の遺物を伴う盛土形成は調理・飲食など関わる大量消費行為の所産であったと想定される。最終段階の盛土周辺の埋め立てについては、現時点ではその性格は判然としない。

- 註1 当該面は、大きくは上位の段丘面に相当するものと推定されるが、全体に起伏に富み、明瞭な平坦面を形成しない。本面の形成過程については、なお検討する必要があろう。
- 註2 第1次調査で盛土より上位の崖部堆積の可能性ある層としたIIa層に大きくは対応する可能性も想定されるが、連續性を直接確認していないため、IIa層とする。
- 註3 現在所在不明であるが、調査時にIIIe層相当層で縄文時代晚期前後の縄文土器破片を確認した。
- 註4 今回の調査所見から、南北断面②では、第1次調査報告の34層は今回の調査区寄りで南側の土砂積み上げ部分(M49層)と北側の遺物が集中する旧表土部分(M57層)とに上下に分かれるものとして修正した。さらに、東西断面③では、同報告57層は分布が断面中央付近に限定され(M56層)、その下位の58層が東西方向に広がるもの(M57層)として修正した。また、同断面②東側の第1次調査報告53・54・57・58・60層には、NP39方眼杭を挟んだ部分の対応にすれがあったため訂正した(M18・M57・M63層)。
- 註5 M54層からは大洞C2式土器は出土しておらず、M55層では、全体で487点9,942gの縄文土器が出土し、そのうち、大洞C2式土器は6点34gである。
- 註6 当該例は、第1次調査でごく少量確認している(第1次調査報告書第55図6など)。
- 註7 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『大芦I遺跡発掘調査報告書 ふるさと農道緊急整備事業大芦地区開発発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第306集 1999(平成11)年
- 註8 間根達人「大洞系・類大洞系・非大洞系土器の検証 一道南・道央における縄文晚期初頭の土器型式構造」 東北大大学院文学研究科考古学研究室・須藤隆先生退任記念論文集刊行会編『考古学談叢』 2007(平成19)年
- 註9 JB群2類の類例は、向様田A遺跡などの森吉山ダム建設事業地内の遺跡でも出土しているほか、北秋田市白坂遺跡などでも散見される(報告書第34図10、第35図116、第44図209など)。
- 註10 第1次調査報告書第41図13・第69図11は口縁部上半に連弧文、口縁部下半に入組三爻文を施し、口縁部下端は横位平行沈線で区画する。I系b種とII系a種の文様要素の併存個体と捉えるならば、両種が併行することを示唆するものであろう。
- 註11 東山1b式については、今後、その一括性的検証や大洞系注口土器との併行関係の検討が必要であろう。
- 註12 間根は、註8文献で東山1b式には大洞BC式～大洞C1式に併行する上ノ国式が後続するとし、東山遺跡出土土器から該当する資料を提示している。本遺跡のJB群2類土器と比較すると、II系d種の波状文などは類似するが、絶体として、相互に直接対比可能な資料は少ない。
- 註13 註8文献
さらに、間根が註8文献で、大洞BC式併行期(上ノ国式)において東北地方の晩期縄文土器にみられない特徴として指摘している台部の抉り込みをほとんどない台付(浅)鉢形土器や体部が筒状を呈し口縁部が直線的に聞く台付鉢形土器、あるいは有段広口壺形土器などもJB群2類には認められない。

42

41

40

39

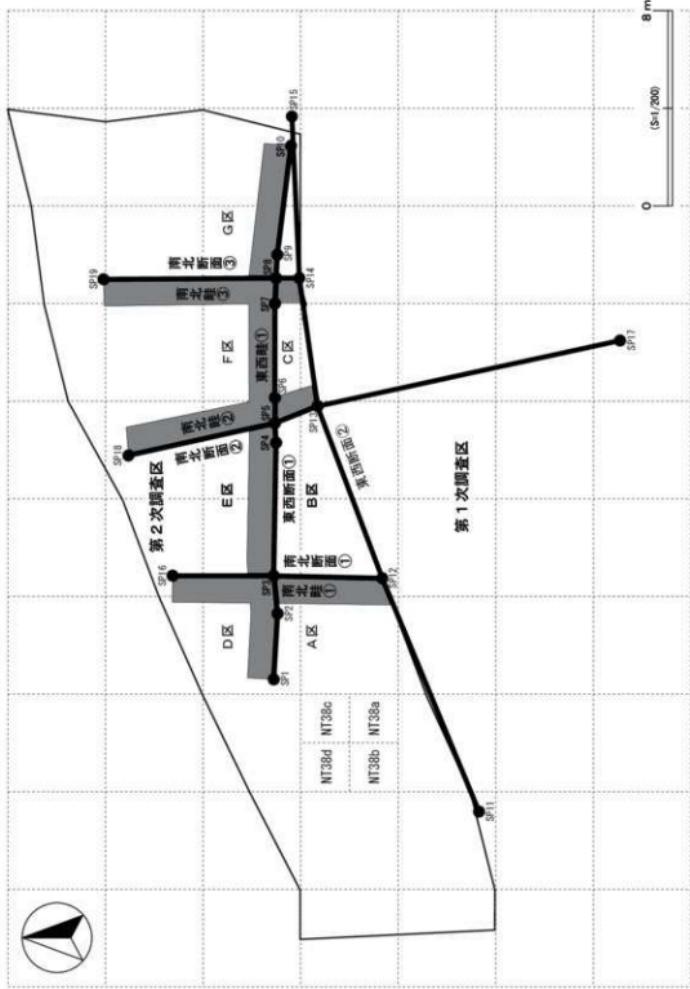
38

37

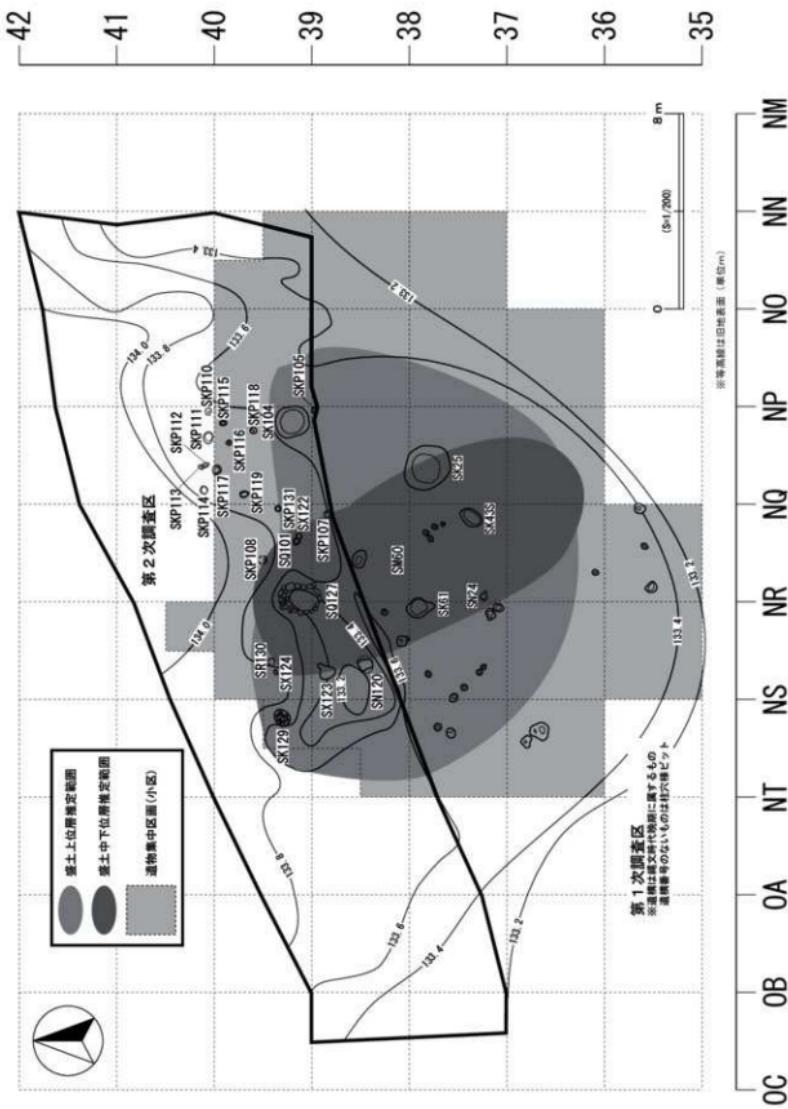
36

35

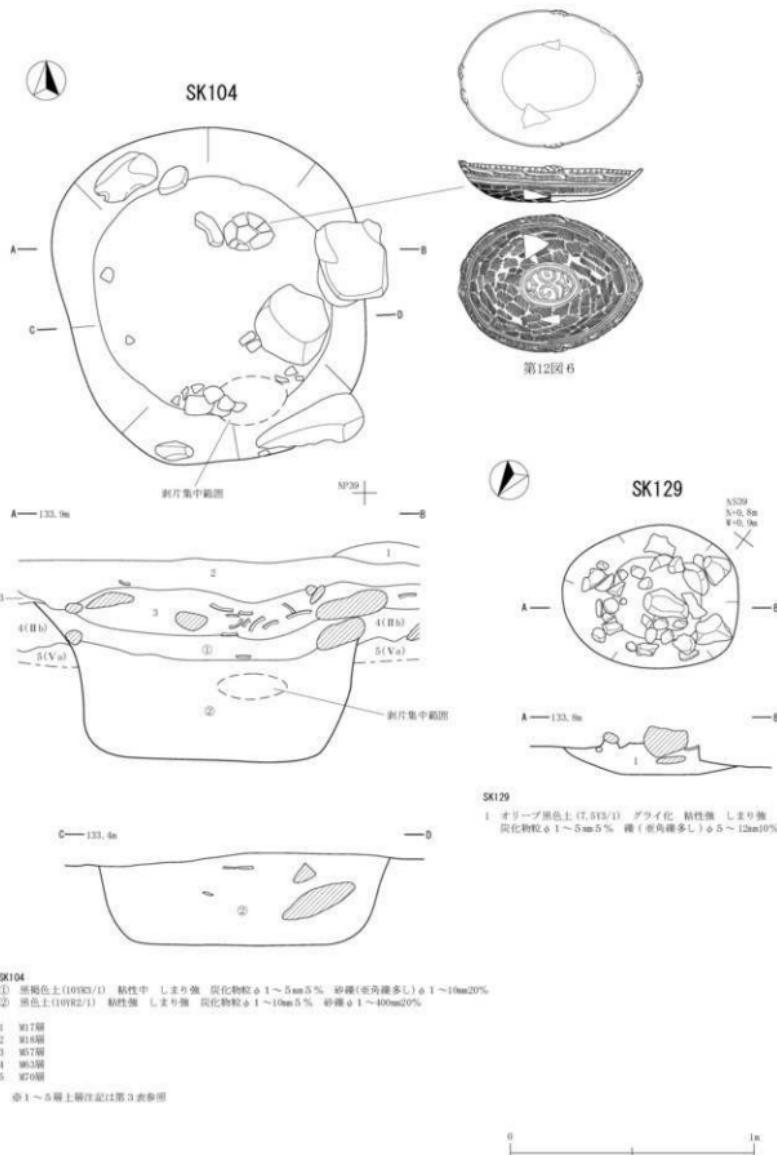
OC 0B 0A NT NS NR NQ NP NO NN NM



第3図 方眼配置と畦および土層断面位置

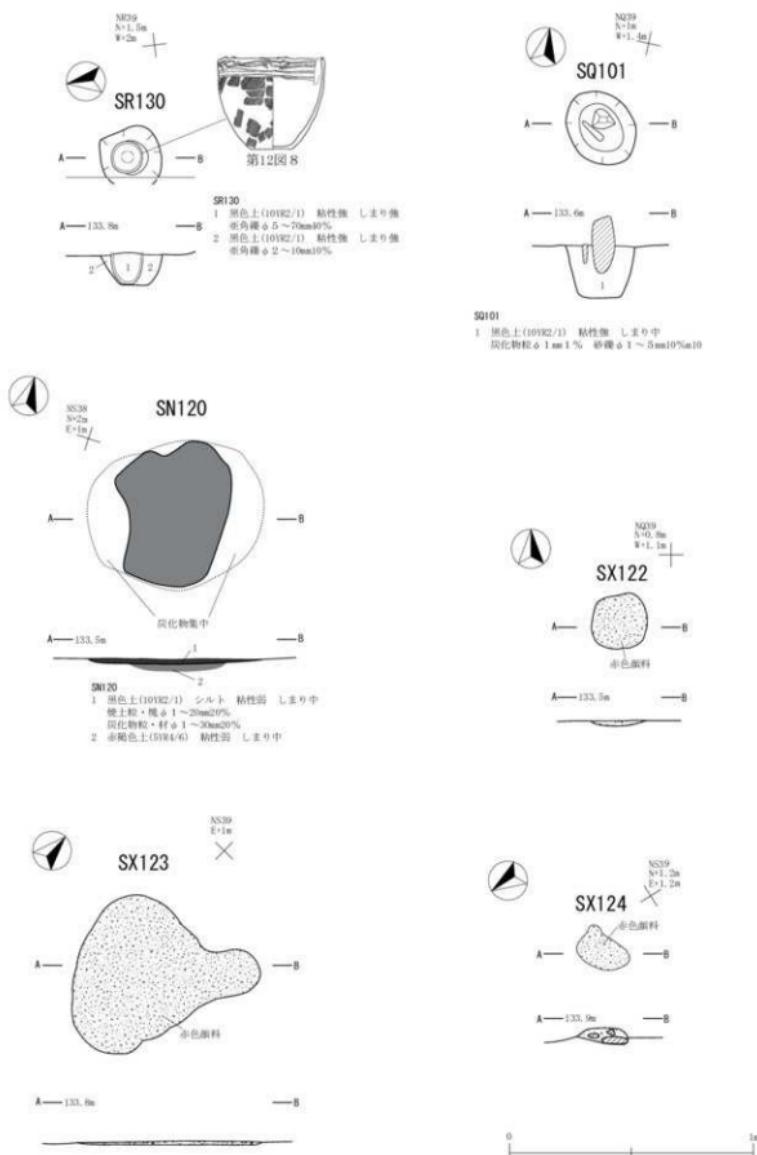


第4回 遺構配置図

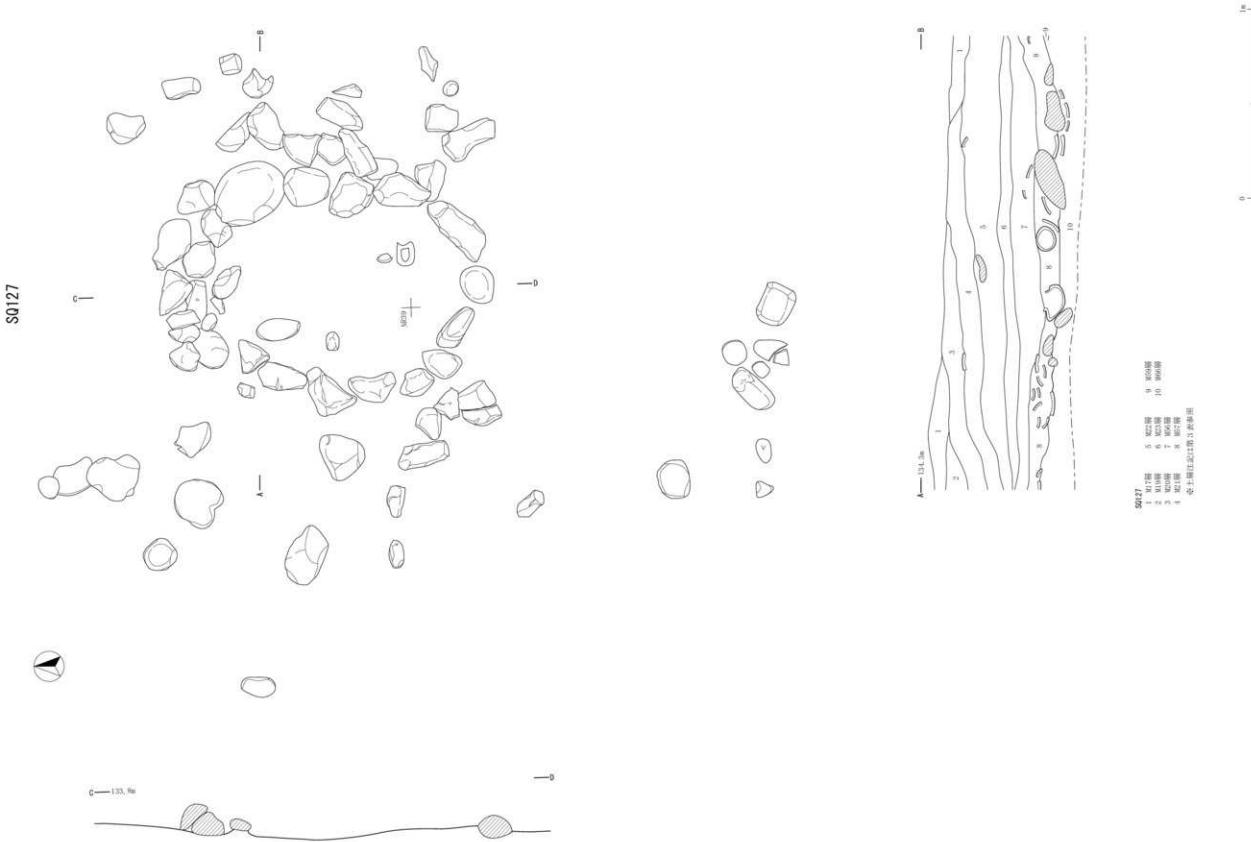


第5図 SK104・129土坑

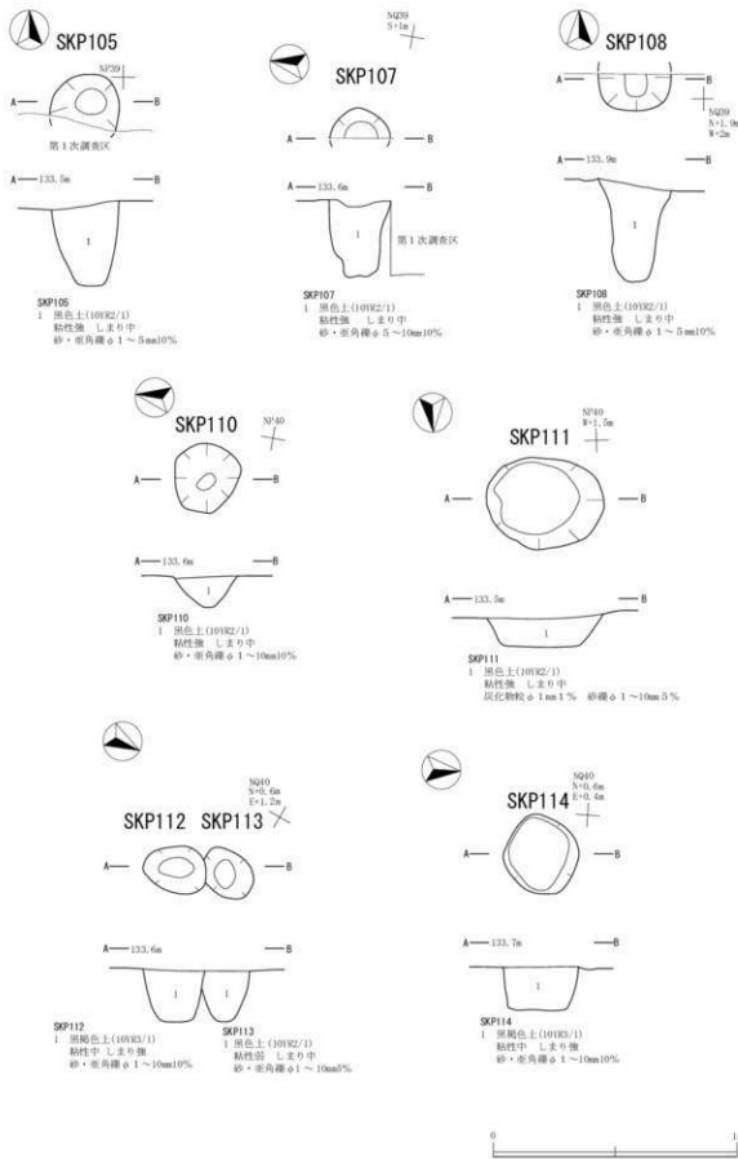
第4章 調査の記録



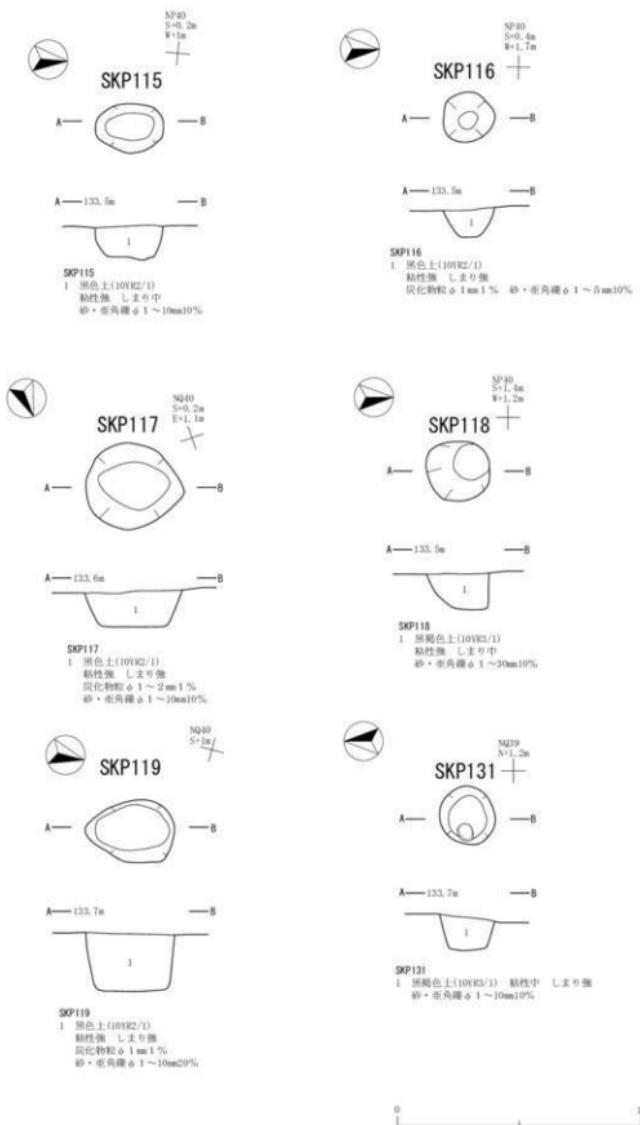
第6図 SR130土器埋設遺構・SQ101立石遺構・SN120焼土遺構・SX122・123・124赤色顔料撒布跡



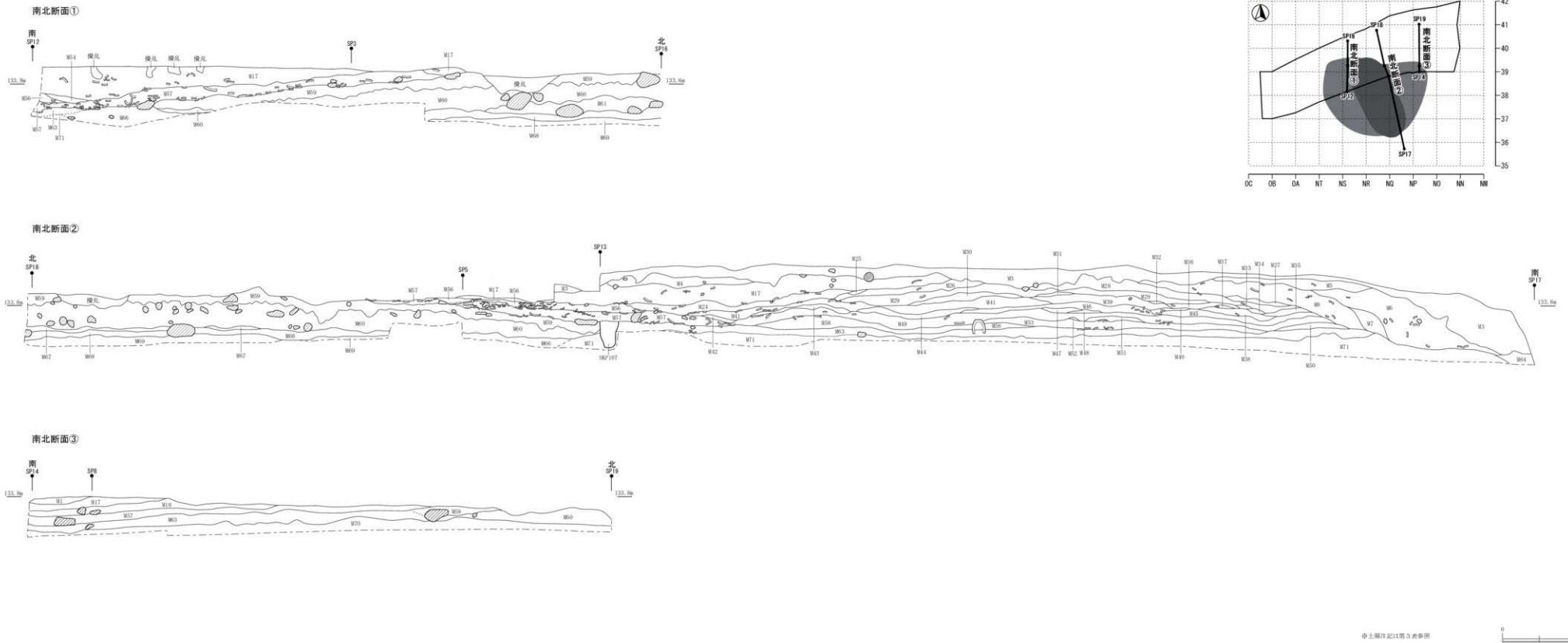
第7図 SQ127配石遺構



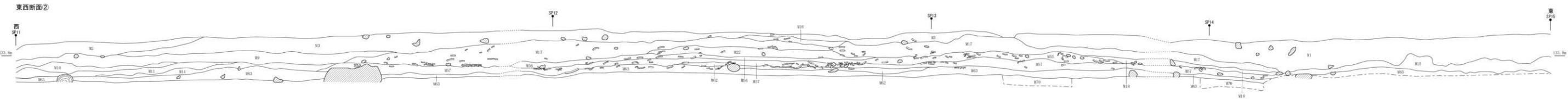
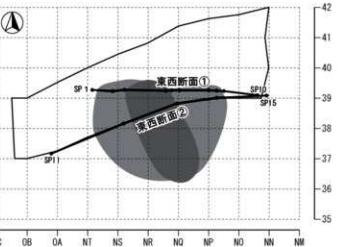
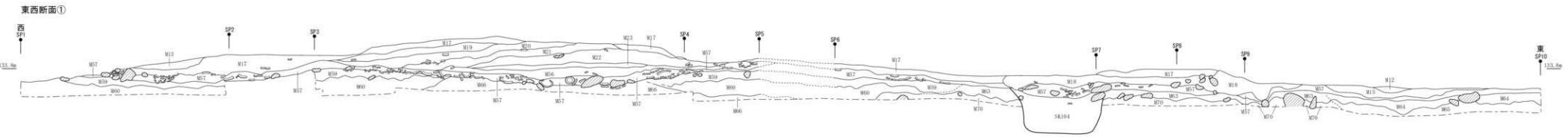
第8図 SKP105・107・108・110・111・112・113・114柱穴様ピット



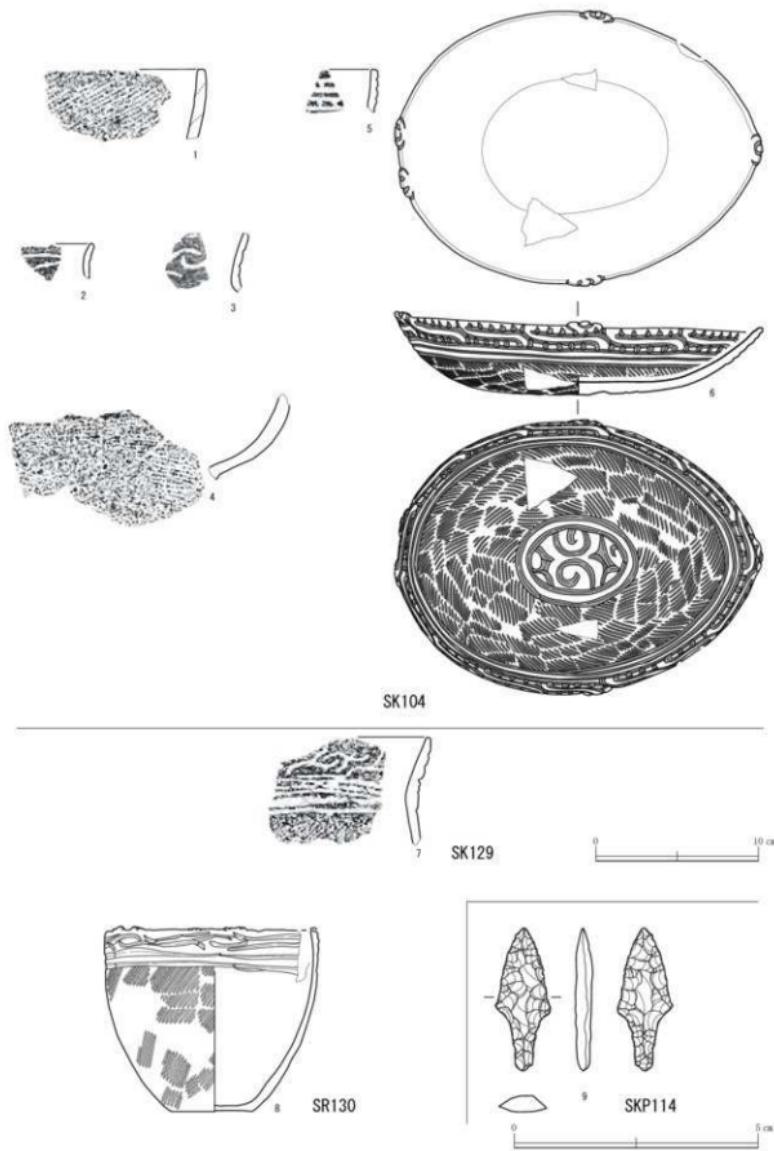
第9図 SKP115・116・117・118・119・131柱穴様ビット



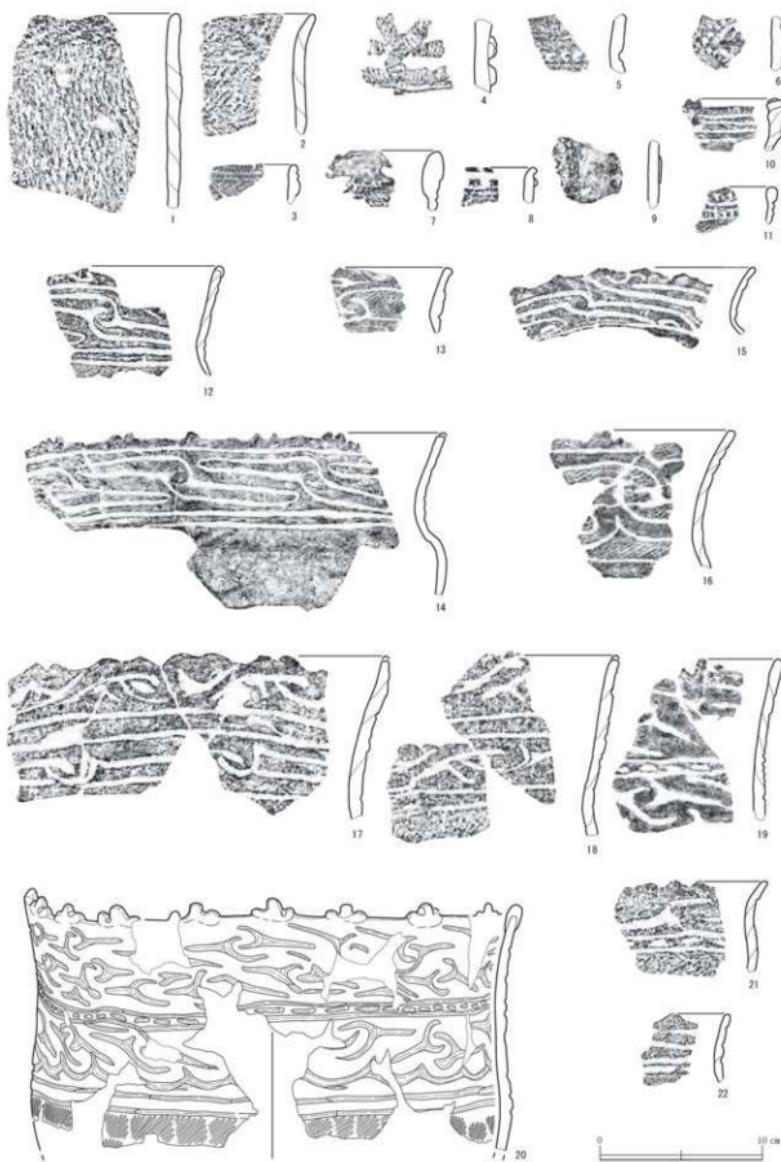
第10図 SM60土層断面(1)

0
m

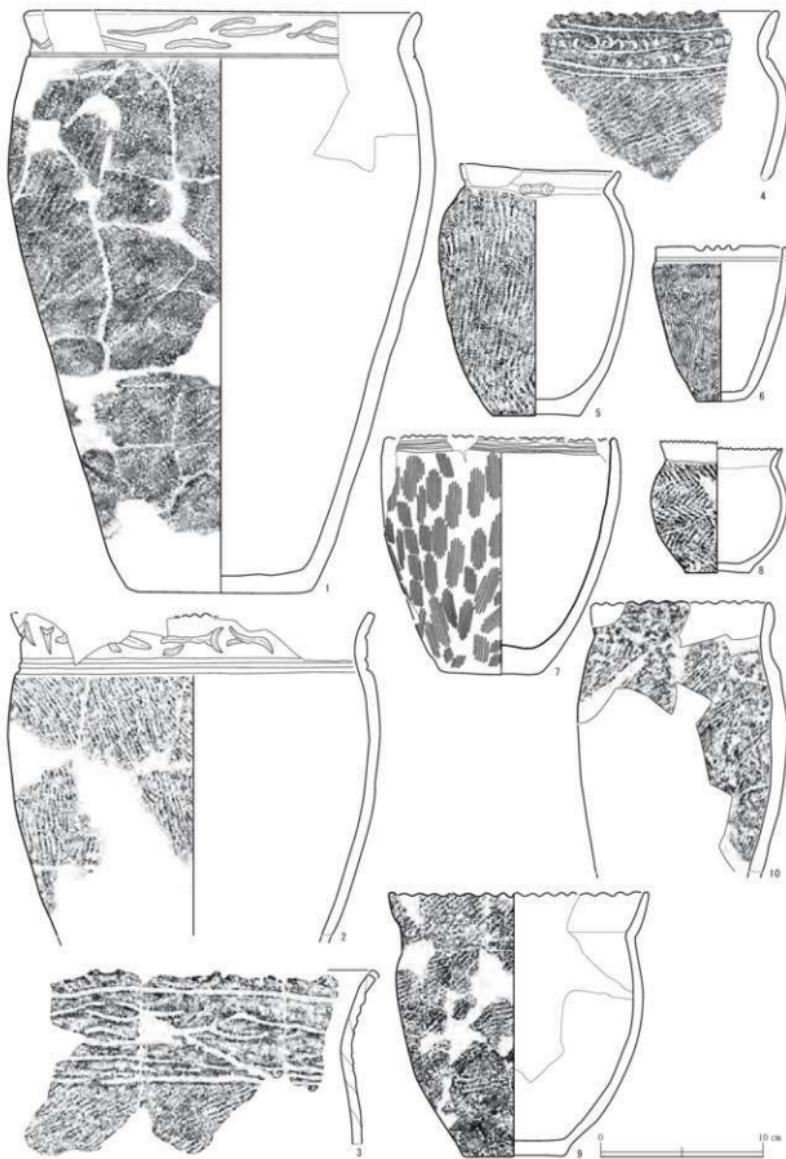
第11図 SM60土層断面(2)



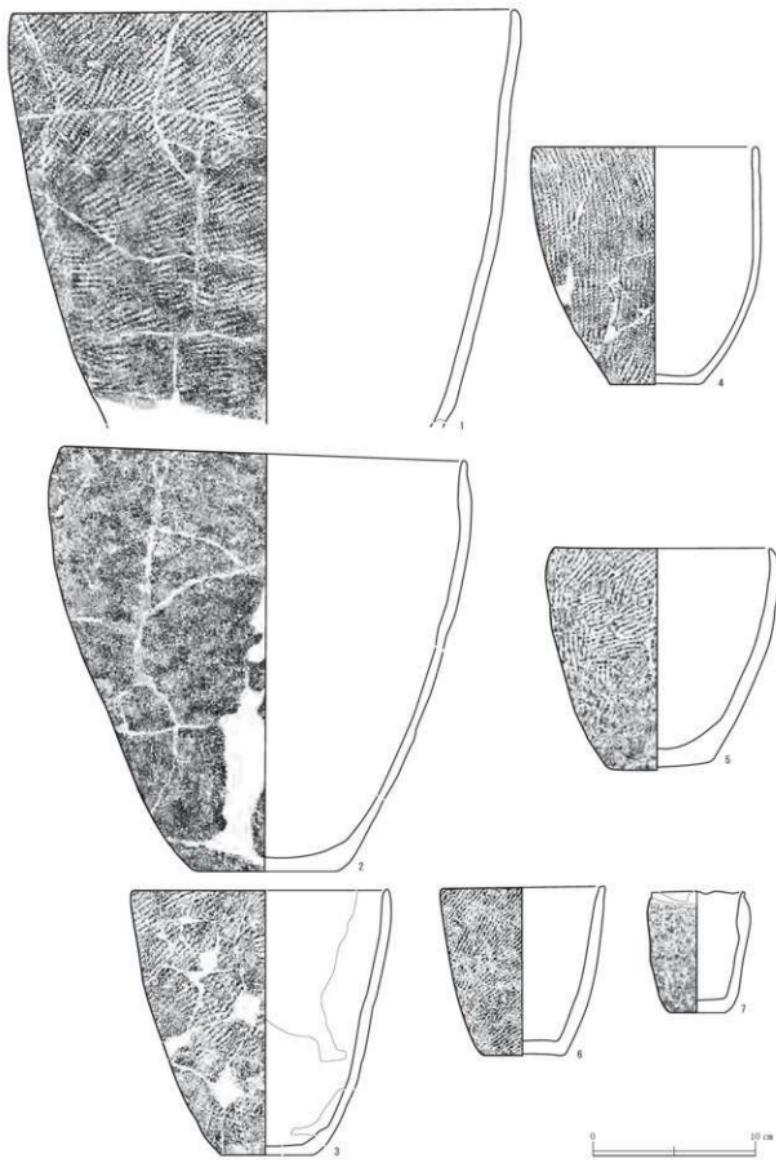
第12図 SK104・SK129・SR130・SKP114出土遺物



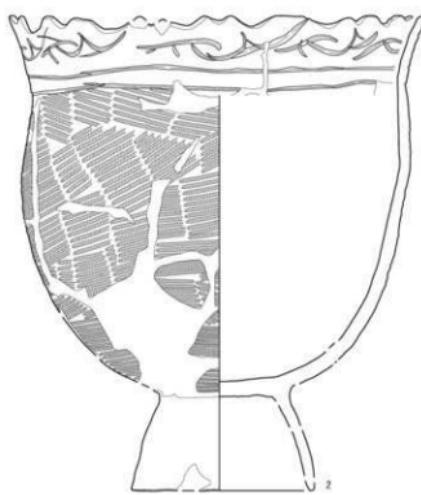
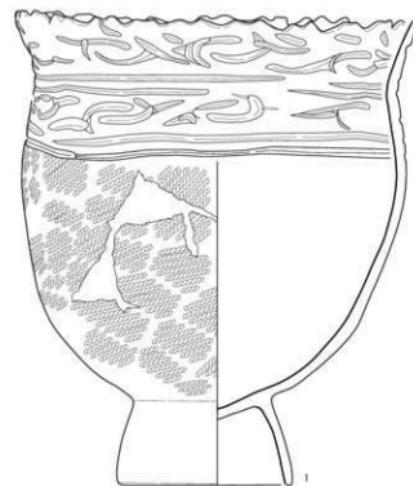
第13図 SM60出土遺物(1)



第14図 SM60出土遺物(2)



第15図 SM60出土遺物(3)



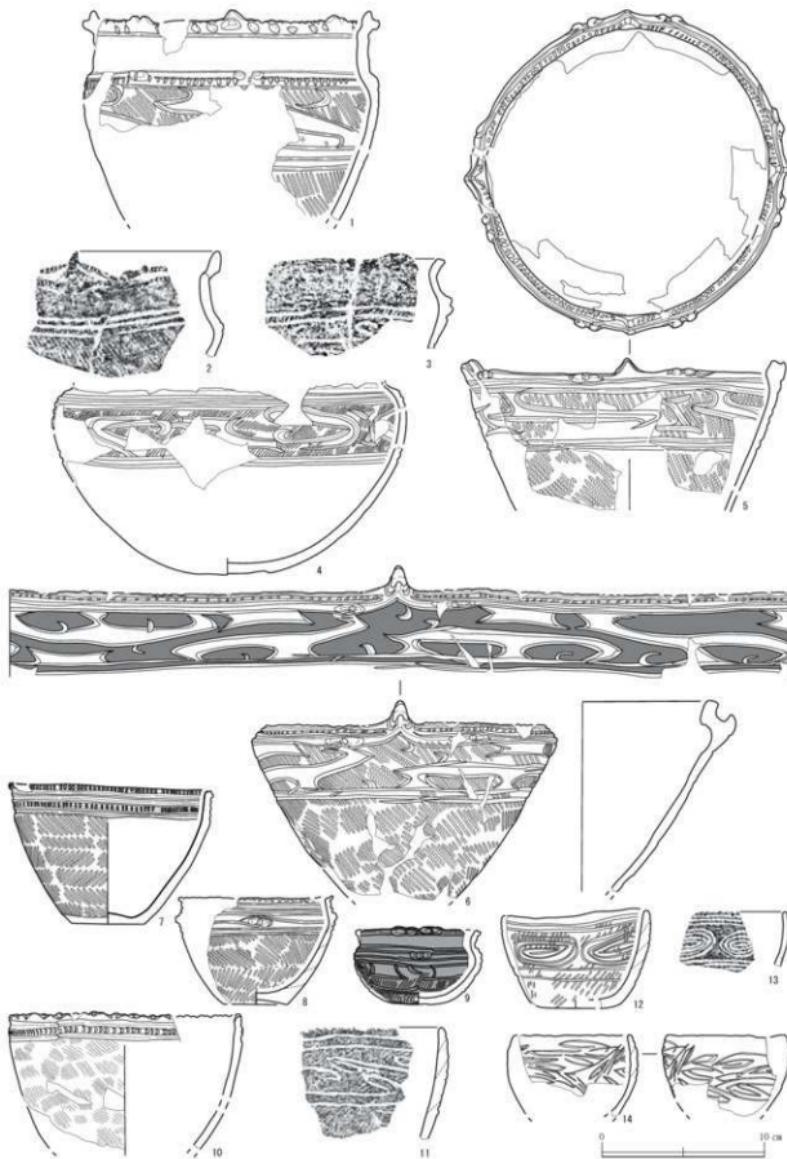
第16図 SM60出土遺物(4)



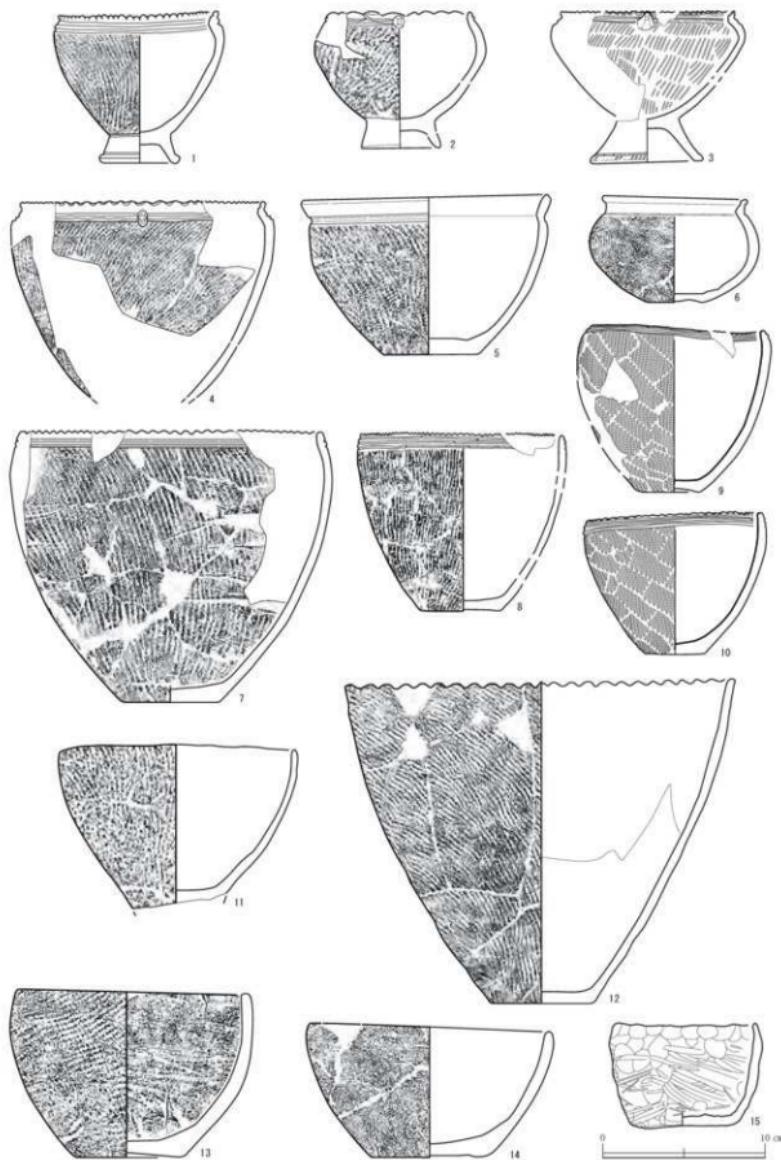
第17図 SM60出土遺物(5)



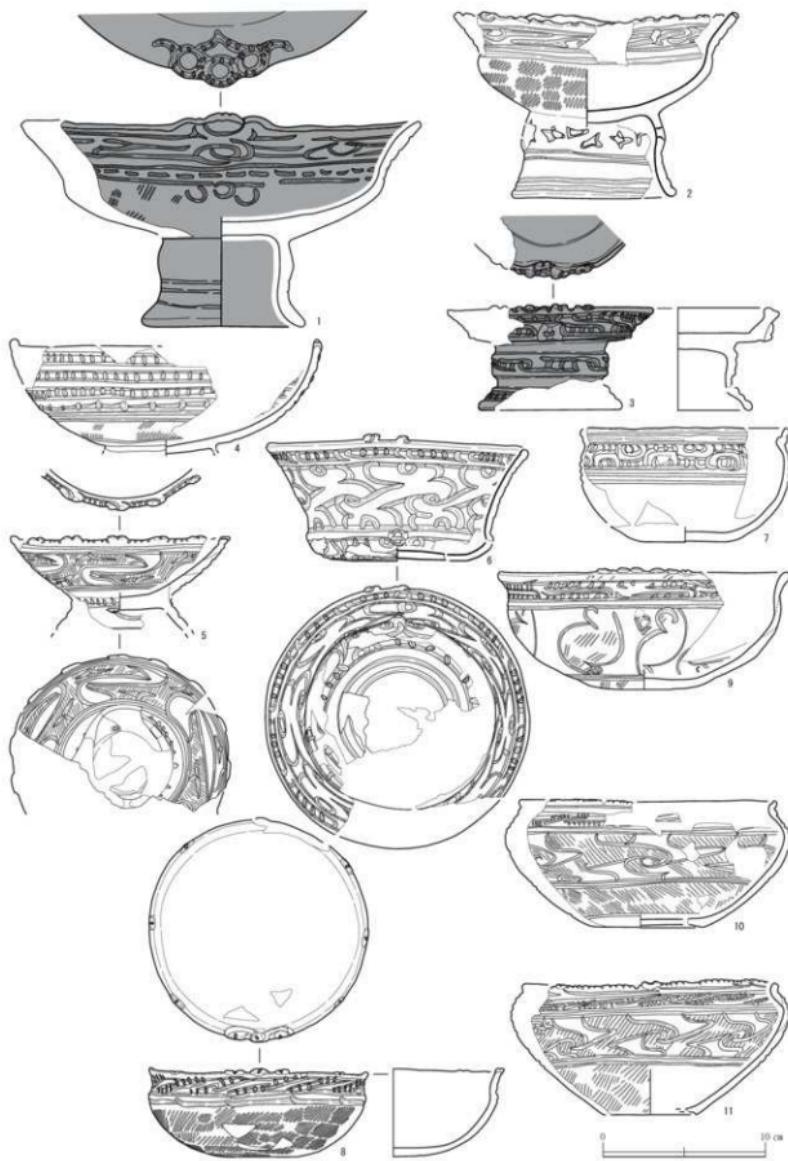
第18図 SM60出土遺物(6)



第19図 SM60出土遺物(7)



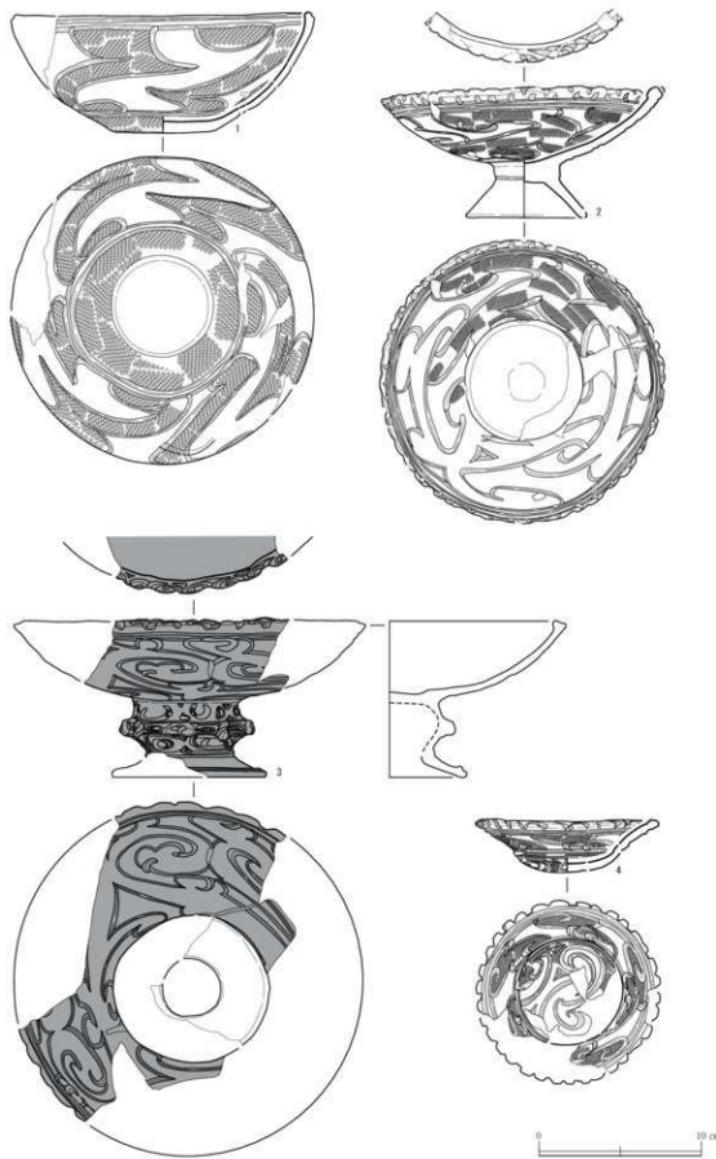
第20図 SM60出土遺物(8)



第21図 SM60出土遺物(9)



第22図 SM60出土遺物(10)



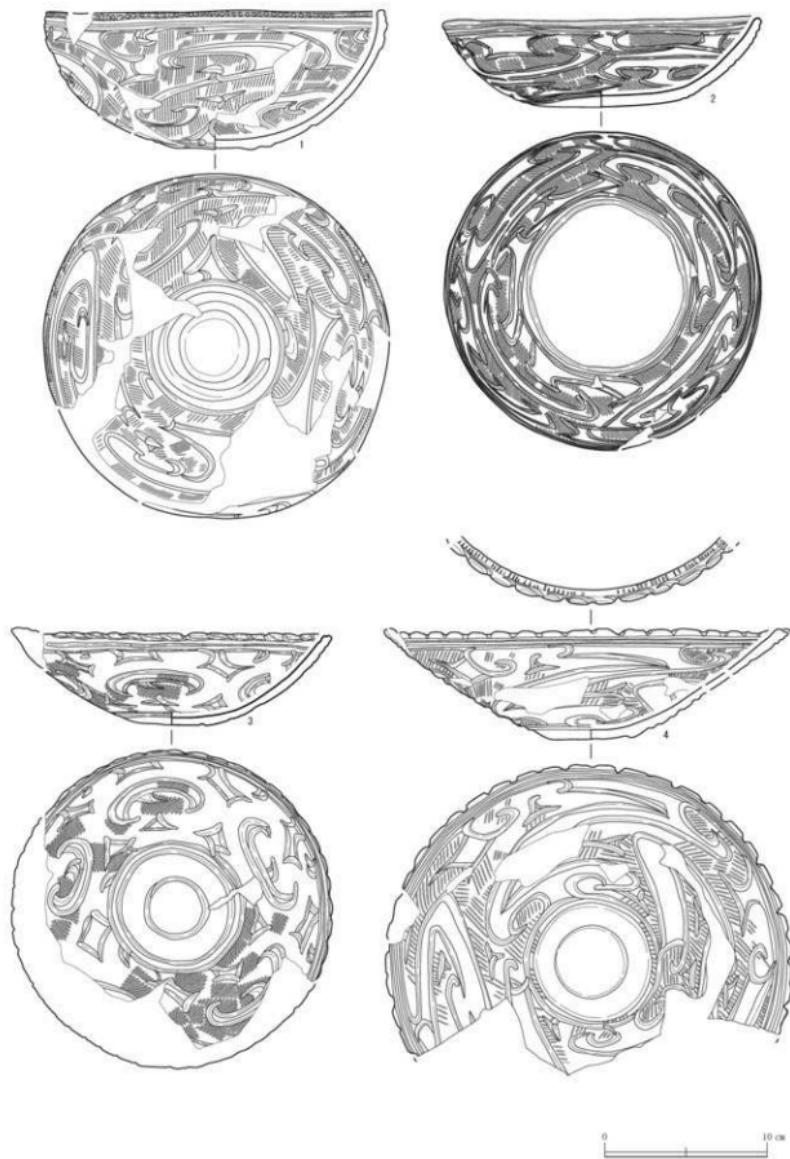
第23図 SM60出土遺物(11)



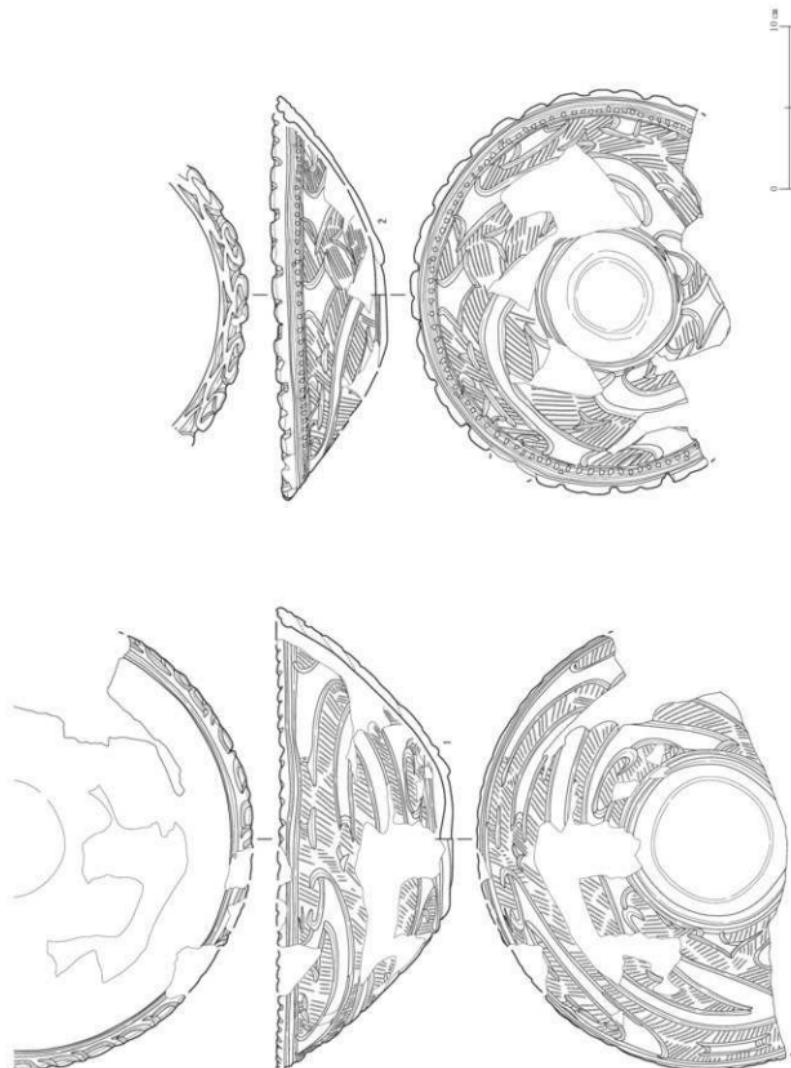
第24図 SM60出土遺物(12)



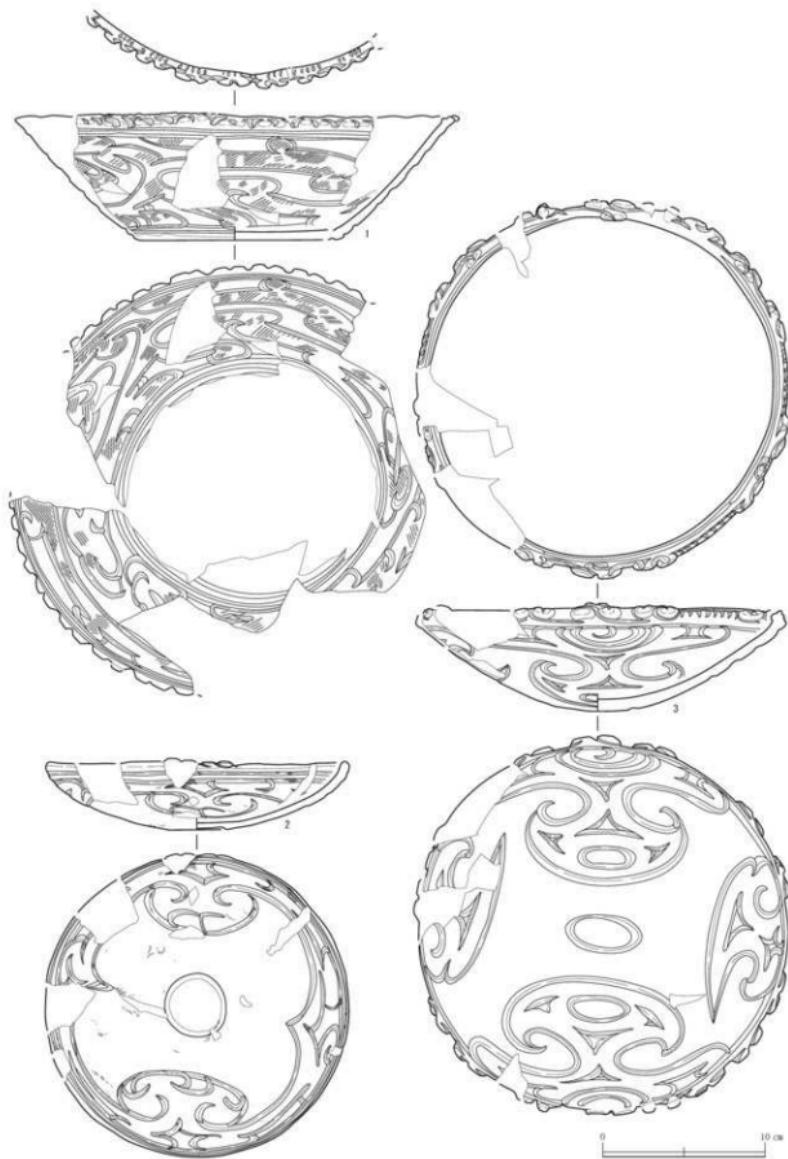
第25図 SM60出土遺物(13)



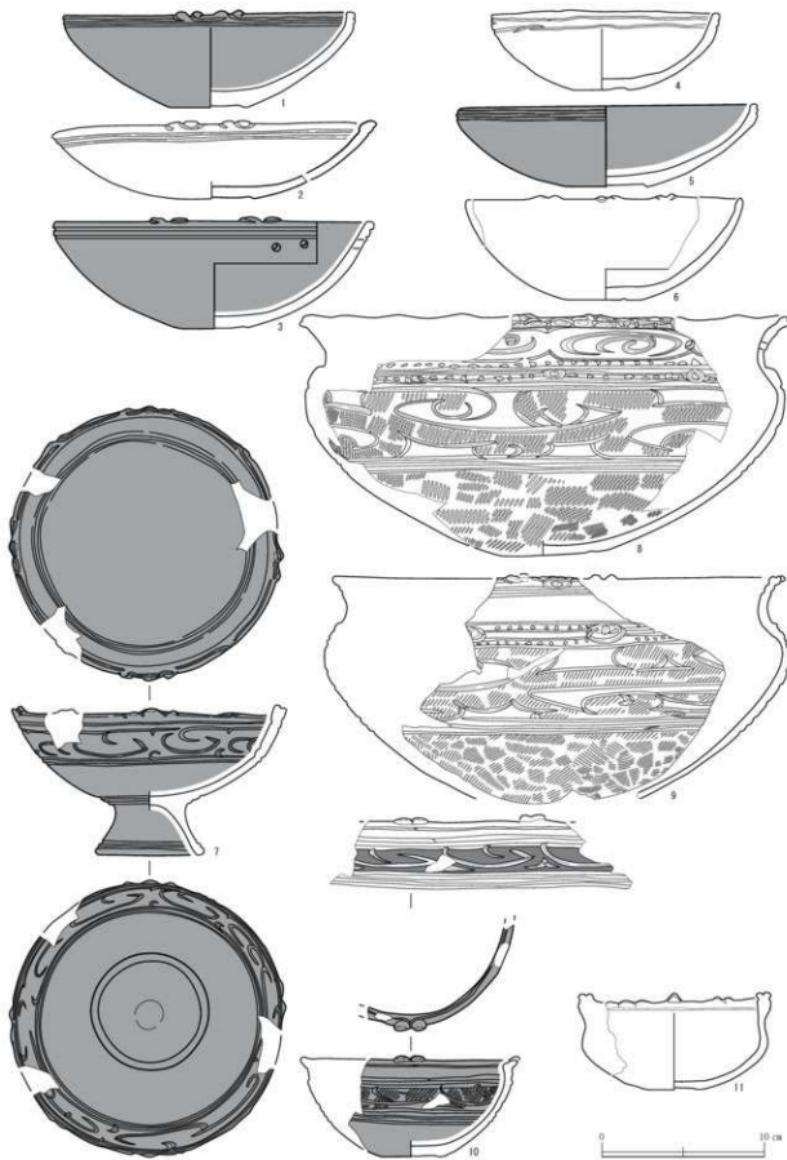
第26図 SM60出土遺物(14)



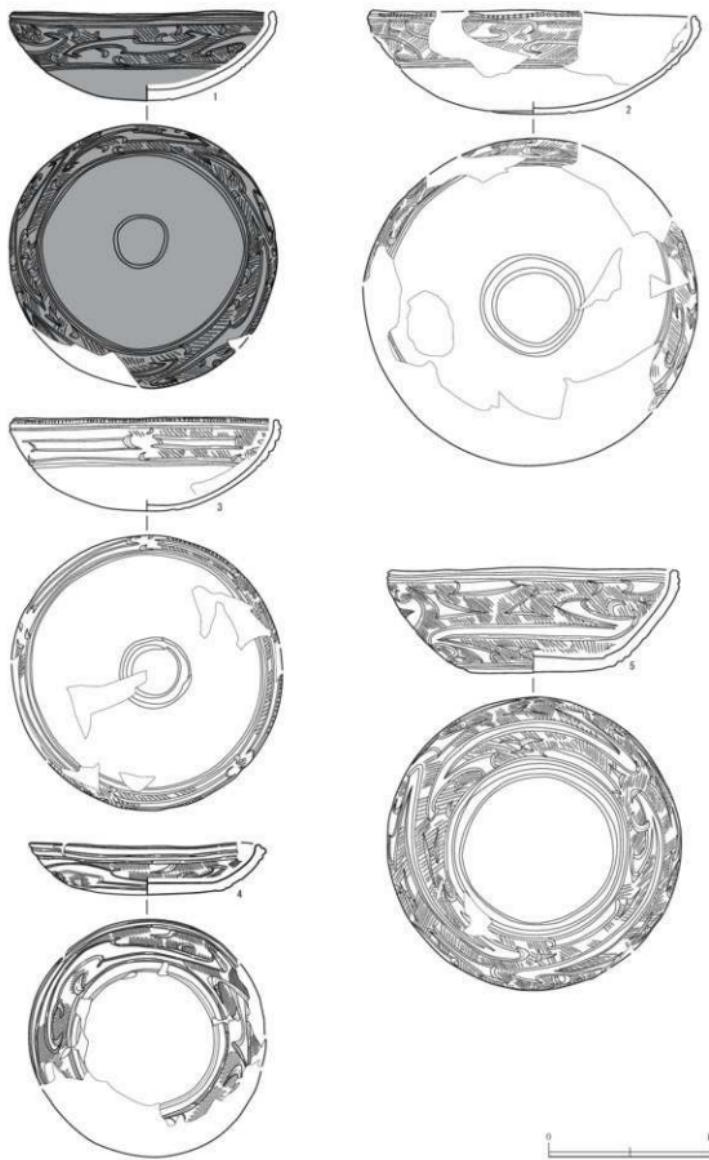
第27図 SM60出土遺物(15)



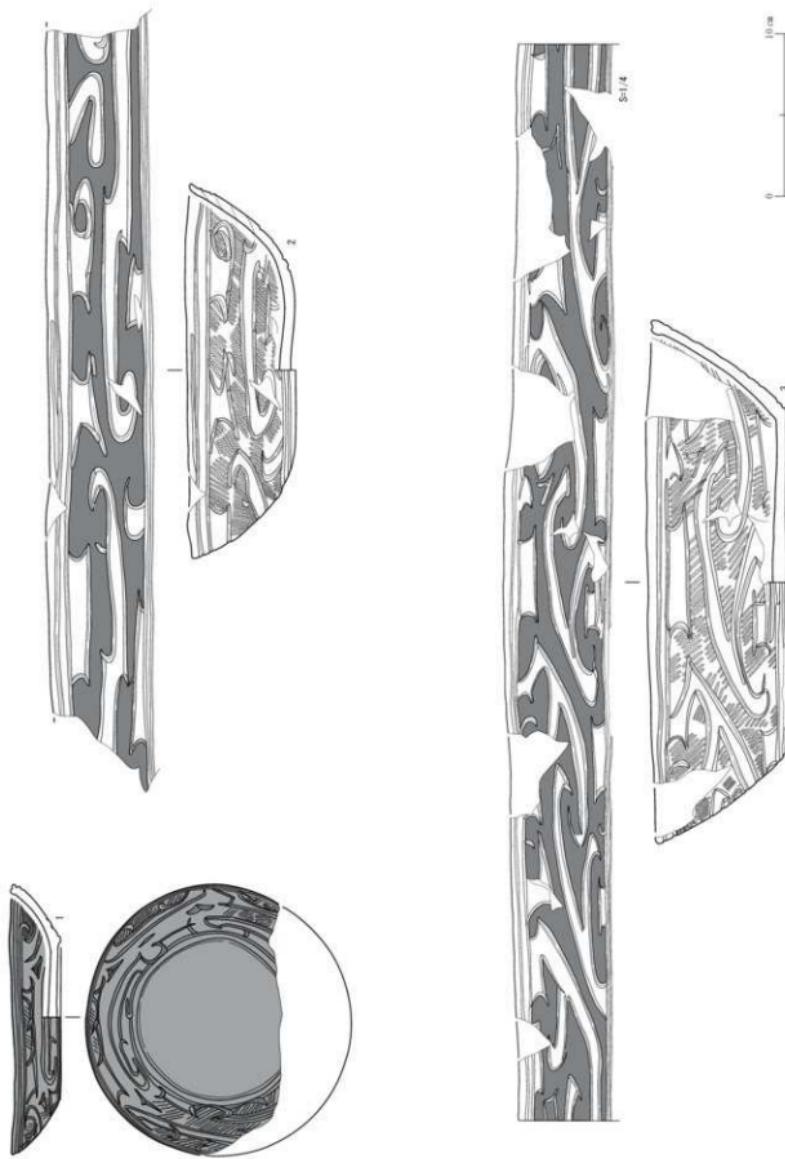
第28図 SM60出土遺物(16)



第29図 SM60出土遺物(17)



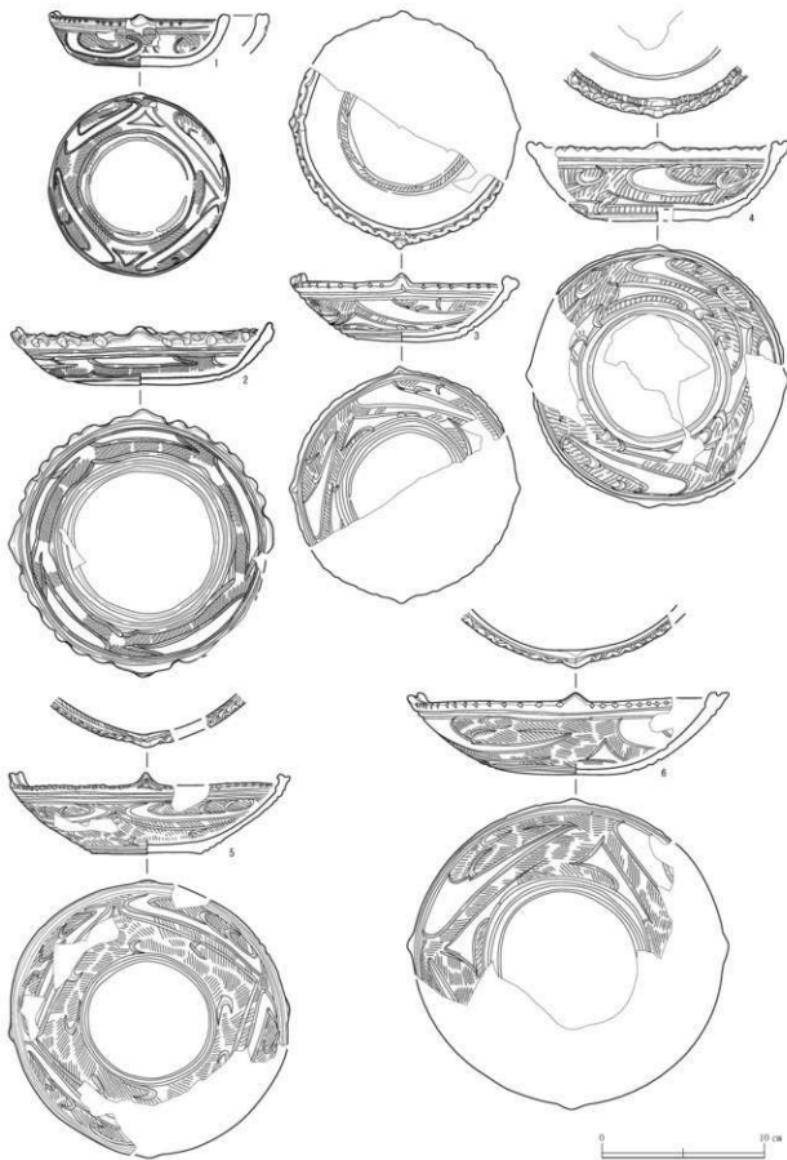
第30図 SM60出土遺物(18)



第31図 SM60出土遺物(19)



第32図 SM60出土遺物(20)



第33図 SM60出土遺物(21)